



「友馬っつ！」

地元の学校に通うごく普通の男子生徒、平野友馬（ひらの ゆうま）。
幼馴染である倉原結那（くら はら ゆいな）が声をかける。



友馬「毎日毎日、5分遅刻しやがって：微妙に指摘しようか迷うラインを攻めてくるな」

結那「あははっ何だかんだ結局待っててくれるもんね友馬は♪」

家も隣同士で小さい頃からずっと一緒だった。

当たり前のように同じ学校へ進学し、当然のように一緒に登校する。



年頃なので周りにそんな関係をからかわれることもあるが、友馬は悪い気はしなかった。

結那は明るく活発な性格であるため、学年や男女関係なく好かれている。

結那がみんなから大事に思われていることは嬉しいが、一番に想っているのは俺だと、自分がこれからも結那の隣で見守ってやるんだと友馬は想っていた。

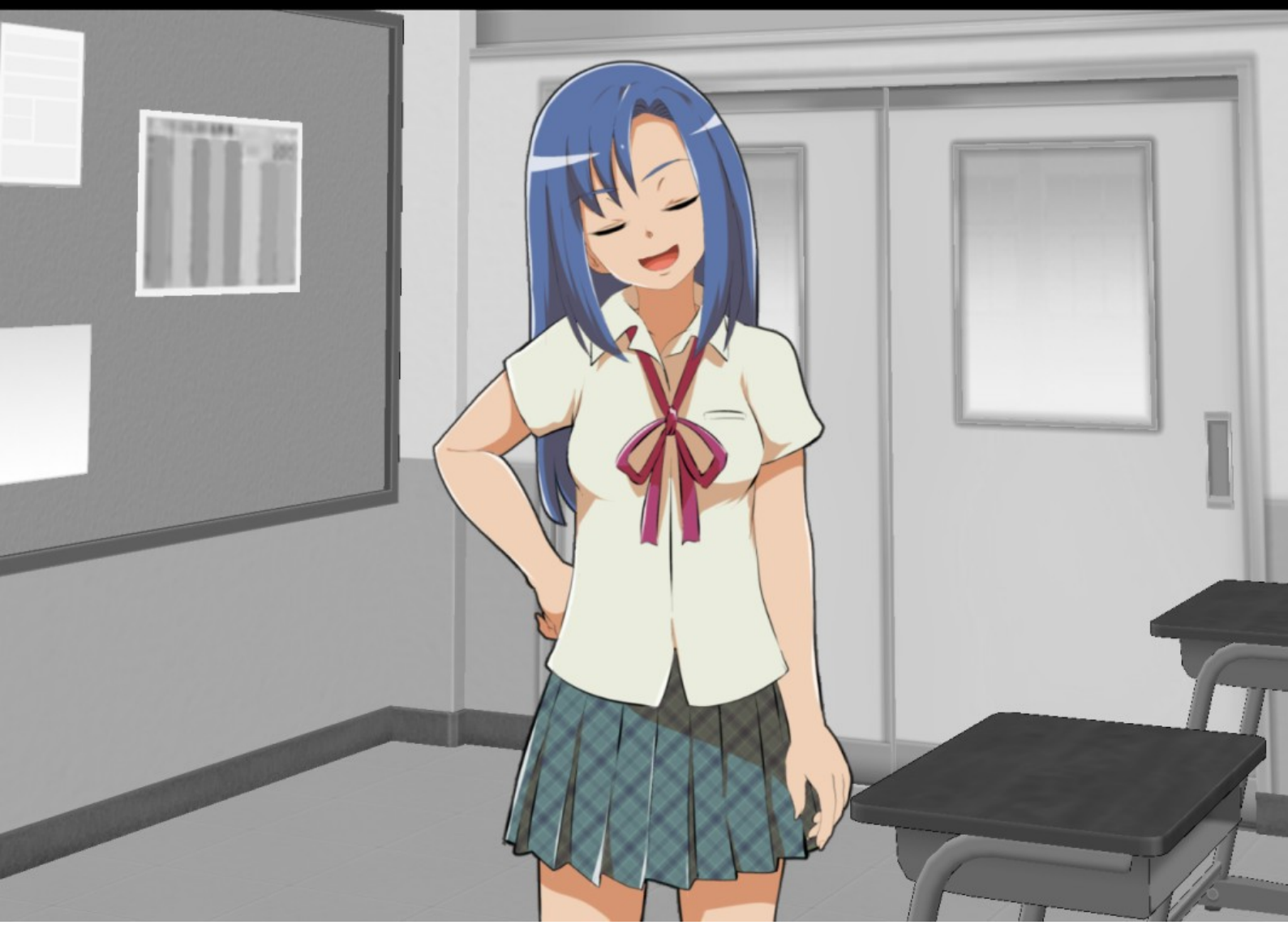


— 放課後

結那「はあゝ…友馬帰ろゝ！」

「あ、待て倉原」

結那「ん？」



授業、そしてミーティングが終わりさつ
さと下校しようとする結那。

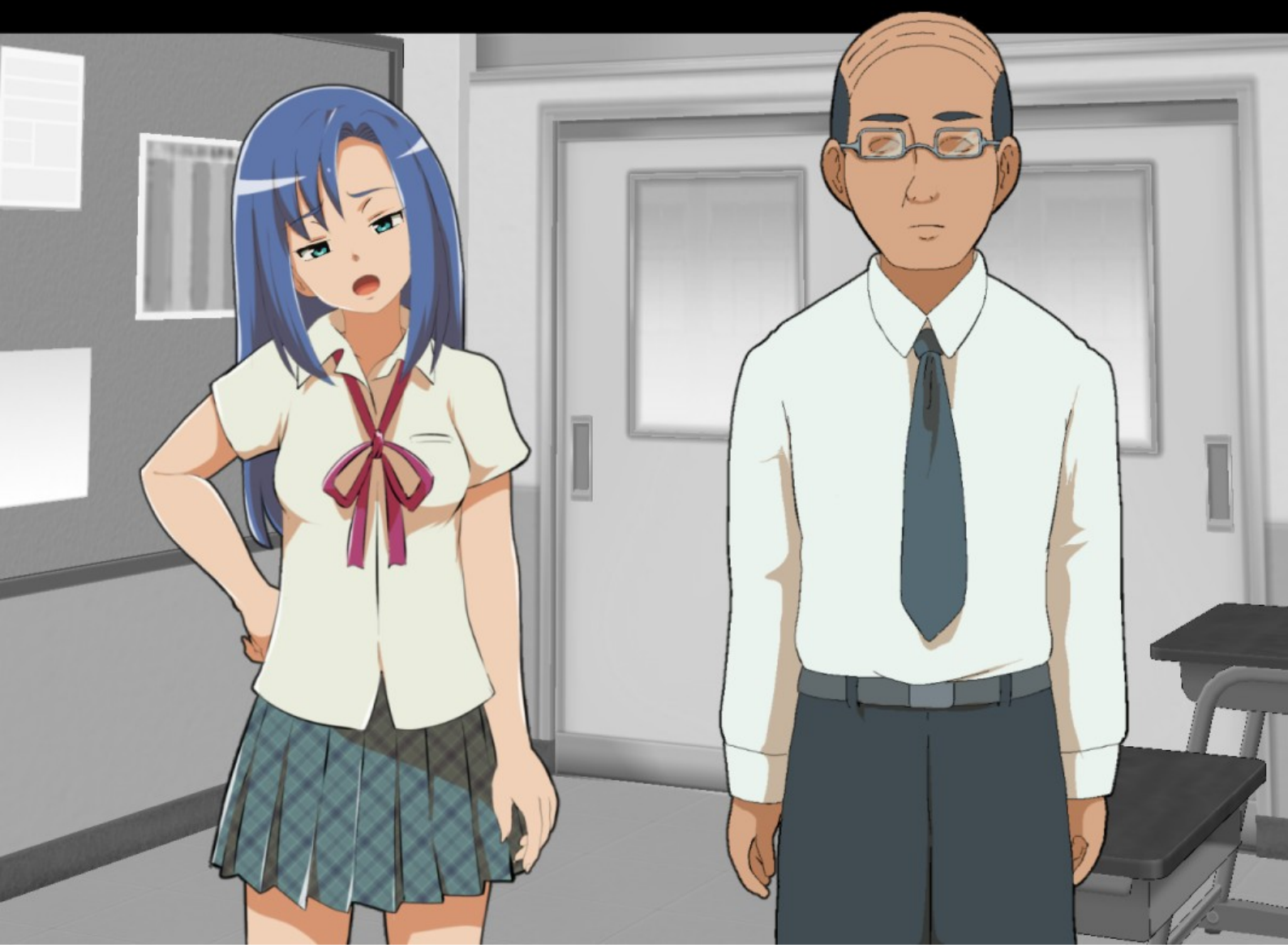
担任の吉田文雄（よしだ ふみお）先生に
止められる。

吉田「お前今日は日直だろ、ちよつと手伝
つてほしい事あるんだが」
結那「ええゝマジで…？」

吉田は結那に授業で使った教材を旧校
舎まで運ぶのを手伝ってほしいと頼んで
いた。

あからさまに面倒そうな返答をしたが、
日直であるなら雑務の一つであるし、さつ
さと済ませば時間はかからない。

友馬にそう言われ、渋々手伝った。

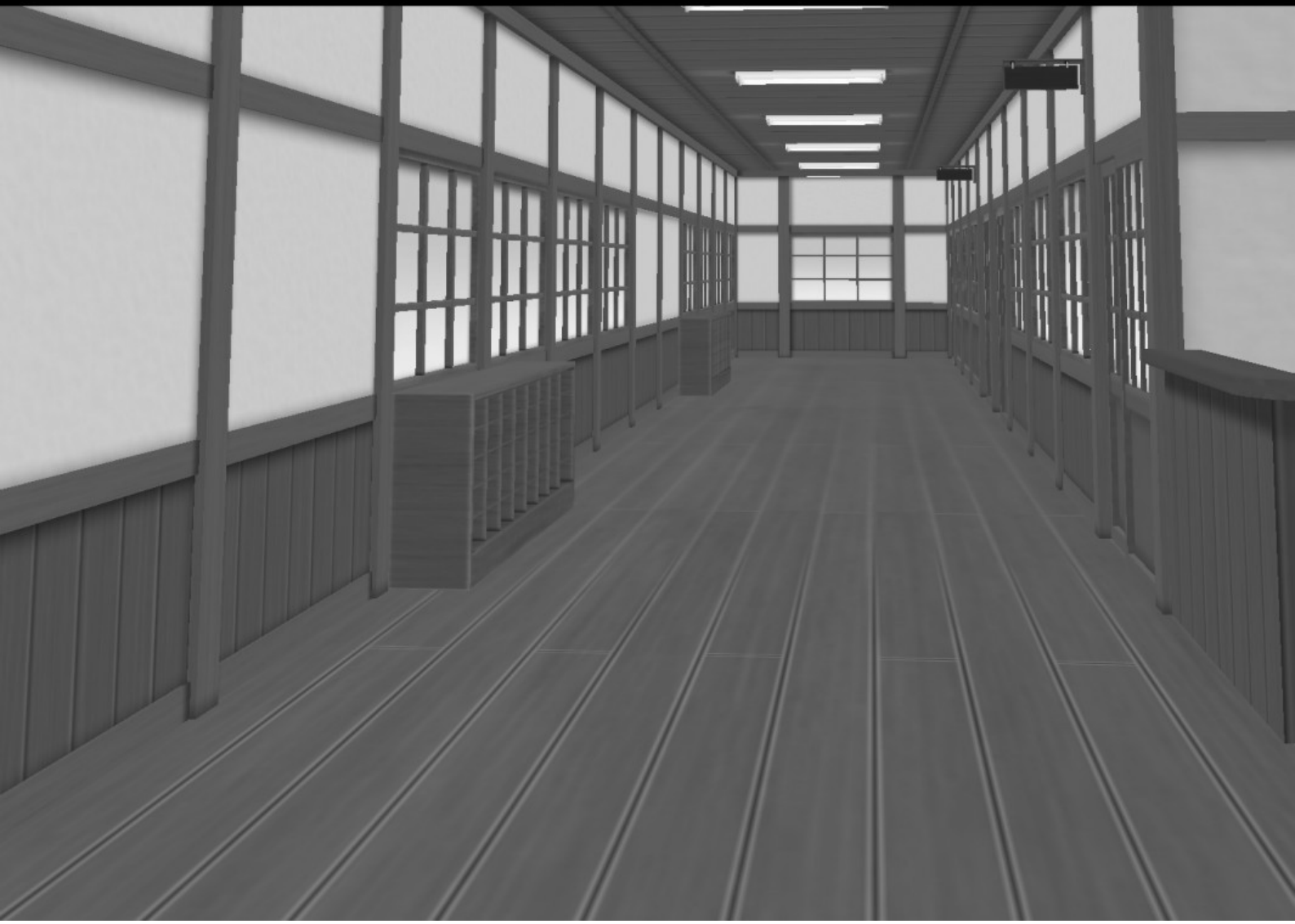


結那が戻ってくるまで教室で待っていた友馬だったが、10分…20分経っても結那は来なかった。

連絡しようと思ったが、結那本人もすぐ戻ってくるつもりだったので友馬に預けたカバンに結那のスマホは入っている。

心配になって様子を見に来た、なんて言ったら結那はきっと笑うだろうがそれでも友馬は何かを感じ、教室を出た。

放課後にもなれば生徒も教師もほとんど来ることはない旧校舎。



友馬「……結那!!」

空き教室と言っても旧校舎のほとんどがそうだった。

とりあえず一階から見ていこうと思っ
ていたら、すぐに見つけられた。

ある教室の出入り口から脚が見えた。

スカートだったので女子生徒だろう、
というか結那で間違いないだろうと確信
して近づく。



結那は横たわっていた。

教室内には吉田先生もうつ伏せで倒れていた。

驚きながらも二人に声をかける。

結那「すーっ…すーっ…」

…ただ寝ているだけだった。

とりあえず安心したが、この場合ただ寝ているだけなんて説明で片付く状況ではないと友馬は意識を切り替える。



二人が同じタイミングで急に寝るなんてことがあるのか。

友馬（…俺が来るのを見越して、ドツキリ的なことしてるのか…？）

と、友馬は思ったが、結那はまだしも吉田先生までそんなおふざけに付き合うわけがない。



友馬「…っ…??？」

頭で色々考えていたら意識がボウッとしてきた。

体に力が入らず、尻もちをつく形でペタンと床に座り込む。

友馬「…っ」

瞼が重く感じ出した。

自然と視界が狭まった。



—
o

—

—

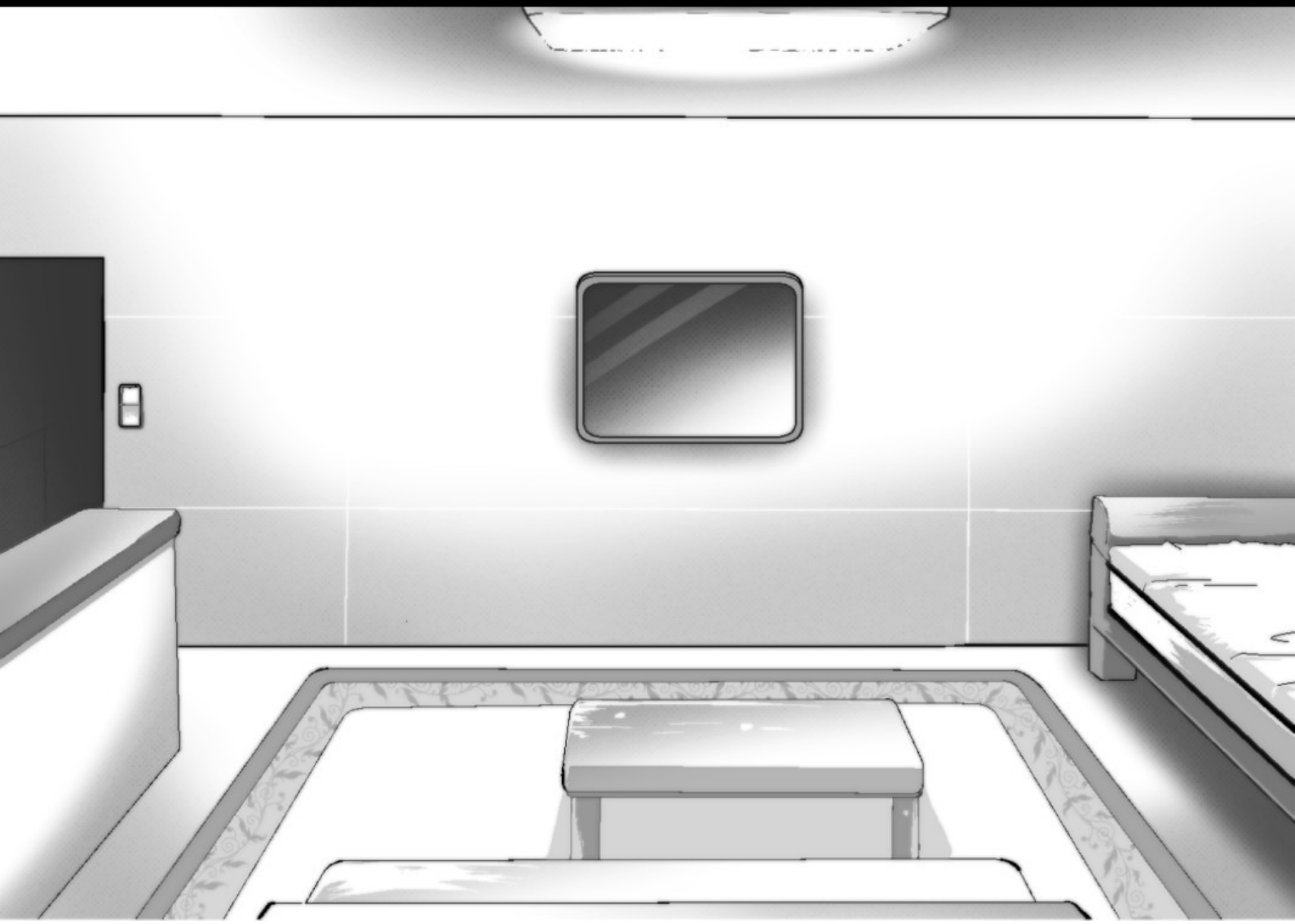
目を覚ますと友馬は壁も天井も真っ白なワンルームの床に仰向けに寝転がっていた。

白いベッド。白いソファ。白いテーブル。意味あり気に壁に掛けられているテレビモニター。

最低限の家具、生活を監視するための簡易個室のようで、妙に整っているのが逆に不気味だった。

状況がまったく理解ない友馬。

夢なのか現実なのか、その境目すら曖昧だった。



友馬「……！結那!!」

よく見たら向こう側で結那が横にな
っていた。吉田先生もいる。

友馬「痛って……!」

近づこうとした友馬は何かにつつか
った。



???何もない…。

が、明らかに手に何かが触れた感覚がある。硬い何かが。

それは分厚いガラス面のようなものだった。

見えない何かが壁一面に張り巡らされていて、向こうに、結那のほうへ行くことができない。

結那「ん…」

吉田「…ぐっ」

二人が目を覚ました。



まだ意識がボーっとしているようだった
が置かれている状況を確認して徐々に動揺
しだしているのが分かった。

結那「…なに、ここ…??」

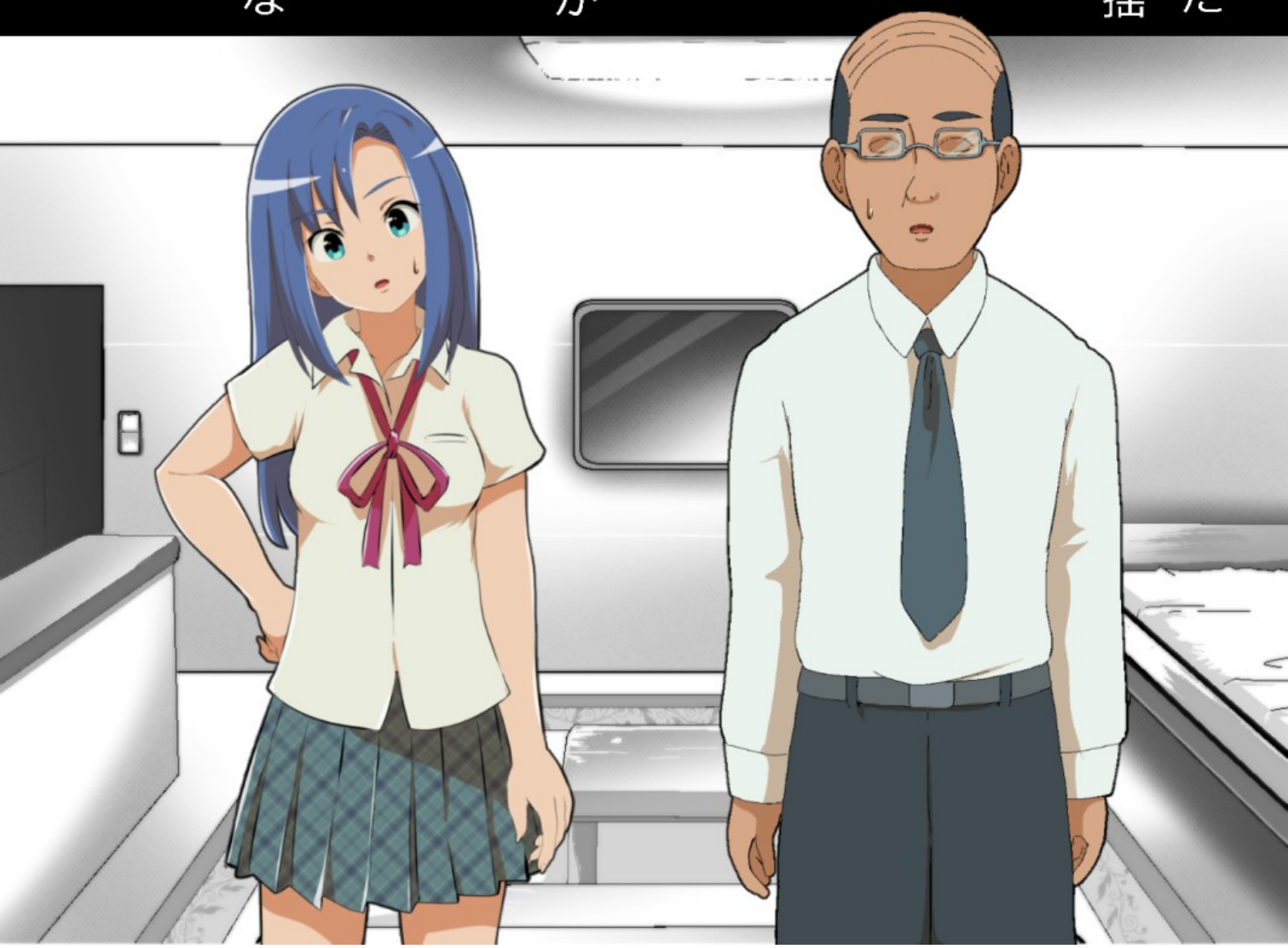
吉田「倉原、怪我はないか？」

結那「は、はい…」

吉田は教師として教え子が無事かどうか
を確認する。

友馬にはそんな行動が頼もしく思えた。

しかしこの状況は未だに意味が分からな
い。



結那「~~~~っ?」

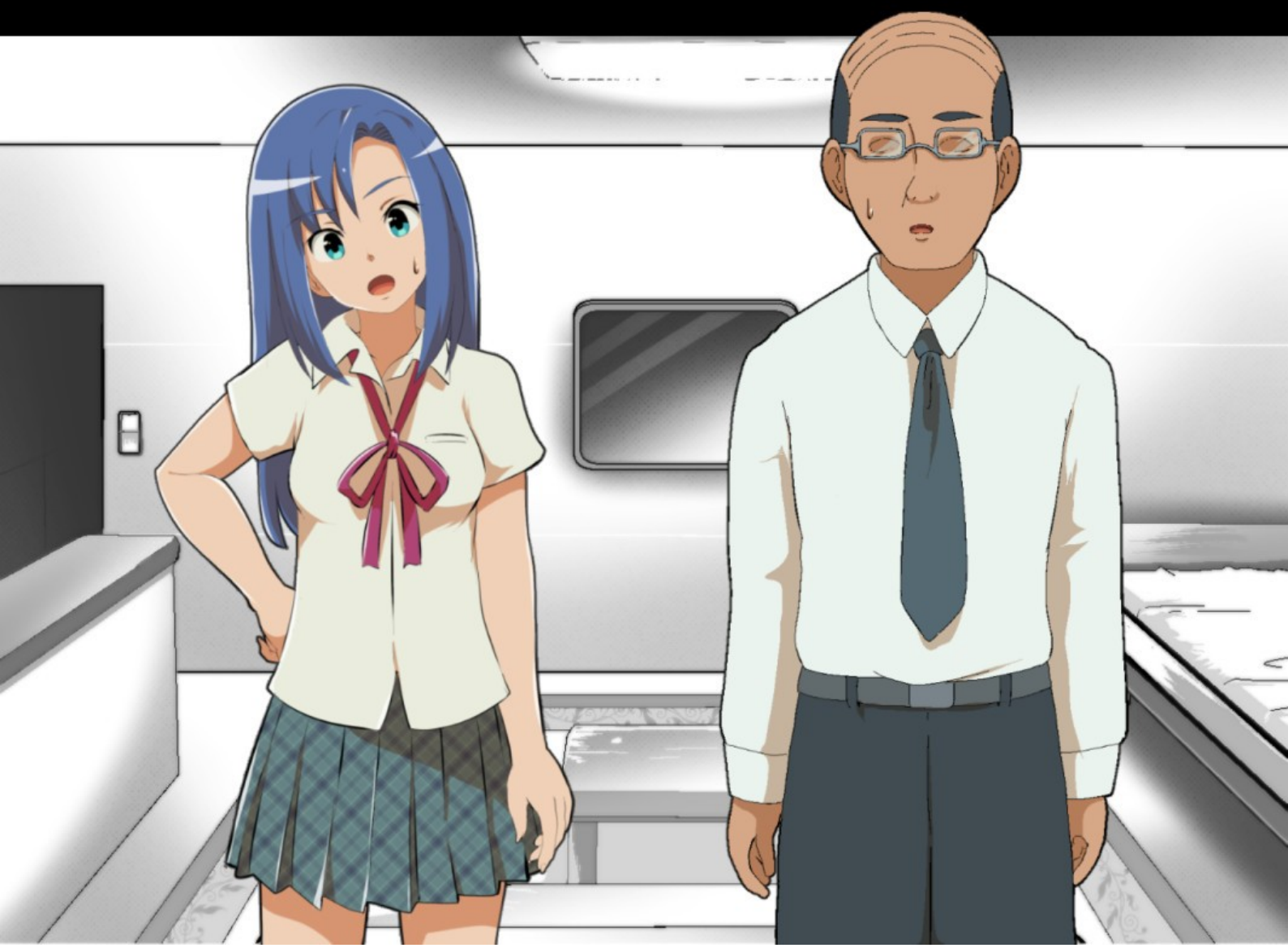
吉田「~~~~…」

二人は不安そうな表情を浮かべながら
あれこれ会話している。

友馬「…」

…友馬がそれ以上に先ほどから不思議
に思っていること。

友馬「二人とも…なんで俺のこと無視し
てるんだ…?」



会話がかみ合わない、というより友馬の会話だけがまったく干渉されていない。

友馬は見えない壁をコンコン叩く。

まったく見向きもしない二人。

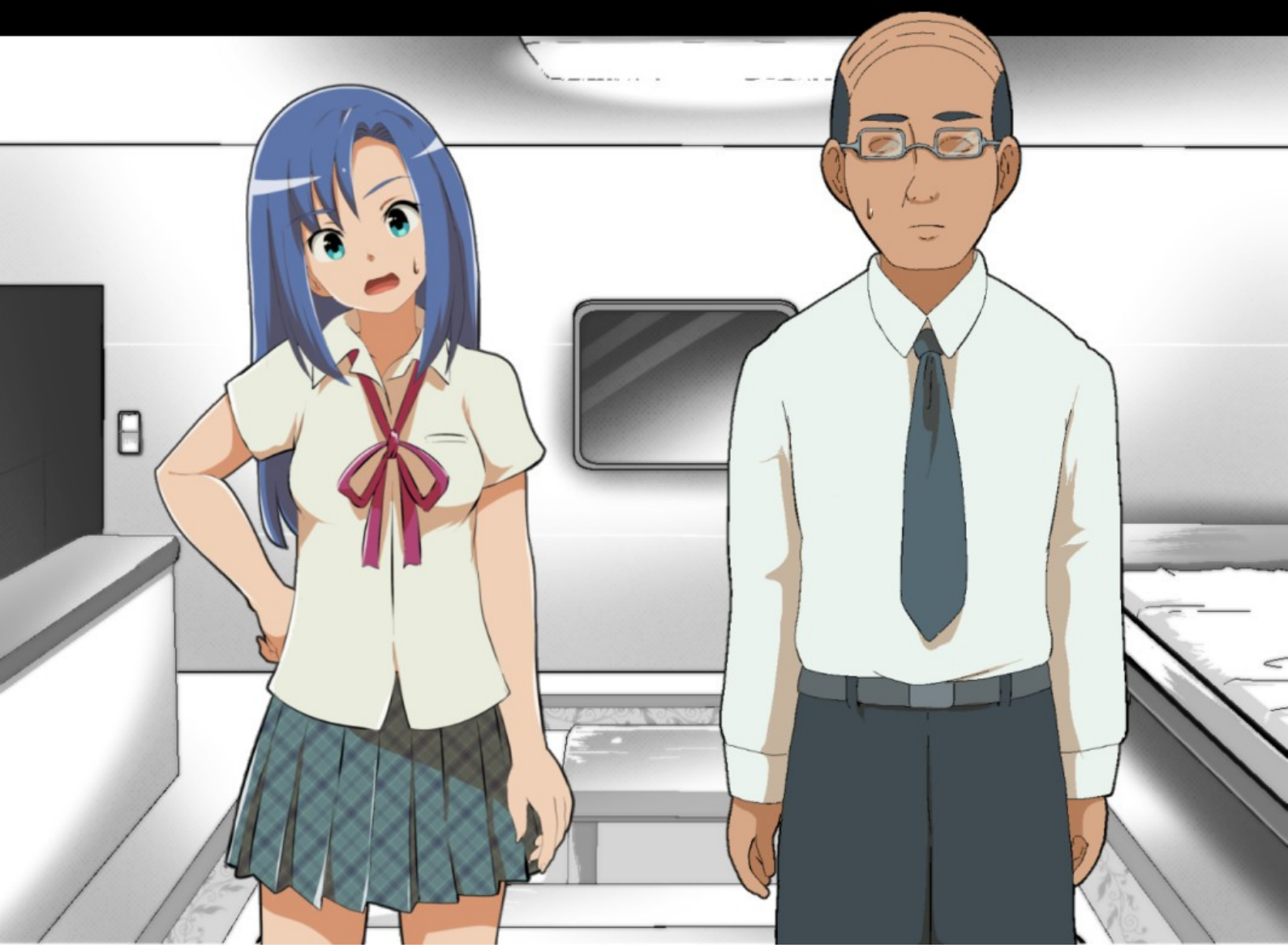
他にもいろいろ試してみた。

友馬「……！」

結果、この見えない壁は……正確には限定的に見えない壁は、

【結那と吉田の二人にだけ

友馬の姿が全く見えていない】



友馬からは二人のことも、二人のいる空間もすっかり確認できる。

しかし二人からはなぜか、友馬側が一切見えていないようだ。

こんなことがあるのだろうか。

マジックミラーと呼ばれる物もあるが

それとは完全に似て

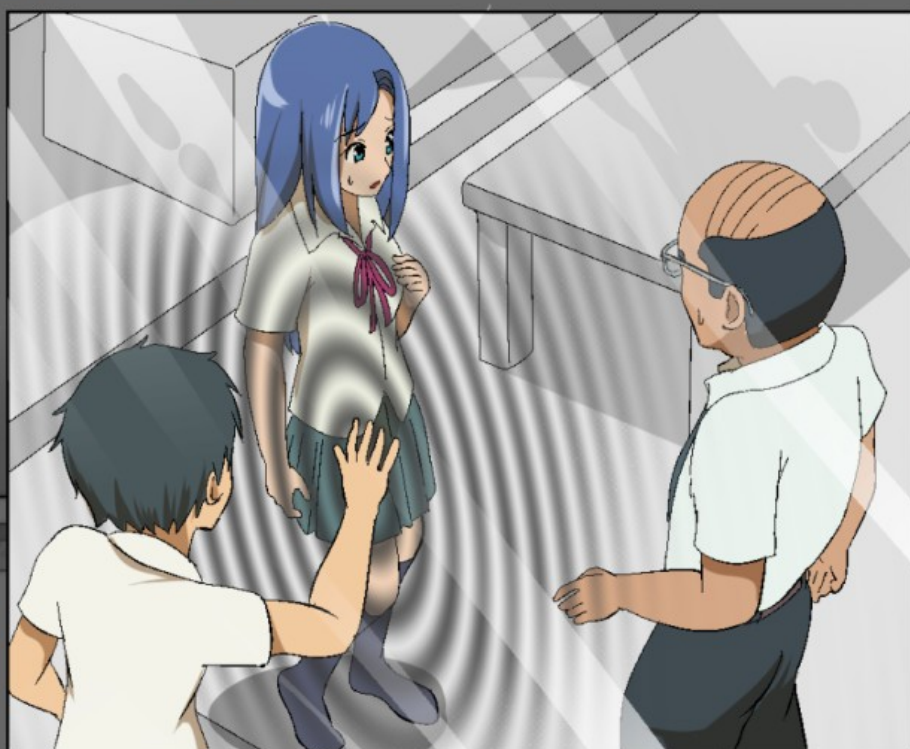
異なるモノだ。

科学的に見えないの

ではなく、魔法のよう

な、まるで説明のつか

ないような感じだった。



その折、壁に掛けられたテレビモニターが急に点いた。

これ見よがしというか、いかにも意味ありげに設置されていたモニターだ。

『イチャラブバカップルに

ならないと出られない部屋』

『この部屋から出る方法はただひとつ。二人が相思相愛の “イチャラブバカップル” になることです。頑張ってください。』

『イチャラブバカップルにならない
出られない部屋』

『この部屋から出る方法はただひとつ
あなたが二人が相思相愛の
“イチャラブバカップル”
になることです。頑張ってください』

そうメッセージが表記された。
続けて追記される。

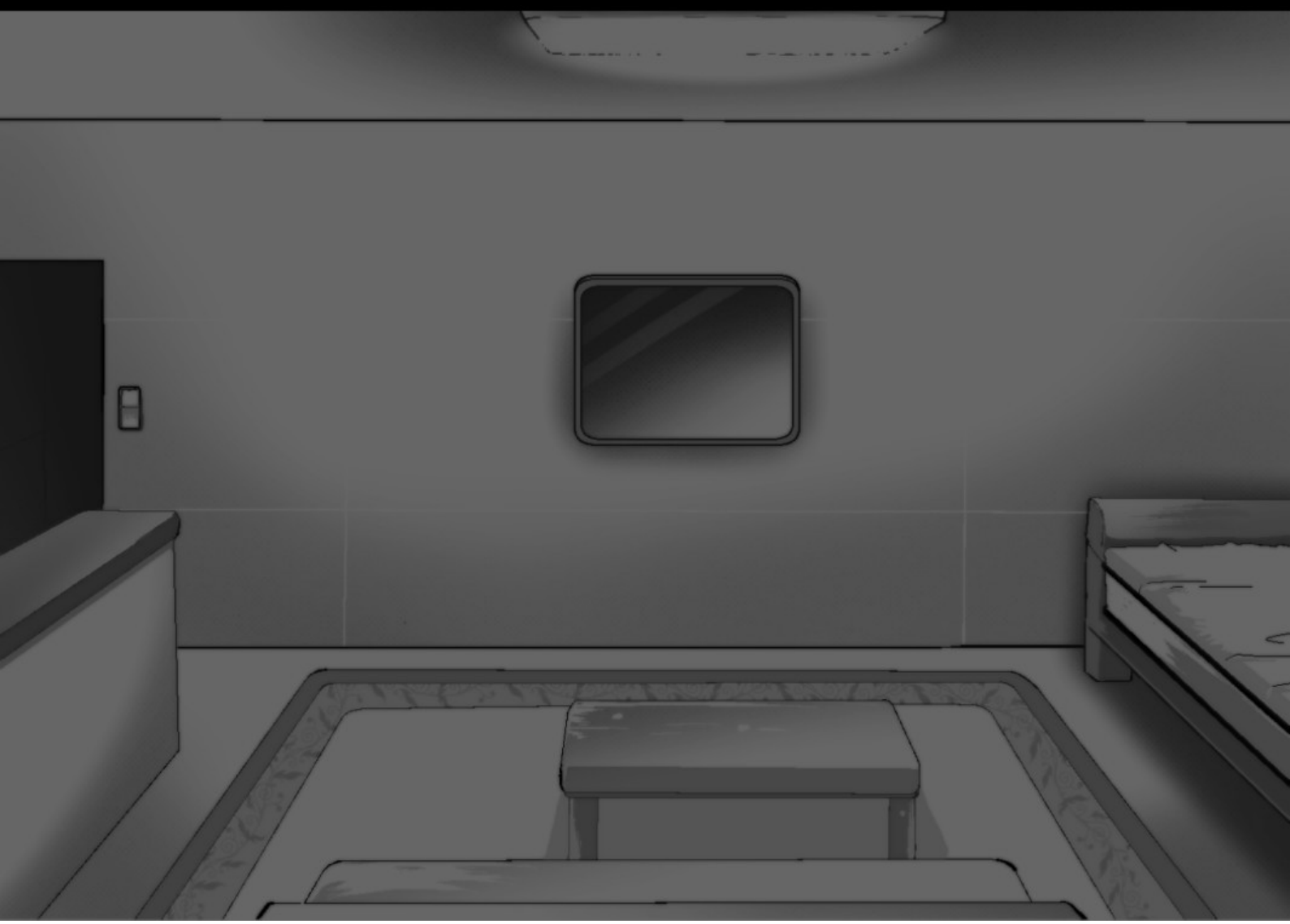
『イチヤラブバカップル関係』とは……』

・定義はありませんが、互いに心から相手を
愛し合う状態になること

・心の繋がりであり、形としての繋がりで
あること

——この二つの条件を満たすことです

表記されていたのは映像ではなくメッセ
ージのみだった。



友馬はその内容を見て固まっている。

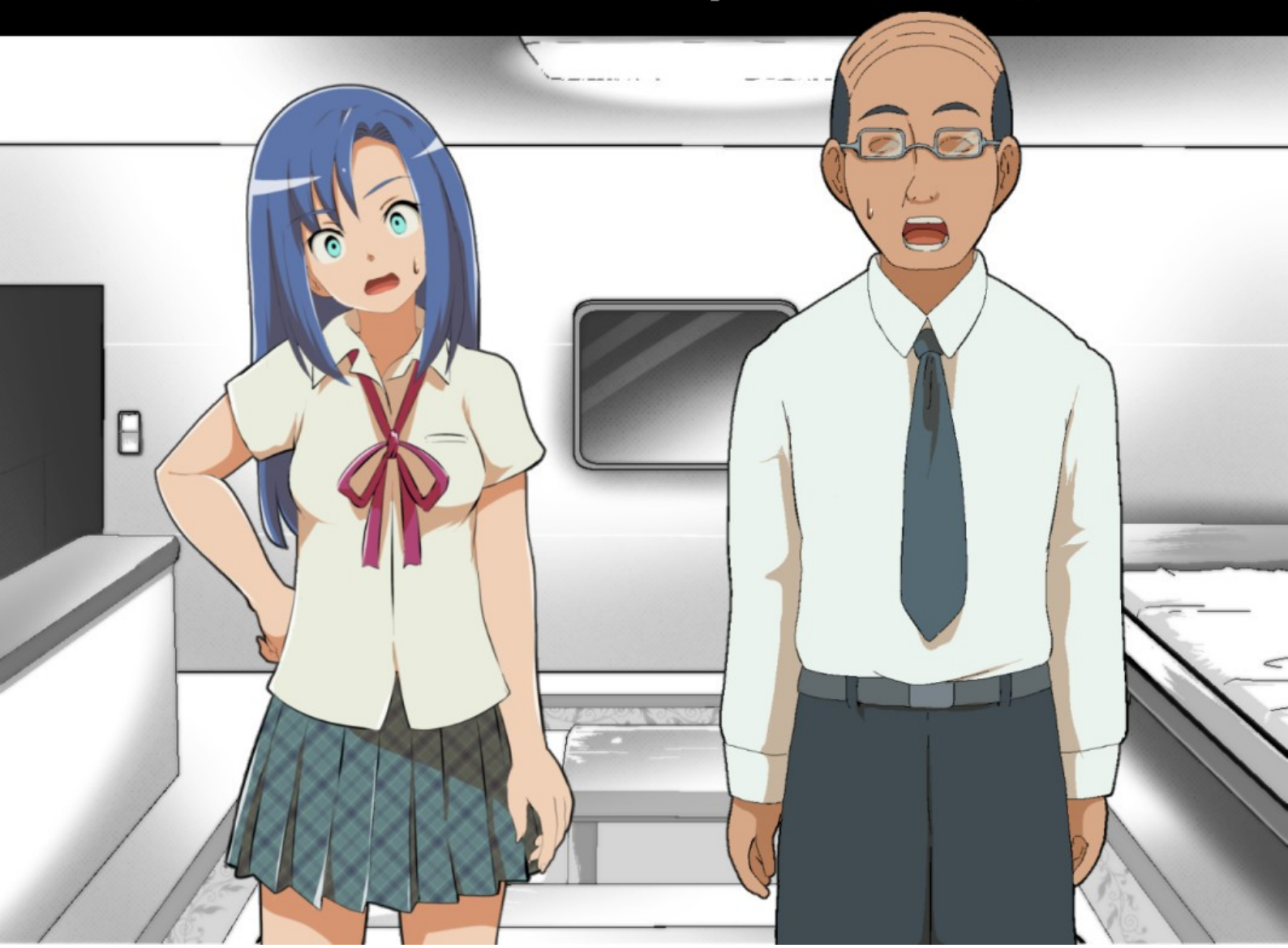
が、向こうから聞こえてきた声でハッと意識を戻す。

幼馴染の、聞き慣れた声だった。

友馬（…二人は俺がいることに気づいてない…つまり）

結那「イチャラブ…って、吉田先生…と？」

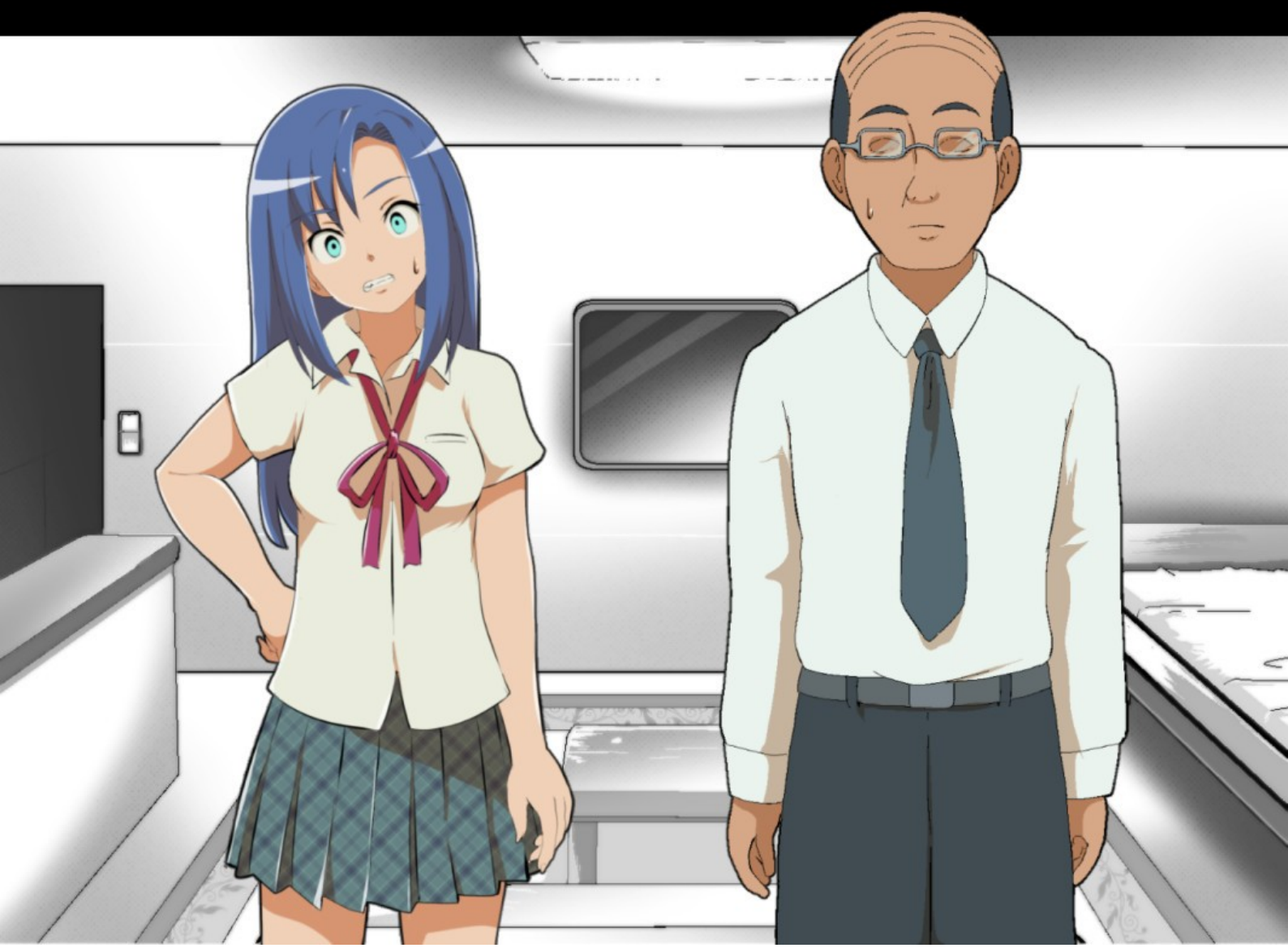
吉田「…」



必然的にその形になってしまう。

友馬は吉田に対して信頼は置いていた。
生徒に絶大な人気のある楽しい先生、な
んて印象はないが実直で大らかな先生だ。

：絶対にそんなことは
起こらない　：はず。

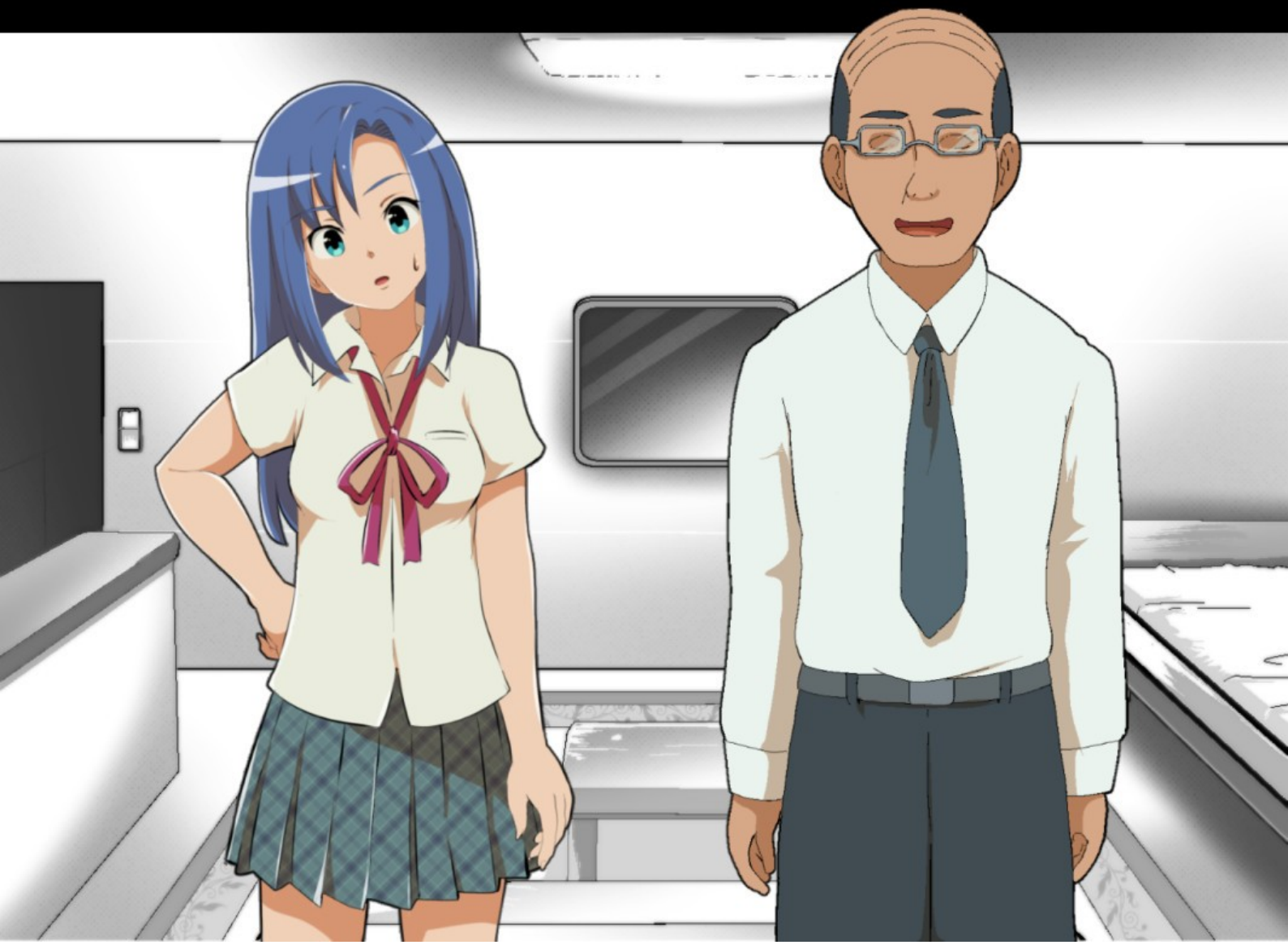


吉田「…大丈夫だ倉原、必ずここから無事に脱出しような」

結那「う、うん…」

幼馴染と担任の中年教師との疑似的な2人暮らし。

その様子をただ傍観するしかない友馬の奇妙な生活が始まった。

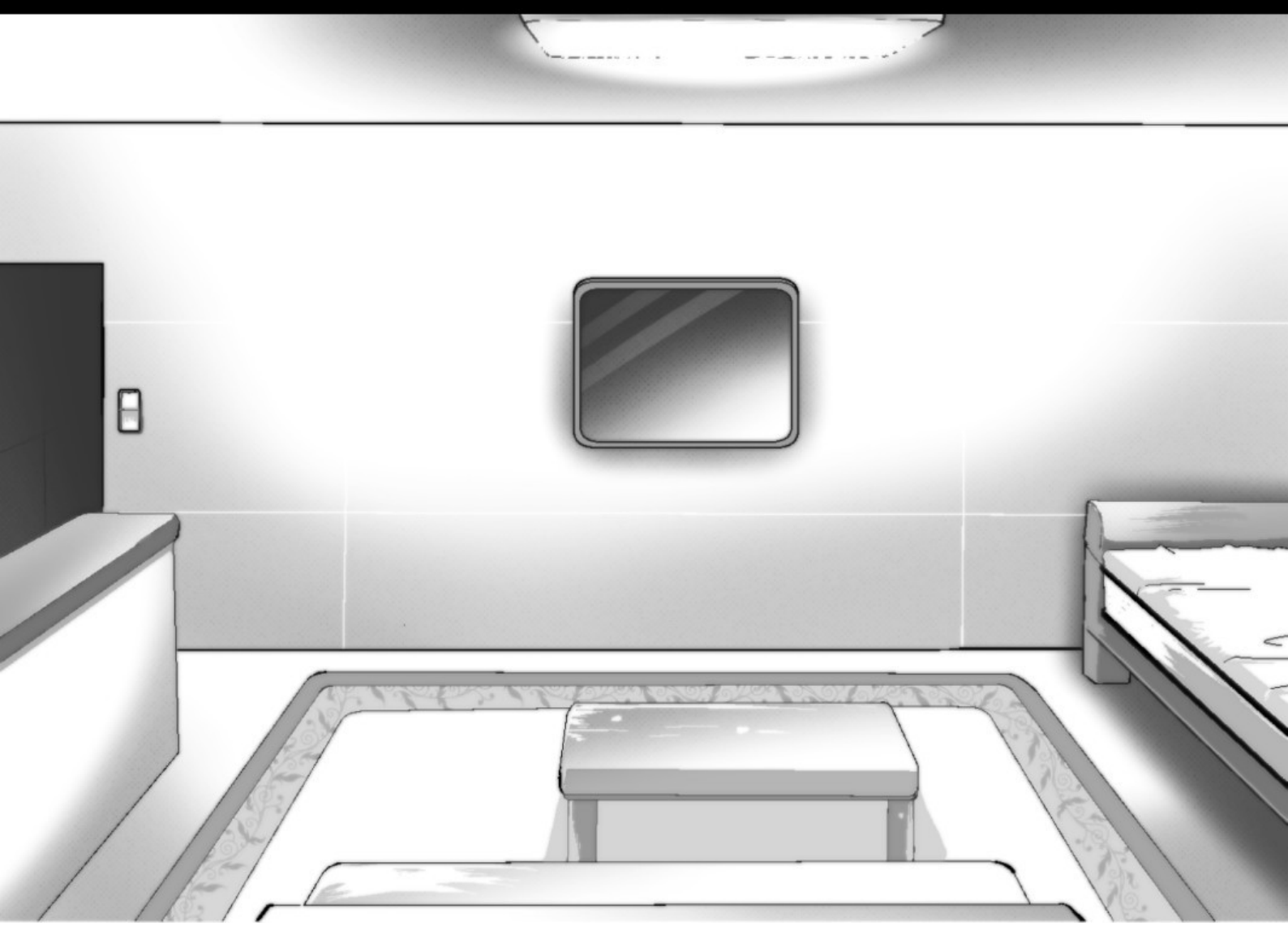


風呂、トイレ、食事、睡眠。

人としての最低限の生活リズムを繰り返すと何となく落ち着きは出てくる。

あれからとにかく部屋中散策したが、ドアも窓もなかった。

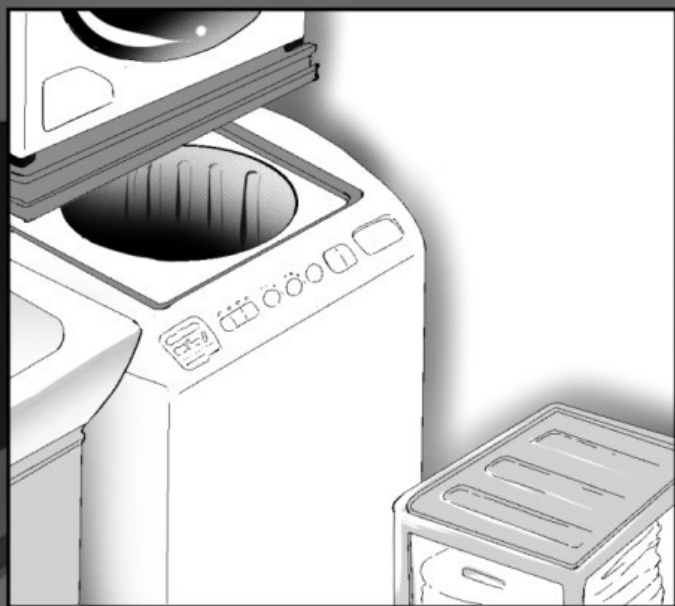
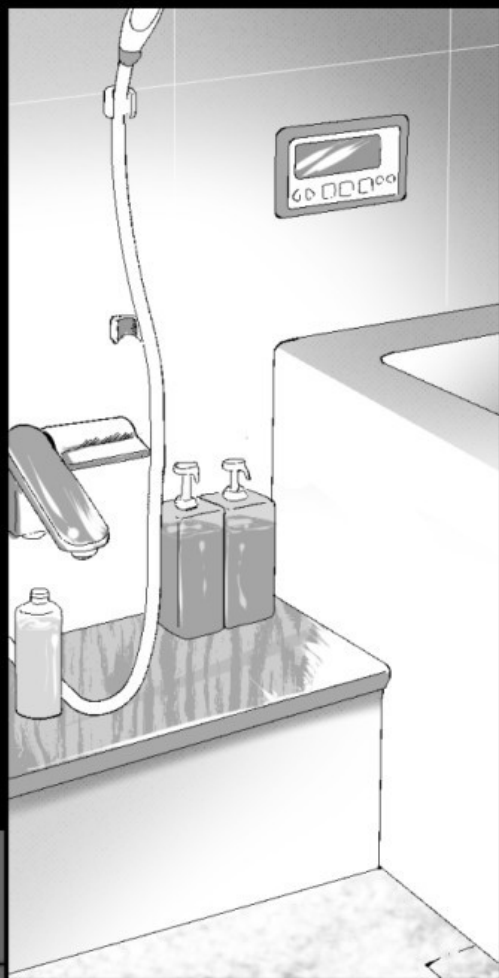
出口が一つもない。



電気や水は通っているようだった。

風呂やトイレといった最低限の設備どころか洗濯機や乾燥機、冷蔵庫に電子レンジなどなんでも備え付けられていた。

奥まったところに飲み物や食料、ティッシュやタオルなどが積まれた小部屋があった。



不思議なことに食べ物や生活用品はどれ
だけ消費してもいつの間にか小部屋に補
充されていた。

出たゴミも気づかない内にキレイさっぱ
りなくなる。

空調も整っていて快適な室温だった。

暑くもなく寒くもない。

娯楽と出口がないこと以外は不気
味な程、生活環境が整い過ぎていた。

が、外部との連絡手段は一切ない。

そして、結那と吉田の二人と友馬を隔て
る見えない壁もそのまま変化はなかった。



結那「せんせ、ご飯私のも温めて〜?」

吉田「…まあ、一人分も二人分も手間なんか変わらないからいいけど…」

「今の若者はホントに炊事とかやりたがらないんだな」

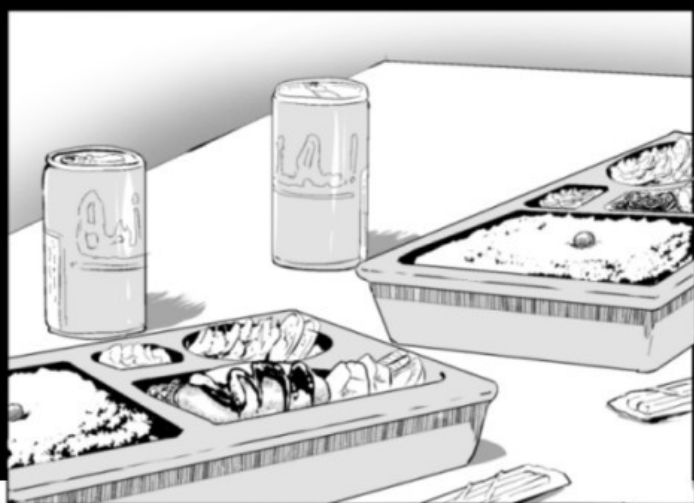
結那「まあまあw飲み物冷やしててあげるから♪せんせー何がいい?」

「ビールとかあればめっちゃ嬉しかったんじゃない?」

吉田「そうだな…」

まあ教え子の前で

飲むのも抵抗あるが」

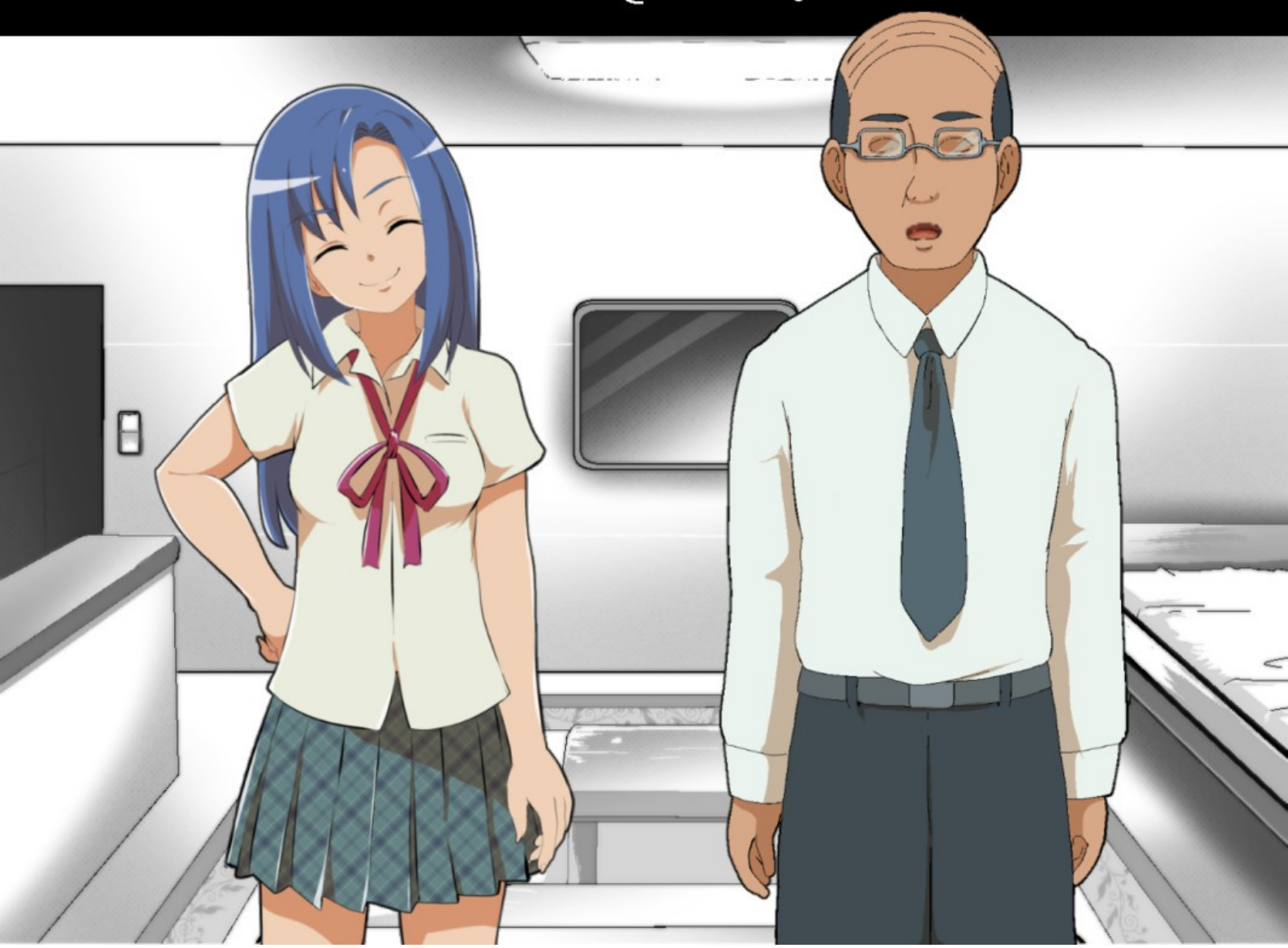


二人はとにかく会話していた。

他にすることもないので必然的にやり取りが多くなる。

閉鎖空間での精神面を安定させる行為として「コミュニケーション」は大事だろう。

友馬も会話に参加は出来ないが、聞いているだけでも気晴らしになっていた。



結那「せんせーお休み〜」

吉田「ああ…」

寝る時は結那がベッド、吉田はソファで寝ている。

結那も気を遣ってか何度も本当に自分が使ってしまったていいのか聞いていたが立場を考えてのことなのか吉田は結那に使わせていた。



初めの頃は着の身のままで寝ていたが、探っていたら寝巻きを見つけた。

無地の特にこれと言ったデザイン性もないモノだったが、吉田はただでさえ寝心地が悪かったのでせめて着心地くらいは快適でいようと抵抗することなく着た。

結那も吉田が着たのを確認してから洗面所に行って着替えていた。

結那「…zzzz」

吉田「…」



友馬「…おやすみ、結那」

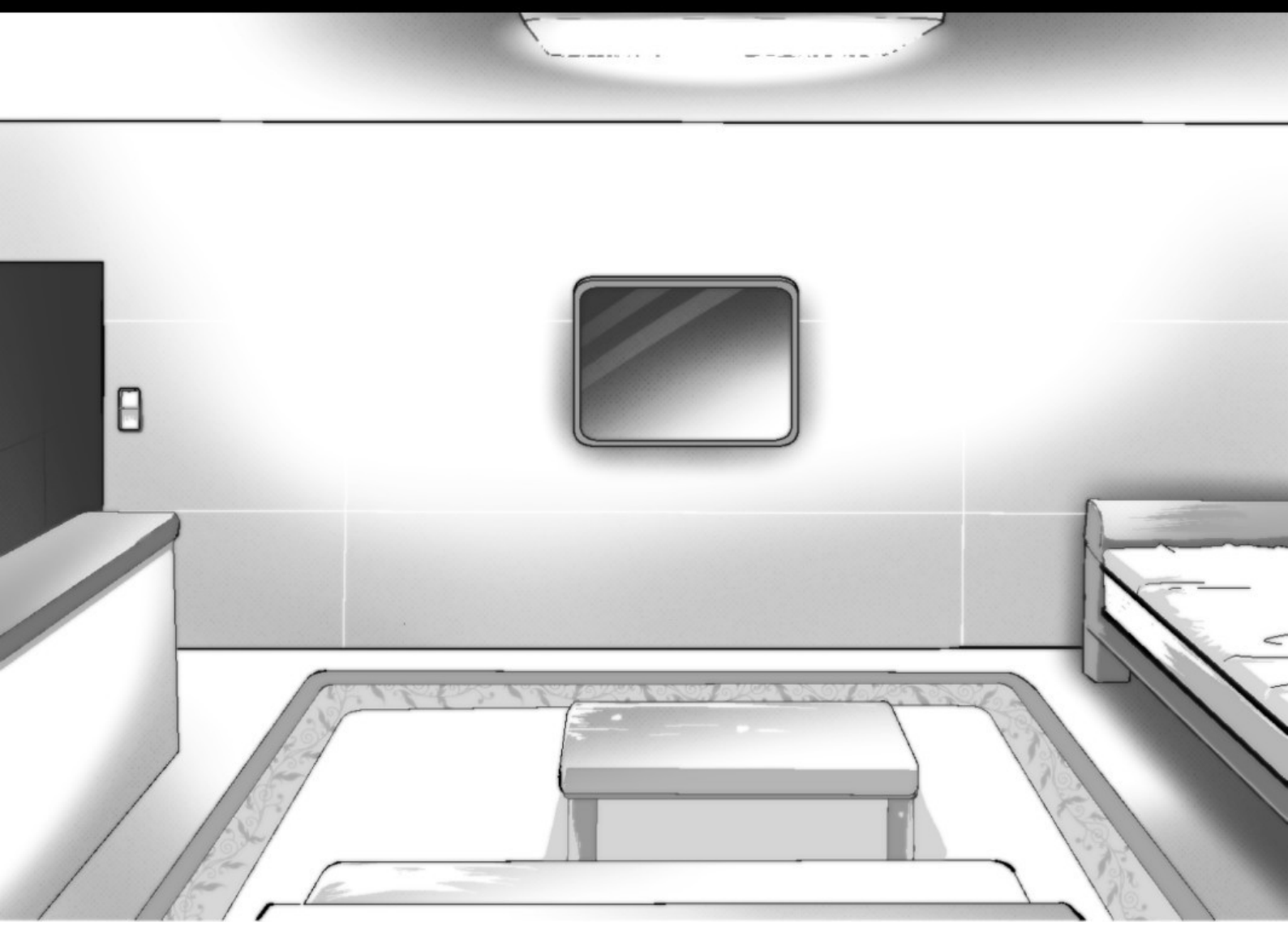
非現実的な状況下であつてもリアルな生活感の繰り返しが心をなだめていくのだつた。



——が、何の脈絡もなくそんな
生活は大きく変化した。

『~~~~っ!!』

友馬「ん？」



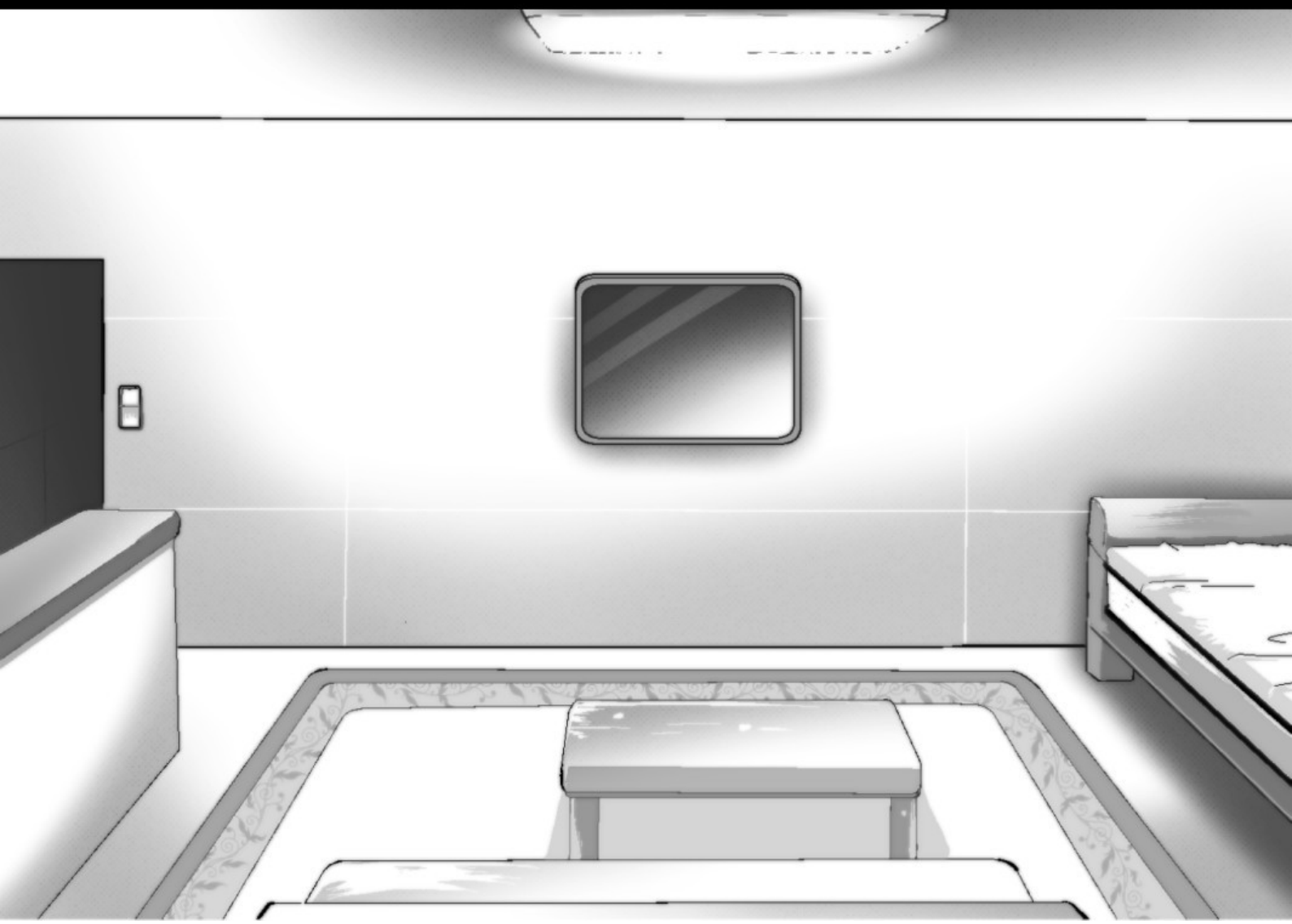
友馬が考え事をしながら少し長めの入浴を済ませ、洗面所から出たとき二人のいる方が何やら騒がしい。

友馬「…結那っ…!」

聞き慣れた幼馴染の声。しかし聞きたくはないと感じた声色。

悲鳴に近いトーンだった。

友馬は考えるより先に身体が動いていた。



結那「いやっ！やめて先生！落ち着いてよ!!」

吉田「ハアハア…」



二人は部屋中を使つて追いかけて
こしていた。

吉田は完全に服を脱ぎ捨てた状態
だった。

裸のため吉田のソレは完全に
見えていたが、明確に怒張して
いた。



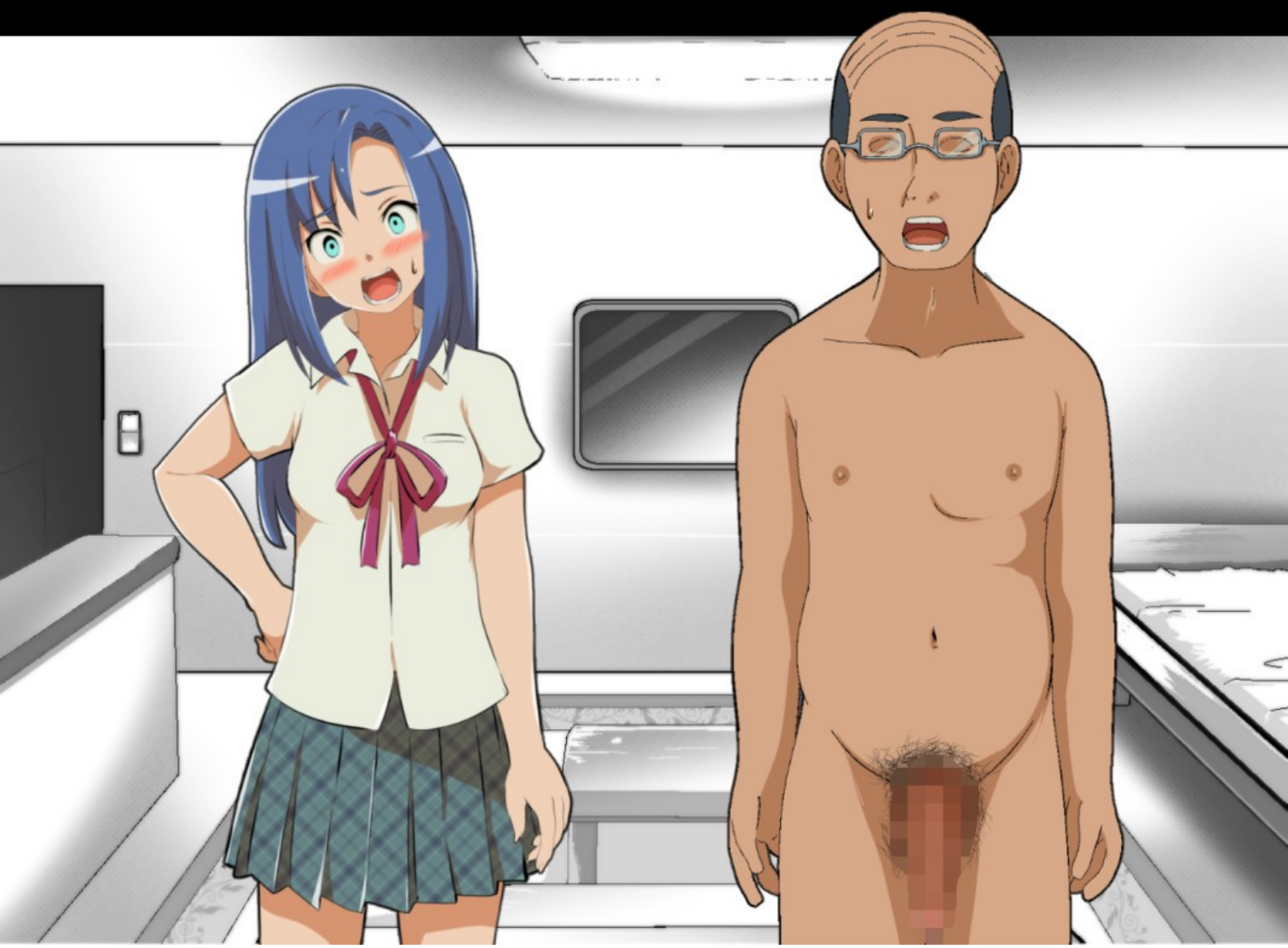
結那「いやあー!」

結那を追い掛け回し、捕まえるとその服を着ていない体で思いつきり抱き着いた。

恐怖、不安、気持ち悪いといったとにかくネガティブな感情がすべて含まれた叫び声だった。

何故そんな状況になってしまったのか友馬には全く理解できなかった。

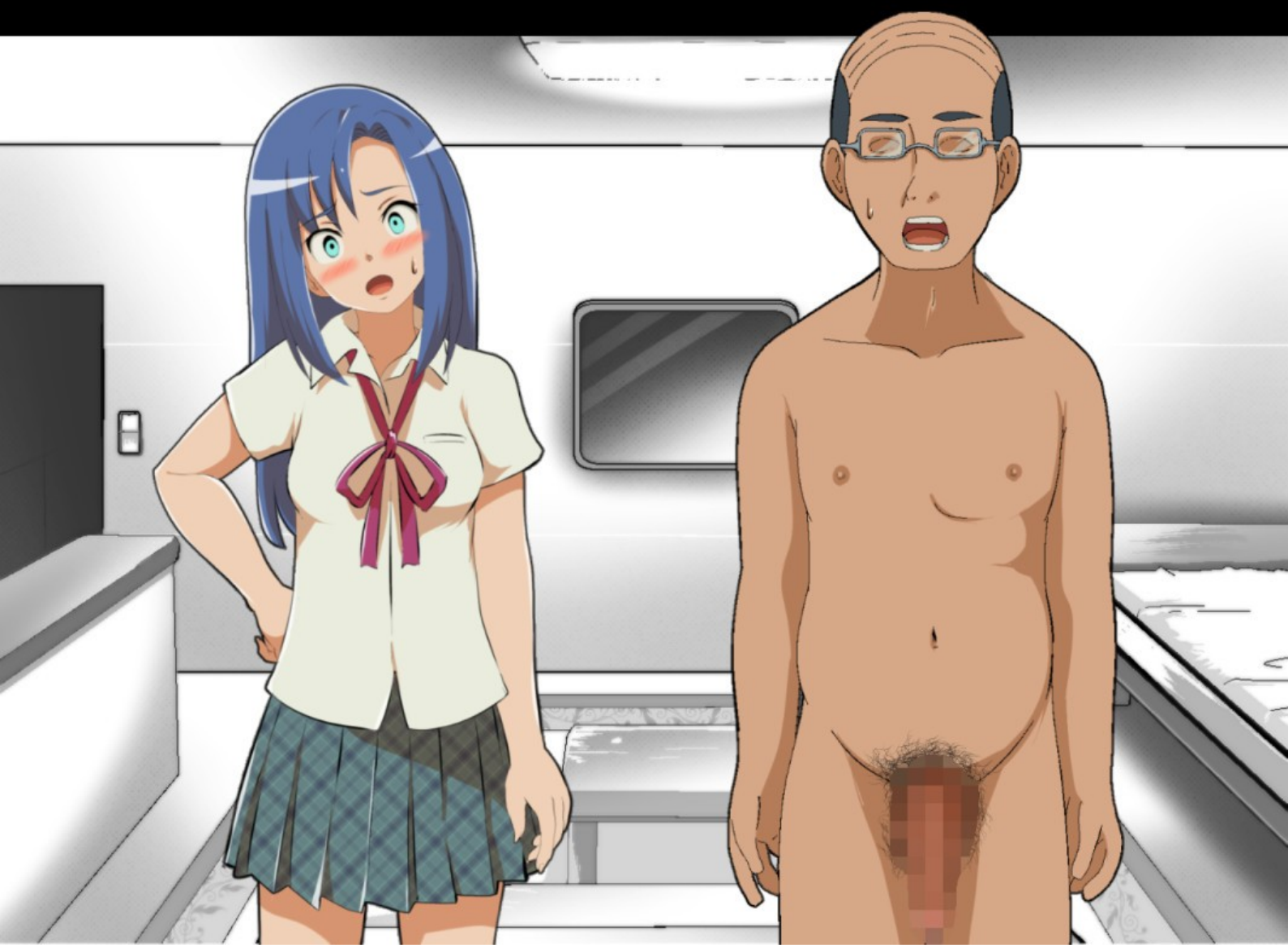
：いや、こんな生活が始まってから潜在的には底の方で意識はしていた。



男女二人きりの、誰の邪魔も入らない、密室空間。

こんなこと、起こらない方がおかしい。

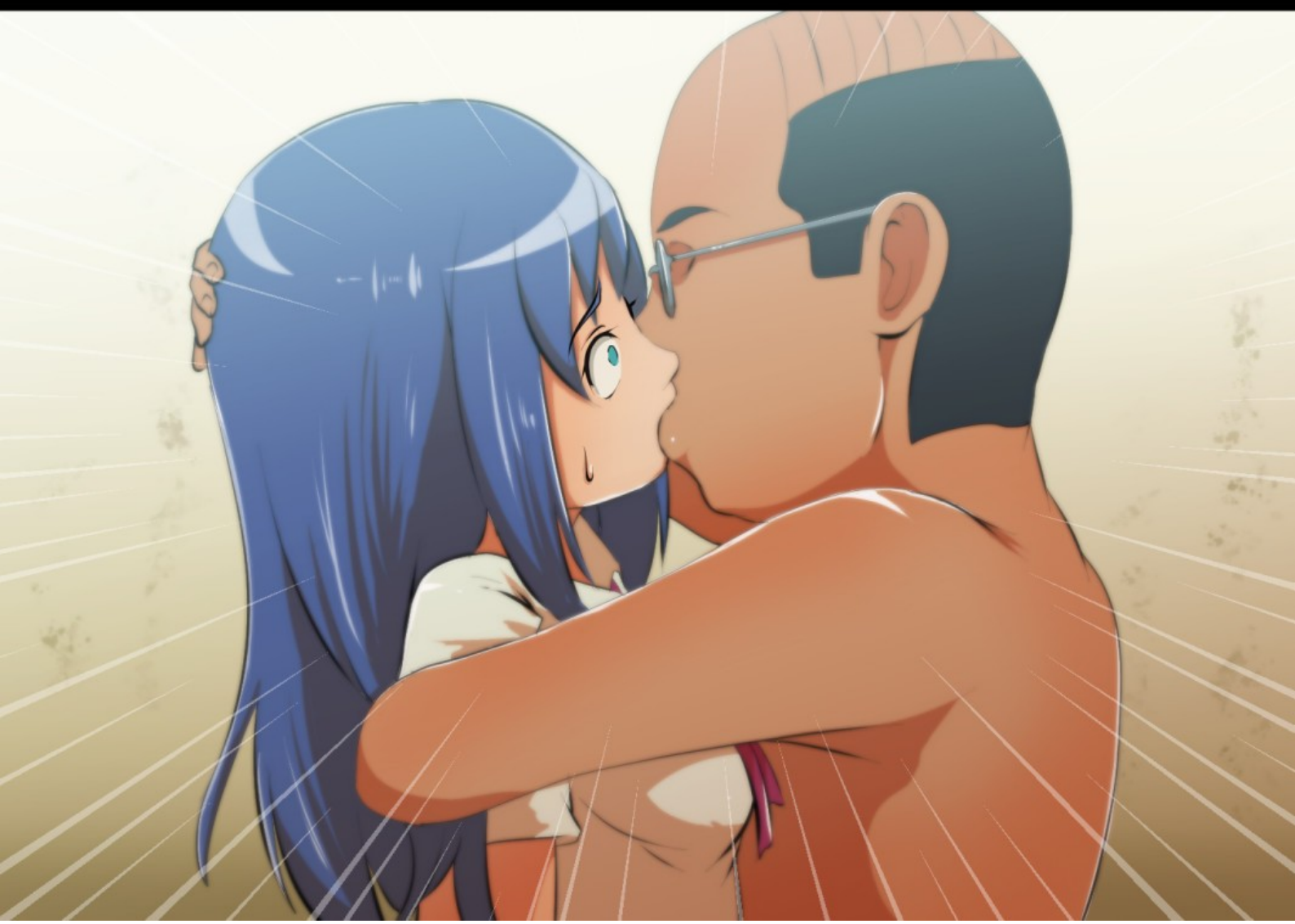
例え教師と教え子という関係性であつたとしても。



結那「んんんっ!!」

ハッと意識を戻すと目の前で幼馴染
が思いつきキスされていた。

頭を押さえつけられ貪られるように。



結那「~~~~っ……!」

吉田「~~~~っ……!」

友馬（…あ…、あ…）

友馬はその様子をただ傍観していた。

結那の、そして自分のファーストキスは
お互いでありたい、と友馬は思っていた。
もちろん結那も。

目の前で奪われた。中年の担任教師に。



結那「…っぷはっ…はあはあ…んんっ!？」

吉田「…っ」

結那「~~~~っ!~!~!」

吉田はいったん口を離し呼吸を整える。

結那も同じように一息つこうとするが
吉田は自分のペースでさっさともう一度
キスをしてしまったため、結那は少し苦し
そうだった。



友馬は吉田に対する怒りや失望といった気持ちはなぜかそこまで感じなかった。

実際には湧き上がるような感情は確かにあったのだが、目の前の状況をどうしても処理できず、感覚が分からなくなっていた。

男なら性欲なんて誰にだってある。

自分で抑えられなくなってしまう欲望であることも友馬は分かっている。

先生だって自制心と戦って大変だったんだと、なぜか吉田の気持ちを考えてしまった友馬。



もう自分でも何をどうしたら
いいのかわからずにいた。



ベッドに連れていかれ押し倒される

結那。

制服、そして下着も脱がされる。

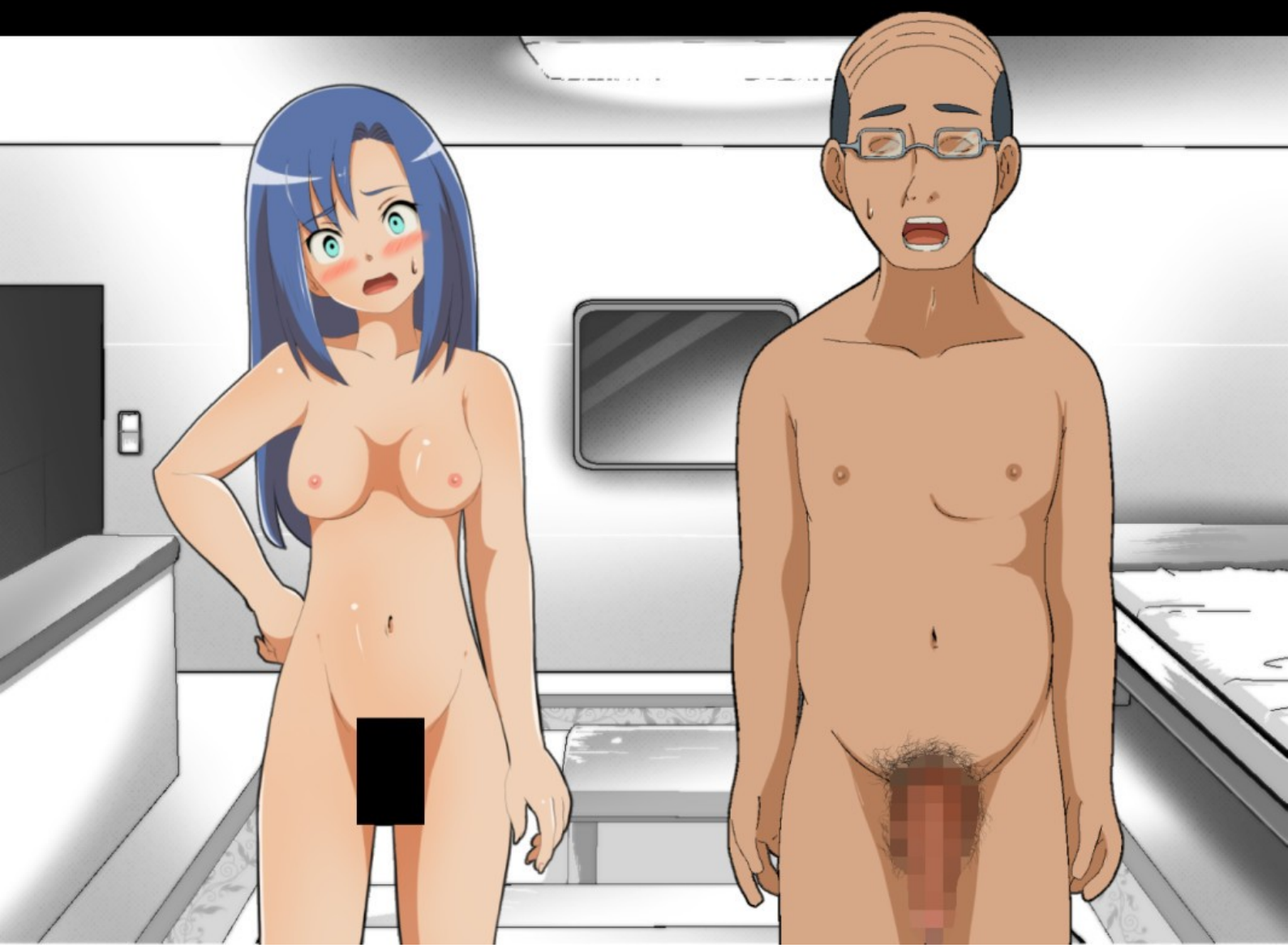
男女が二人、裸でベッドに寝転がって
いる形になった…。

吉田「ゴムはちゃんと着ける！安心し
てくれ」

結那「はあ！何？安心って…！じゃあこ
んなことやめてよ!!」

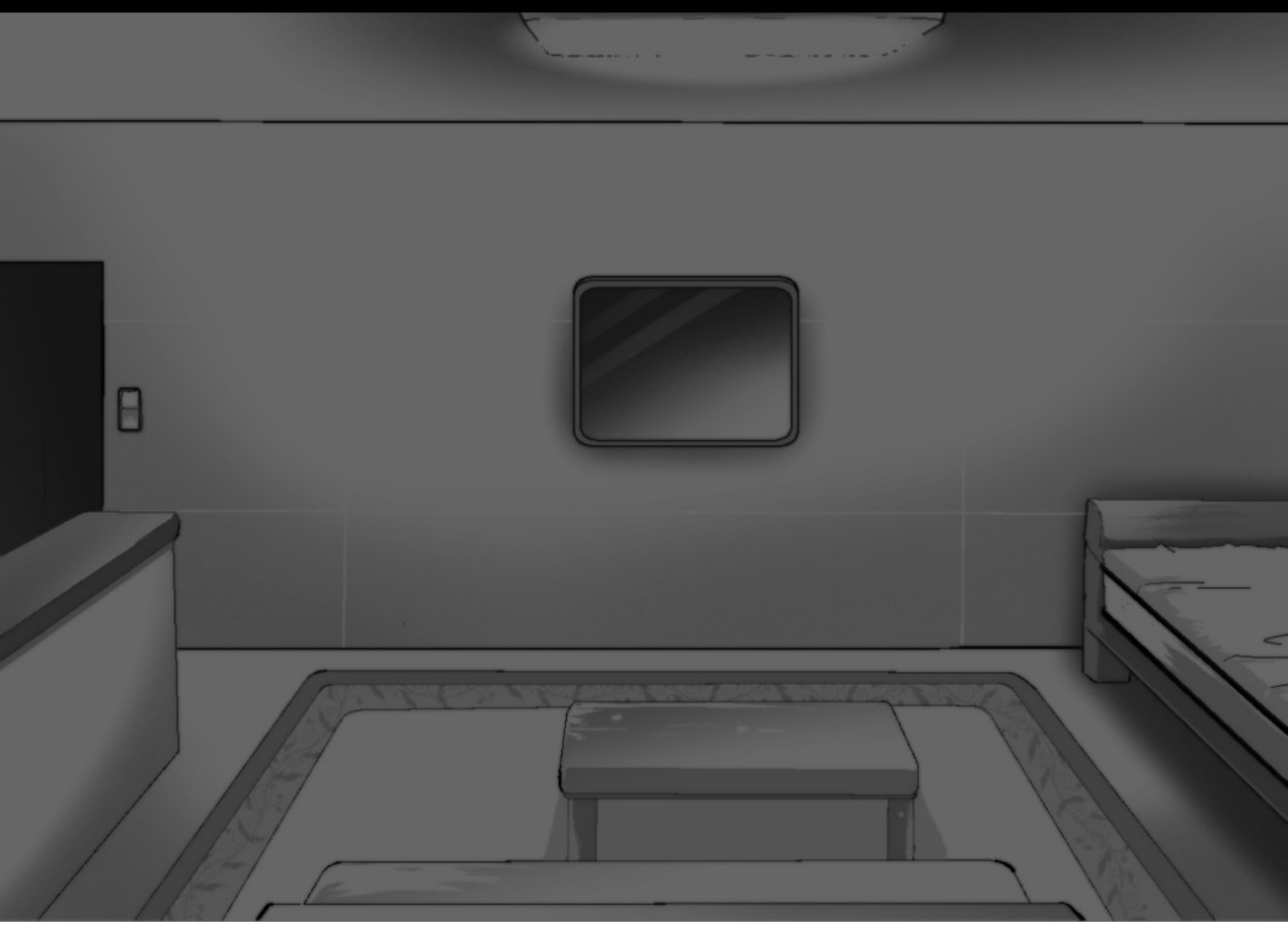
吉田「…倉原、すまん…！」

結那「~~~~っ!!」



コンドームなんてあったのか。と友馬は思ったが後で備蓄品の積まれた小部屋を探してみたらしれっと陳列されてあった。

…実質一人で生活している空間にそんなものがあったても意味はないが。



結那「やめ…っ、やめろ！この…」

吉田「倉原…すまん！スマン!!」

結那「ゆ、友馬…友馬あ…!」

吉田「ハアハア…」

結那「ああ…あっ…」

吉田「~~~~っ!!」

結那「ああ〜っ!!」



吉田が上からのしかかる形だったので
よくは見えなかったが、二人の反応から完
全に行為が成立したのが分かった。

結那は肉体的にも精神的にも全力で拒
絶したが、逃げ場のない空間で男女の力の
違いで強引にねじ伏せられた。

怒り、失望、痛み。様々な気持ちが入り混
じっているのだろうが、悔しい、という感
情が何より表情にしっかり表れていた。

吉田は何度もスマンと口にしながらも
腰の動きは決して止めようとはしなかつ
た。



目の前で幼馴染のファーストキスと初めてが流れるようにさっさと済まされた。

相手は担任教師。

友馬も結那も別に悪い印象などなかったそれなりにいい先生。

教え子の体を求めるといふ欲望に吞まれ、行動に移してしまった。

もう取り返しはつかない行為。

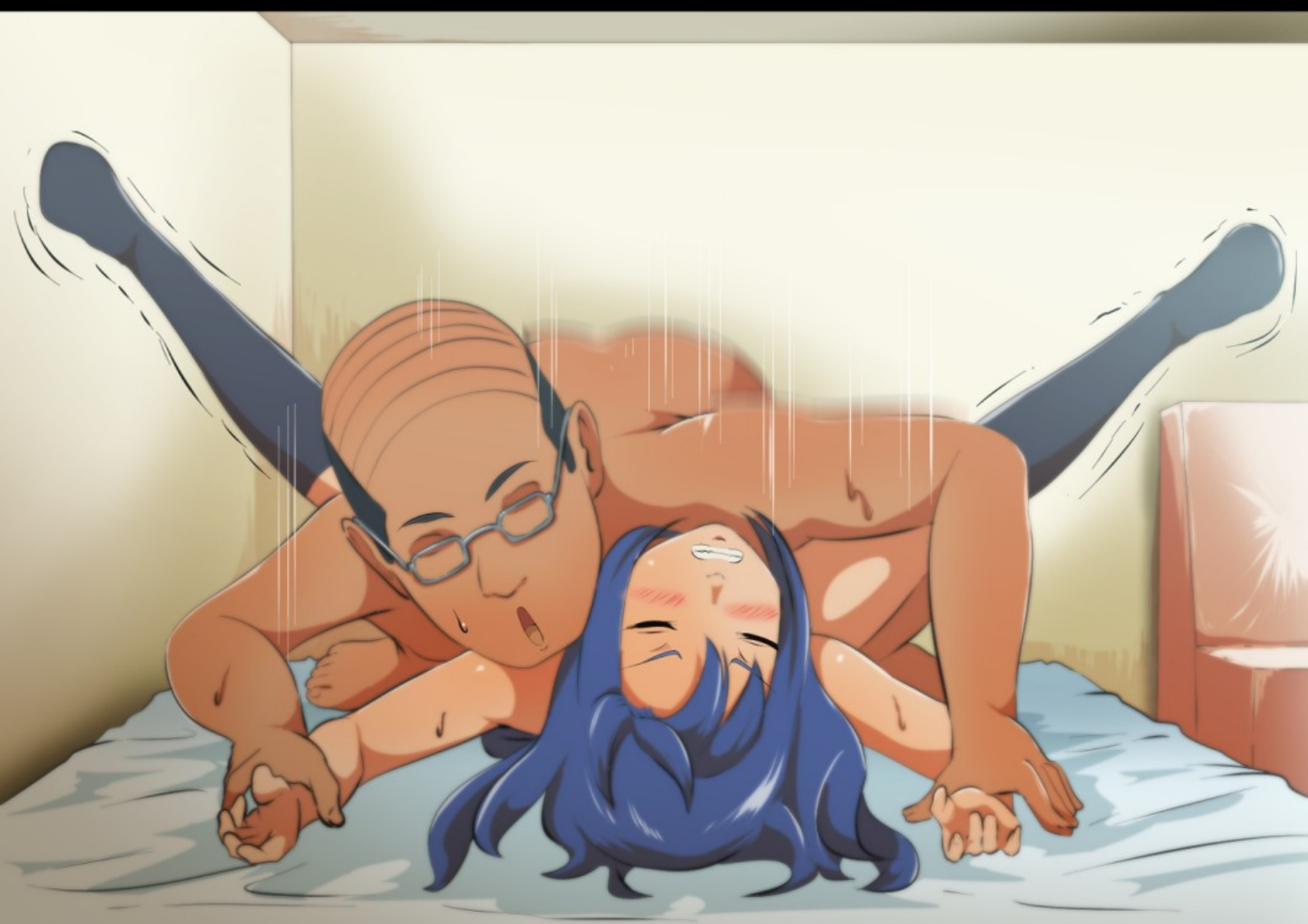


結那「んっ…ぐっ…!」

力づくでいいようにされ悔しいという
気持ちでいっぱいだった結那は、徐々に痛
みか：もしくは快感が体を伝ってきたの
か短く呻くようになった。

吉田は結那のそんな反応を見て痛がつ
ていると判断したのか少し動きを緩めた。
が、それでもその行為を止めるわけでは
ない。

しばらくしたら再び、カクカクと腰を動
かしペースを早めた。



耳をすませば僅かに空調音が聞こえる程度の空間だった。
今はベッドの軋む音と二人が互いの肉体を打ち付け合う音が
聞こえている。

吉田「ハアハア…倉原…またイクぞ…！」
結那「…」



「また」と吉田の言った通り、ベッドには使用済みのゴムがすでに二つある。

三回目。

よくそんなに続けて出来るかと友馬は変に感心してしまった。

果てた後に、二人は呼吸を整える。ダランと四肢をベッドに投げ出して数分休憩する。そして吉田はゴムの入った小箱に手を伸ばし当然のように再戦する。

うつ伏せ状態の結那に覆いかぶさる形で行為に及んだ。



結那はもう抵抗しなくなっていた。

うつ伏せなので表情は見えない。

吉田「倉原…倉原あ…！」

結那「…うるさい」

吉田「はあはあ…！」

結那「…」

ひたすら結那の名を連呼する吉田とたまにボソツと言いつ返す結那。

もう何を言ってもやめてはくれないのだと諦めている。



友馬「・・・」

幼馴染が担任教師に襲われ現在の状態に至るまでずっと傍観していた幼馴染。

何もできなかった。

友馬（・・・どうすることもできないだろ・・・）

友馬は力なく手を前に出す。

何も見えないはずなのにペタッと硬い
感触が手に伝わる。

通れない。声が伝えられない。干渉でき
ない。

何もできない。

ただひたすら見ていただけ。



抵抗したり拒絶する言葉を発することで吉田を滾らせてしまうのが嫌なのか、結那はほとんど喋らなくなった。

中年男性だけが息を切らして必死に腰をカクカクと振っている状況は少し滑稽に映っていたが、壁越しの幼馴染男子は一切笑っていなかった。



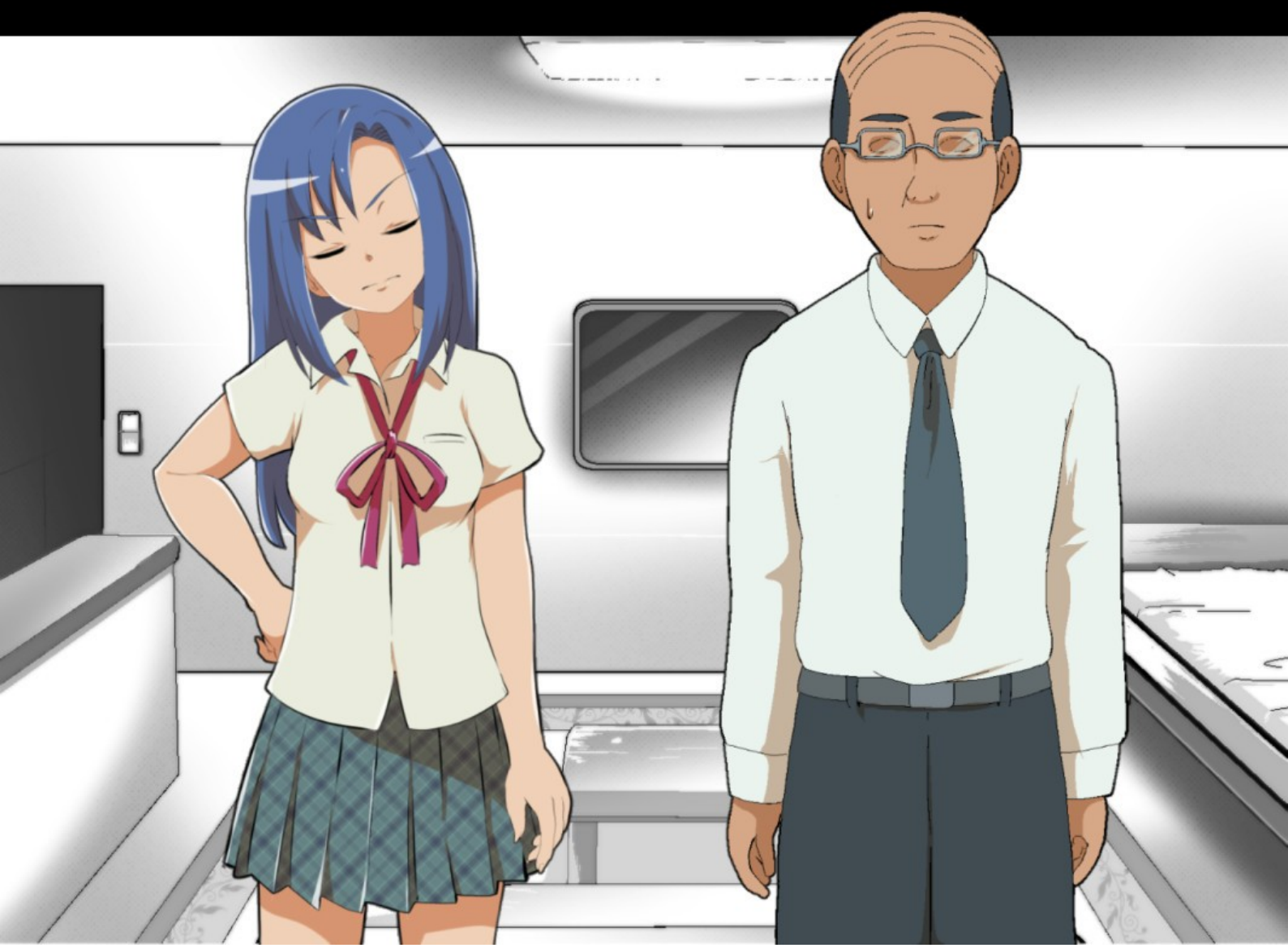
|| || ||

吉田「…」

結那「…」

友馬「…」

当然そうなるだろうが、次の日から
二人は日常的な会話はしなくなった。



しかし、二人がどんな状態であろうとこの閉鎖空間で生活するという環境は何も変わらない。

お互い別々で食事をする。

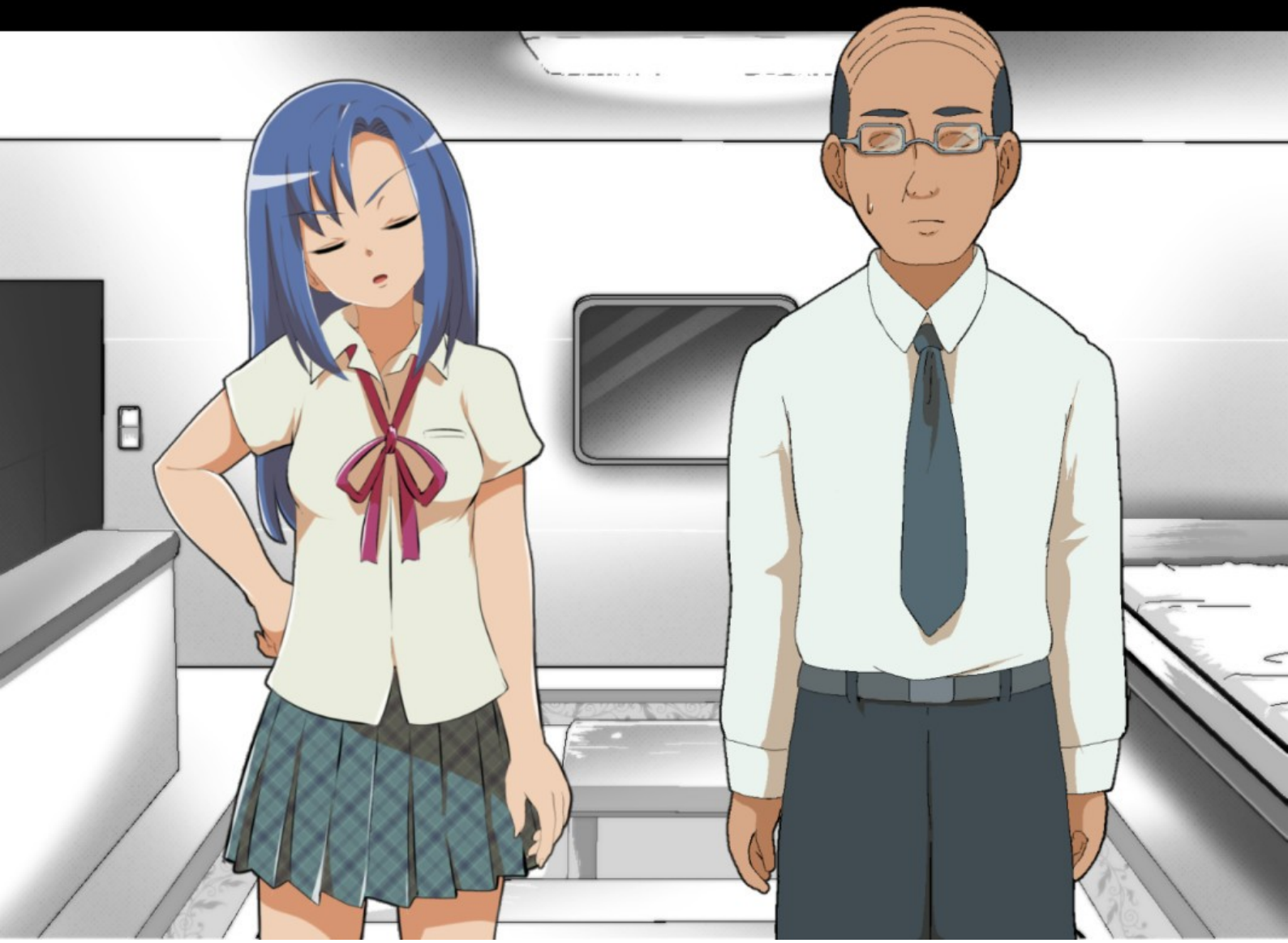
一緒にテーブルで食べるなんてできるわけなかった。

吉田は教師として、人として最低なことをした。

もう取り返しもつかない。

ただ、殴ったり叩いたり直接的な暴力で結那を支配しようとしたわけではない。

だからといってしたことが大目に見るなんてことはないが。



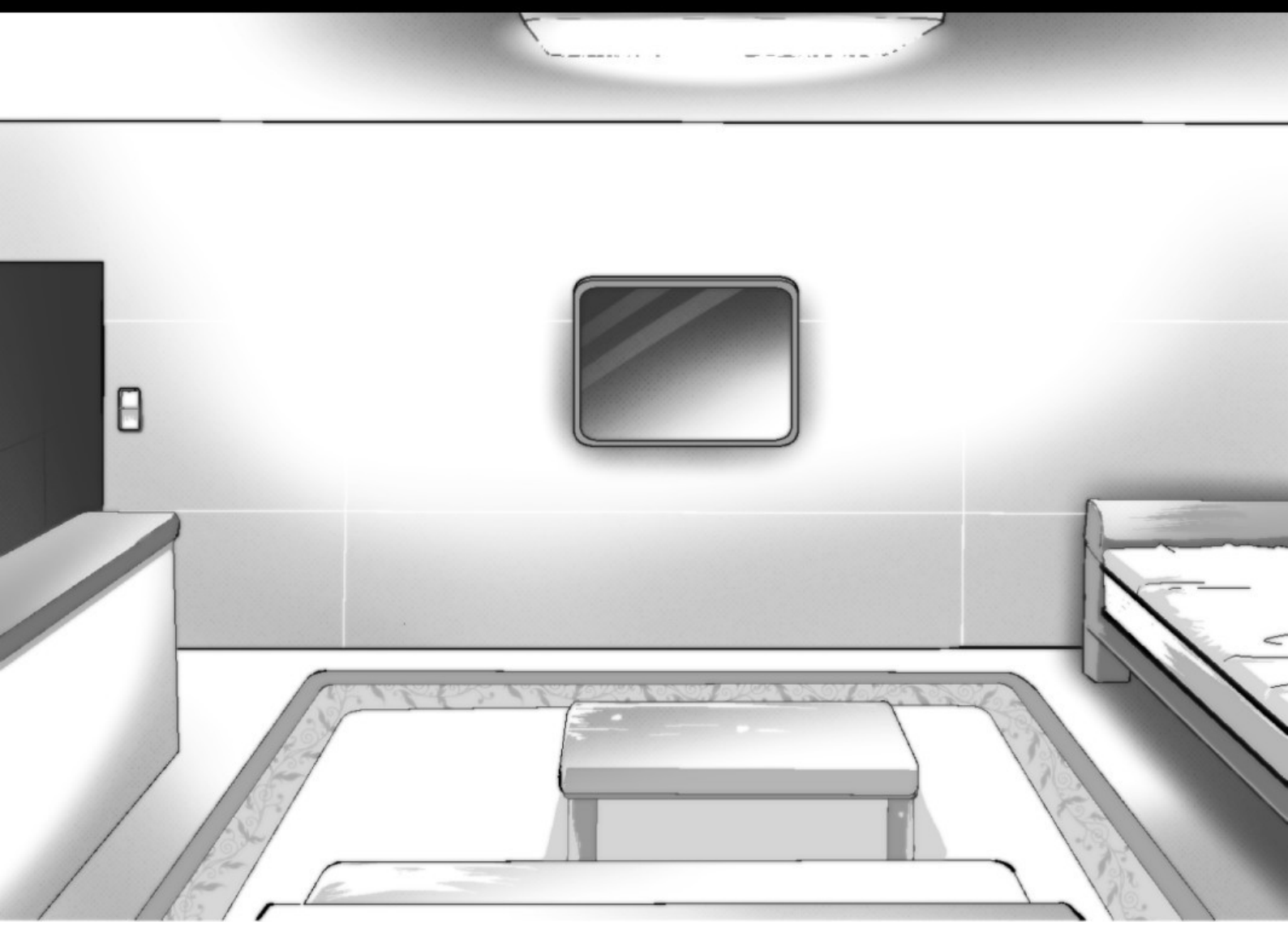
友馬（これから…どうすればいいんだろうか）

友馬が漠然とした思いで、意識をボウ
っとさせていた時。

「~~~~っ!!」

向こうから声が聞こえてきた。

意地でも話そうとする素振りも見せな
かった、結那が声を上げていた。



結那「ちょっと…嘘でしょ…!」

吉田「一回でいい…お願いだ…!」

結那「昨日あれだけヤッておいて…!!」

吉田「倉原…!」

結那「あ…ああ…!」



…あつという間に服を脱がされ昨日と
同じ状態にされた結那。

横向きで脚をおっぴろげる形でやりだ
した。

吉田が腰を当てる度に結那のハイソッ
クスを履いた脚がゆらゆら揺れる。

吉田「ふっふっふ…ふっ…」

結那「…」

吉田の息遣いだけが空間を漂う。

結那は意地でも反応を見せまいと一切
のリアクションをとらない。



服を脱がされるまではある程度抵抗していたが裸になりベッドに押し倒されてからは脱力したように何もしなくなった。

吉田はその結那の体を全力で堪能する。

吉田「倉原…スマン…スマンな」

結那「…あのさ」

無反応を貫いていた結那が口を開いた。

結那「謝るのやめてくんない、どうせやめてくれないくせにや」

「マジでムカつくから」

吉田「…ぐいぐいめ…」

結那「…」

吉田「…」



吉田「…これだけ聞いていいか？俺からこんなこと言われるの腹立つだろうし答えなくてもいいんだが…」

結那「…」

吉田「…気持ちいいか？どうせやるなら気持ちよくするほうが」

結那「黙ってさっさと済ませて下さいーい」

吉田「…ああ」

一方的に行為に及んでいる吉田からそんなこと言うのはどう考えてもオカシイだろうし結那も答える義理など少しもない。

結那は被せ気味に返答し会話を断った。



そこからはひたすら黙々とやっていた。

吉田「ハアハア…いくぞ…！いくぞ倉原…

！」

結那「…っ…んう!!」

結那の方からやり取りを断ち切ったために、今更声を出すのも憚られるのか表情を強張らせて必死に我慢していた。

…耐えているのは痛みなのか快感なのか。

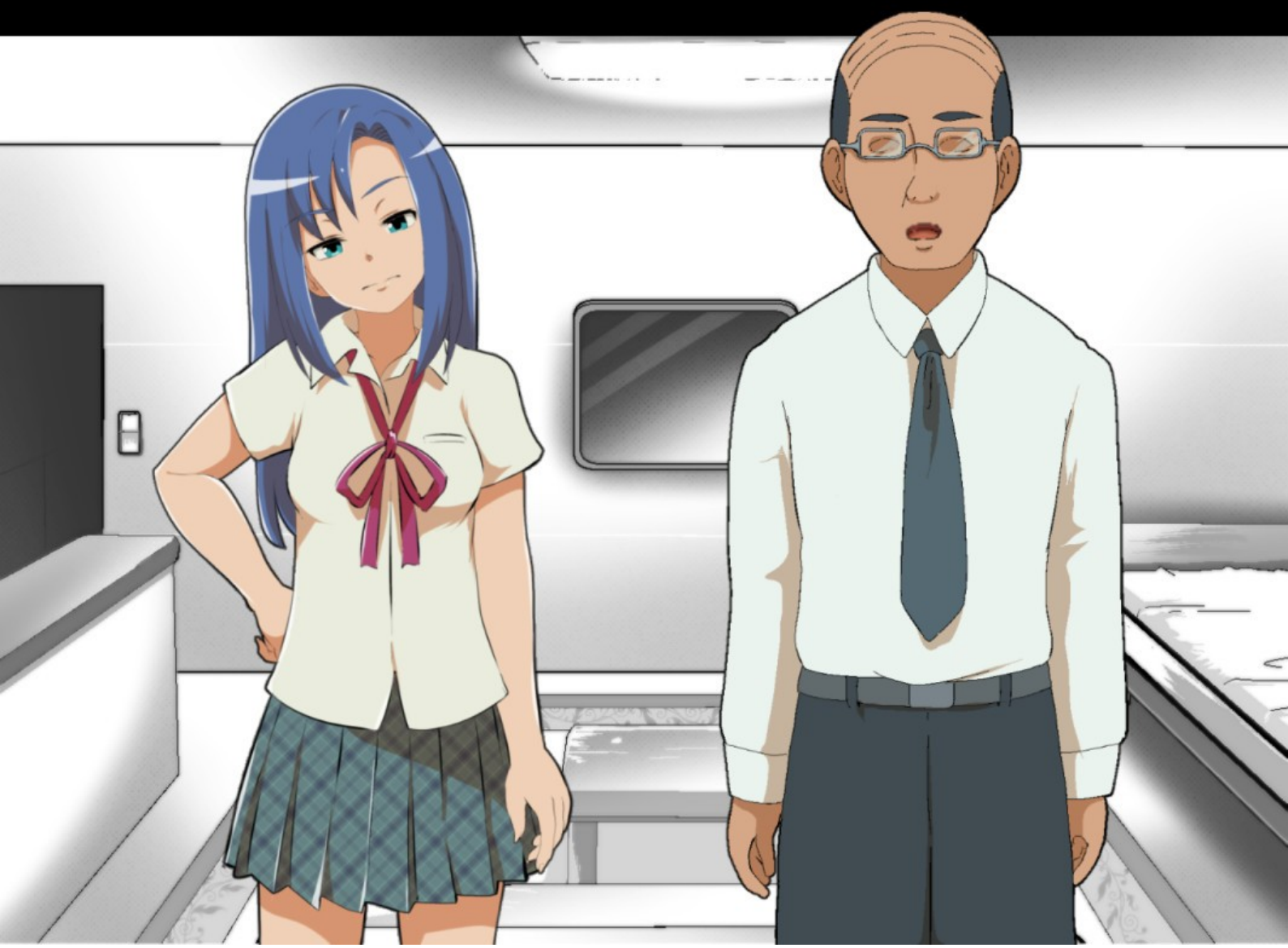
漏れるような小さい吐息混じりの声は逆に吉田を滾らせていた。



数日後、吉田と結那が何かボソボソと
小さい声で話していたが友馬には聞こ
えない。

会話が終わると結那は洗面所に向か
った。

風呂だろうか。



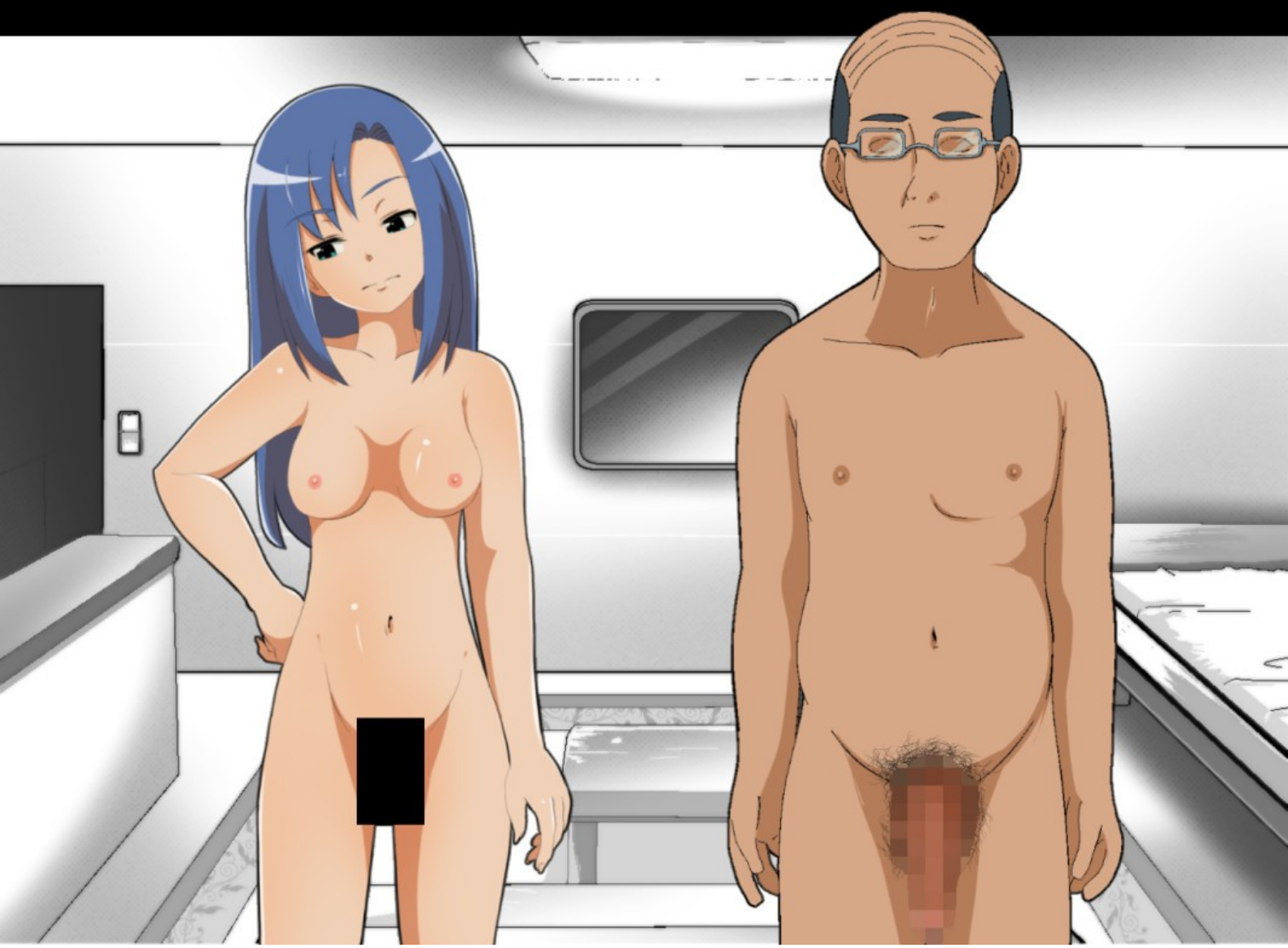
…と思っていたら、吉田はサッと服を
脱ぎだし裸になる。

結那「…」

そして結那が洗面所から戻ってきた。
こちらにも裸で。

吉田「…」

結那「…」



そのままさっさとやりはじめた。

お互い特にやり取りもせず。

結那は入浴しようと思っていたが、吉田からやろうと要求された。

結那『…するならさっさとやって。お風呂入ってから言われても困るし』



結那の返答は改めてみればオカシイことなのかもしれない。
中年教師とやることが当然のように生活に組み込まれている言いよ
うだった。

精神的にも窮屈な閉鎖空間での暮らしで何かが麻痺してきたのか。





結那「…ずっと思ってたんだけど、なんで靴下だけ履かせたままにすんの」

吉田「え、いやその…好きなんだ」

結那「…性癖？ハイソックスフェチってこと？」

吉田「多分そうだ…ニーハイとかも…」

結那「…キモ」

吉田「…」

結那のキモい、という発言で気のせいか吉田の腰を動かすペースが
激しくなった。

それから結那はちよくちよく「キモい」というワードを口に出した。

…何の意図があったのかは分からない。



食事や入浴、トイレ、睡眠。

その当たり前の生活リズムに当たり前のように二人が体を重ねる時間が組み込まれている妙な毎日が流れていた。

体の関係を持つ前より会話自体かなり少なくなっていたが、それでもぽつぽつ会話はするようになっていた。



結那「ちよつと…何この体勢…」

吉田「…何で女の子ってこんないい匂い
するんだ」

結那「いや、キモ！なにソレ、普通にキモ
って思っちゃったんだけど…！」



吉田「…ぐへへへっ！倉原あ…お前はもう俺のモンだあ…！」

結那「今さらキモおじ感出されても…」

そんなやり取りを挟む。当然のようにセックスをしながら。

吉田「ああ…このまま倉原と融合して…つになりたい…運命共同体となつてずっとセックスしていきたい…！」

結那「馬鹿じゃないの…せんせーさあ、仮にも教師でしょ…教え子によくそんなヤバイ事…」

吉田「…」

結那「…なに？」



吉田「久しぶりに先生って呼んでくれたな」

結那「…そうだったけ？」

吉田「もう一度言ってくれ」

結那「やだ」

吉田「頼む！」

結那「嫌です」

吉田「言うまで離れないからな…！」

結那「…！お…っ!!」

二人「っっっっ!!」



二人はベッドの上で絡み合うような形で行為に及んでいる。

吉田が背後から結那を抱きかかえ腕や脚を絡ませて動けないようにしている状態。

吉田「言うんだ……そのかわり俺も倉原のことを結那って呼ぶから……！」

結那「いや、そのかわりって意味わかんないし……対価になってないし……！」

吉田「言ってくれ！吉田先生って！もう一度……!!」

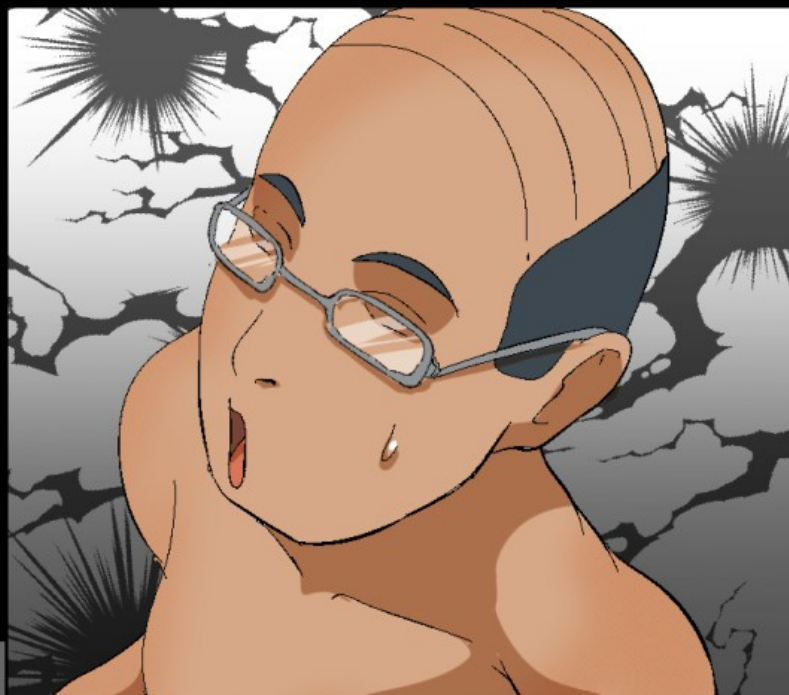
結那「……っ!!」



!!。

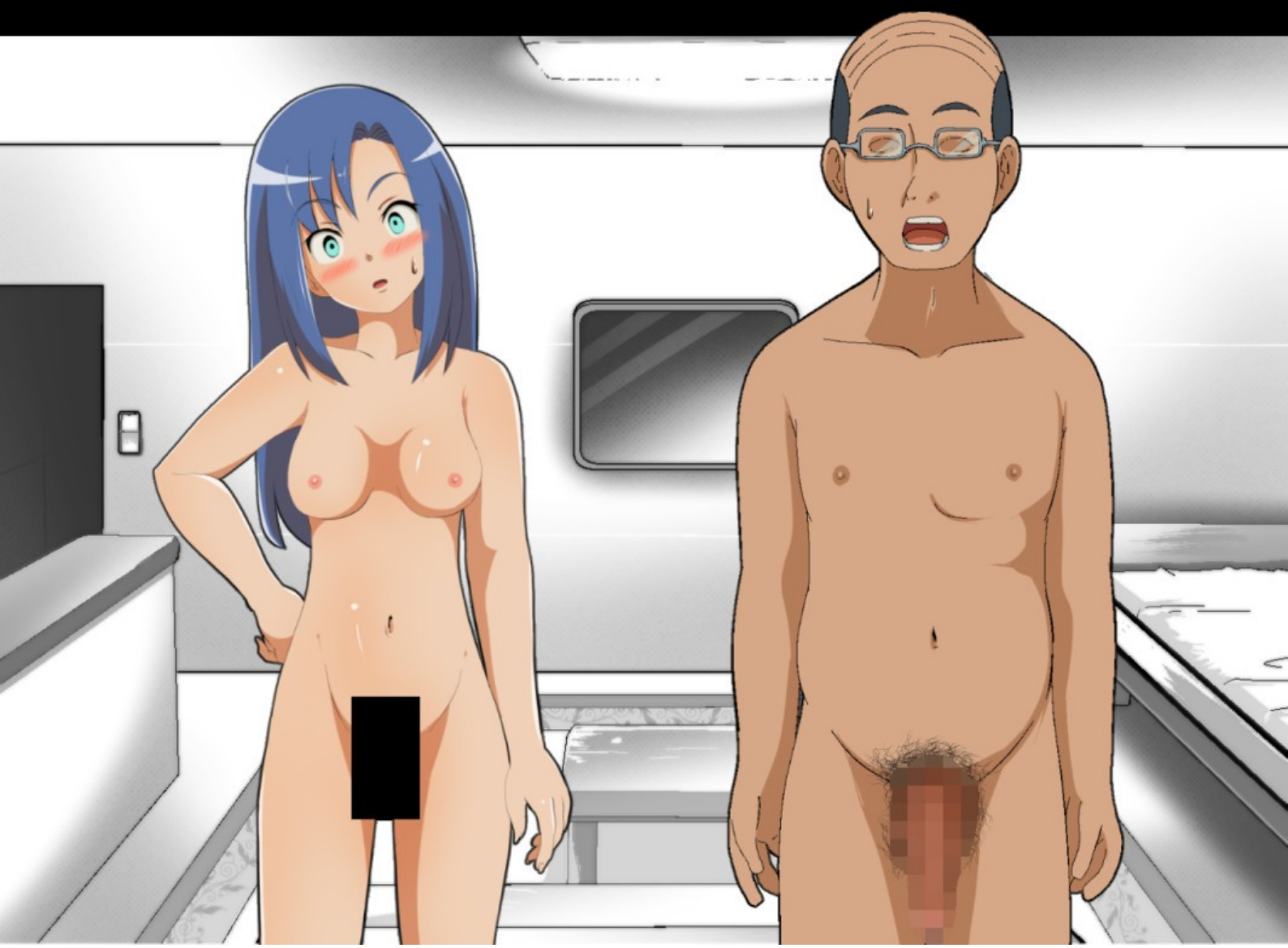
吉田「!？」

結那「…ん？」



吉田「…」

結那「…え、なに?どうしたの…?」



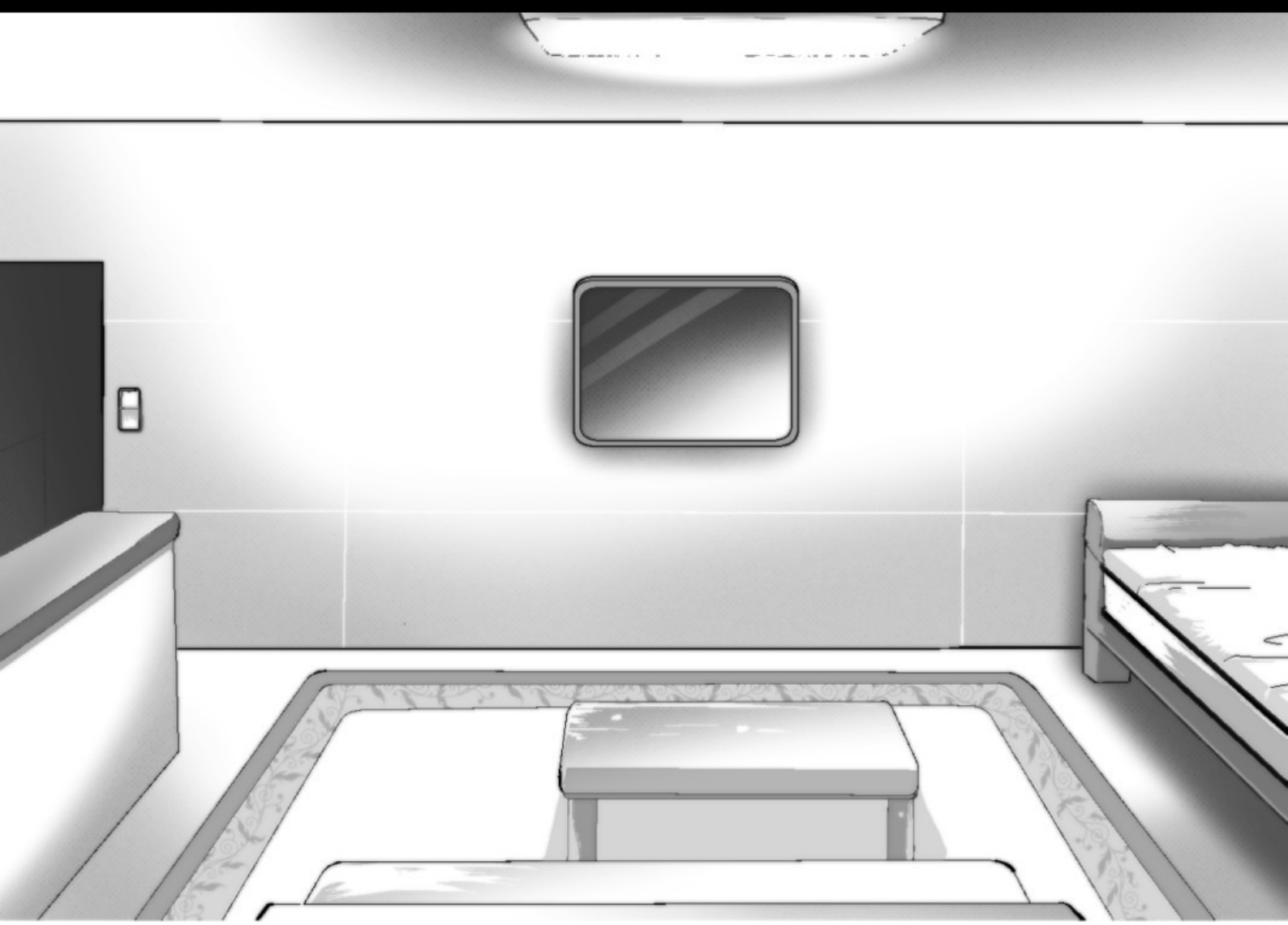
＝
＝
＝

結那「…ウーロン茶でいい？」

吉田「…ああ、ありがとう」

結那「…」

吉田「…」



吉田は腰を少し痛めた。

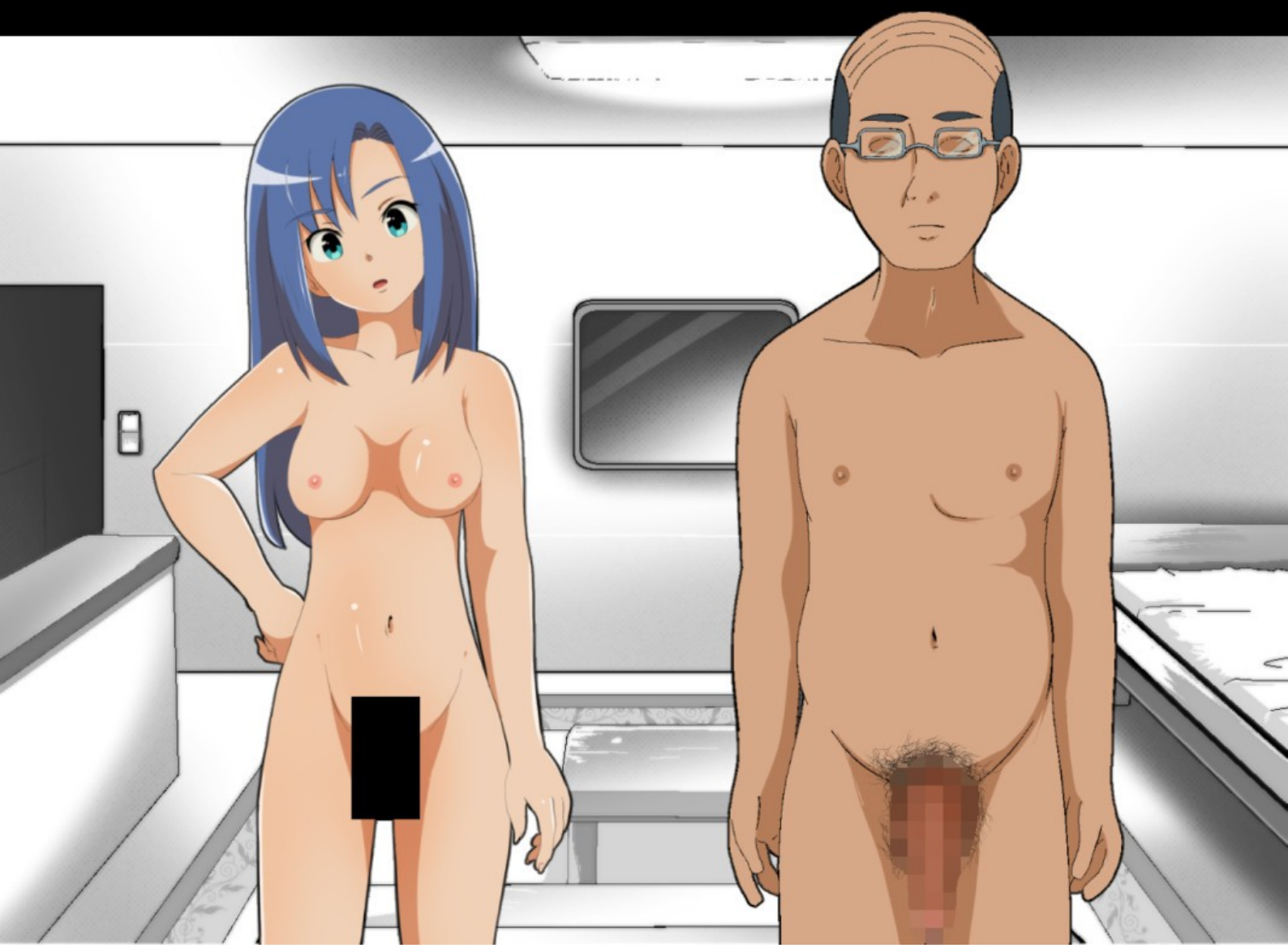
重症ではないが激しく動かしたら痛みが深くなりそうな感覚だった。

吉田「とりあえずきょう一日は安静にしておく」

結那「あ、そう」

吉田「…」

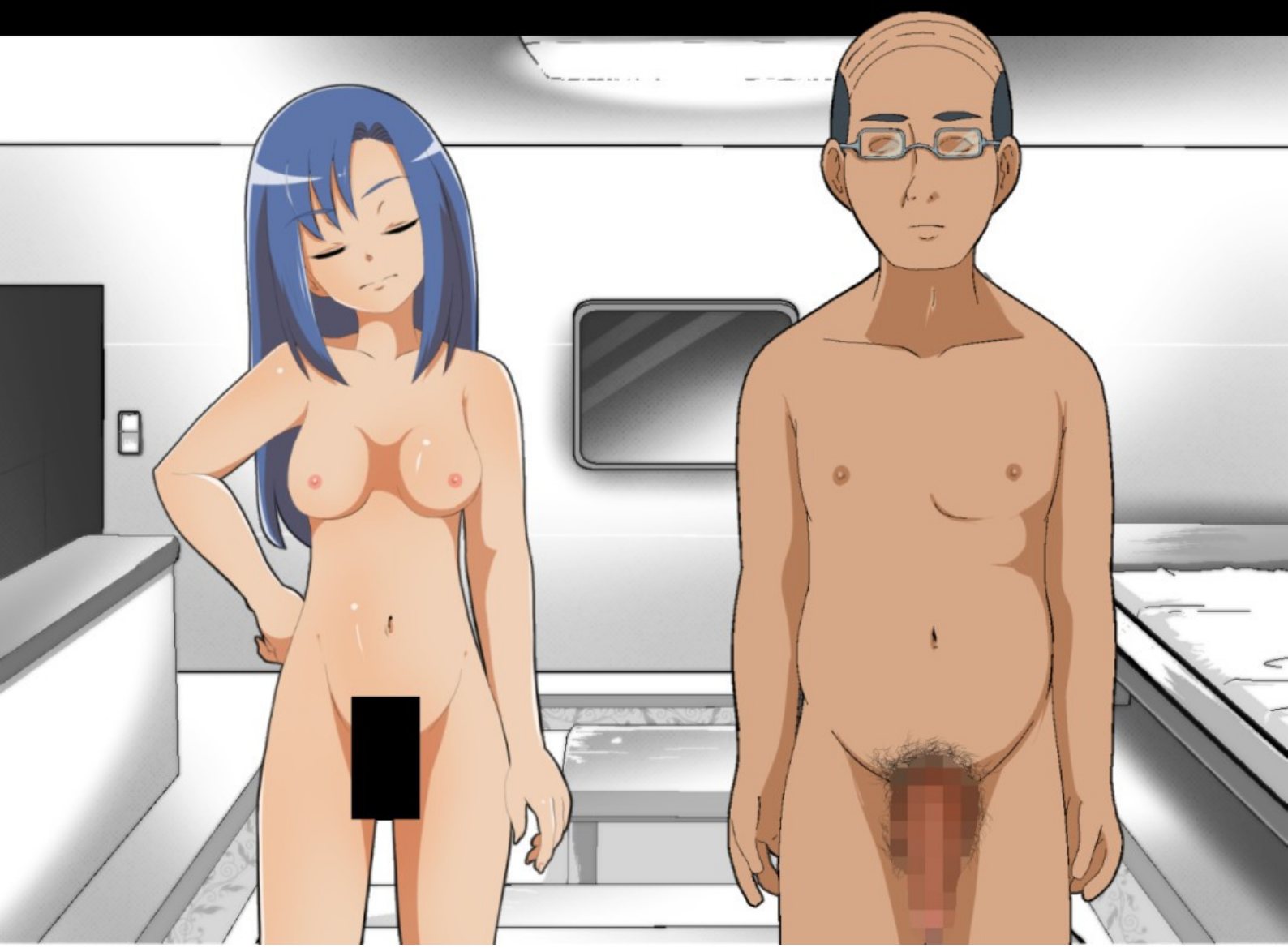
結那「…」



結那「ふっ…」

友馬(…? 結那…?)

結那「…ぷっ」

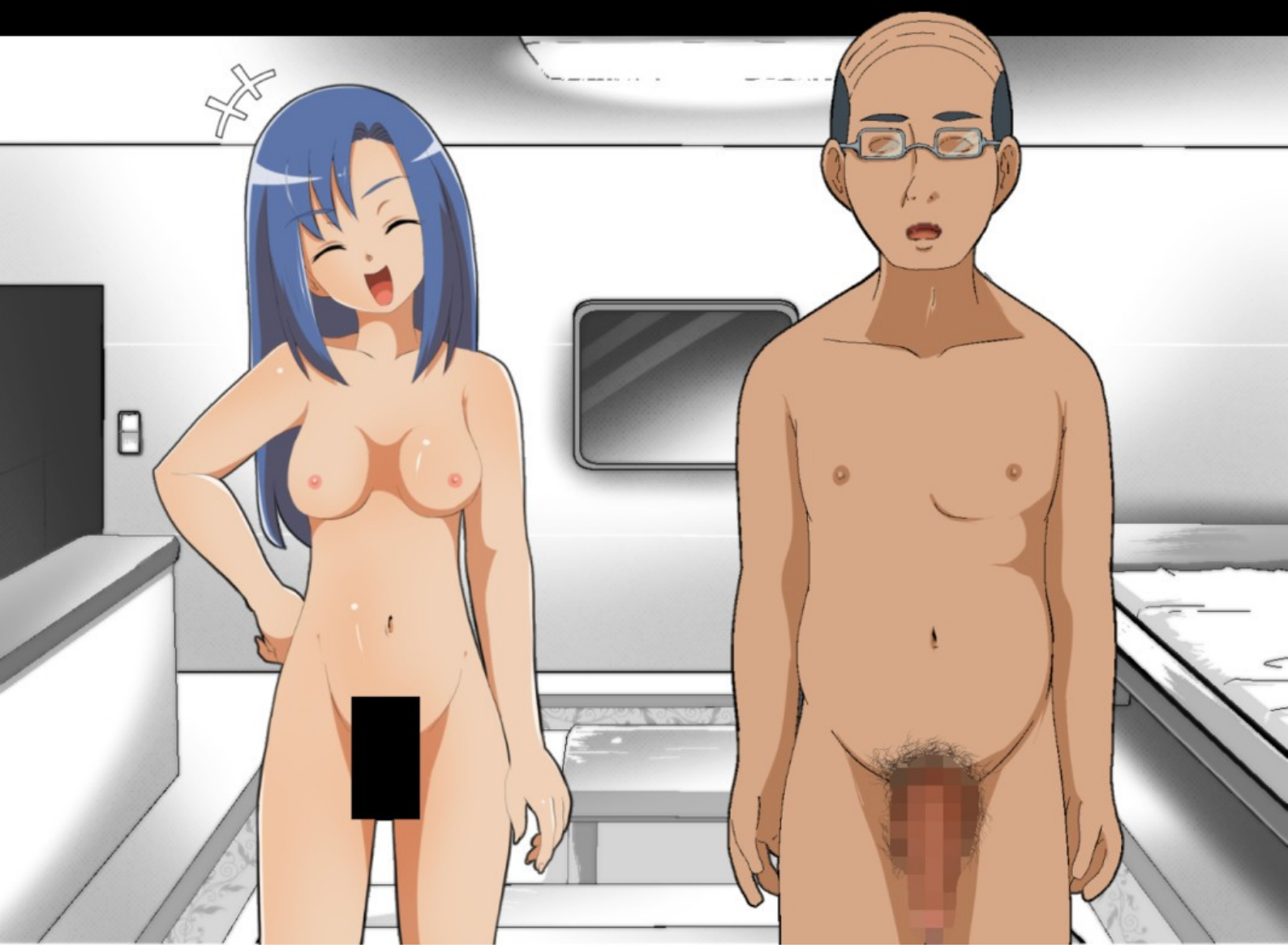


結那「~~~~っ…あははは！」

結那がベッドで横になる吉田の前に
大きな声で笑い出した。

明るく活発である結那の、久しぶり
に聞いた本当に面白おかしくて笑って
いる声だった。

幼馴染の友馬だから分かった。



結那「だってさ…若い女の子とやれる
からってめっちゃ必死になってたら自
爆って…w」

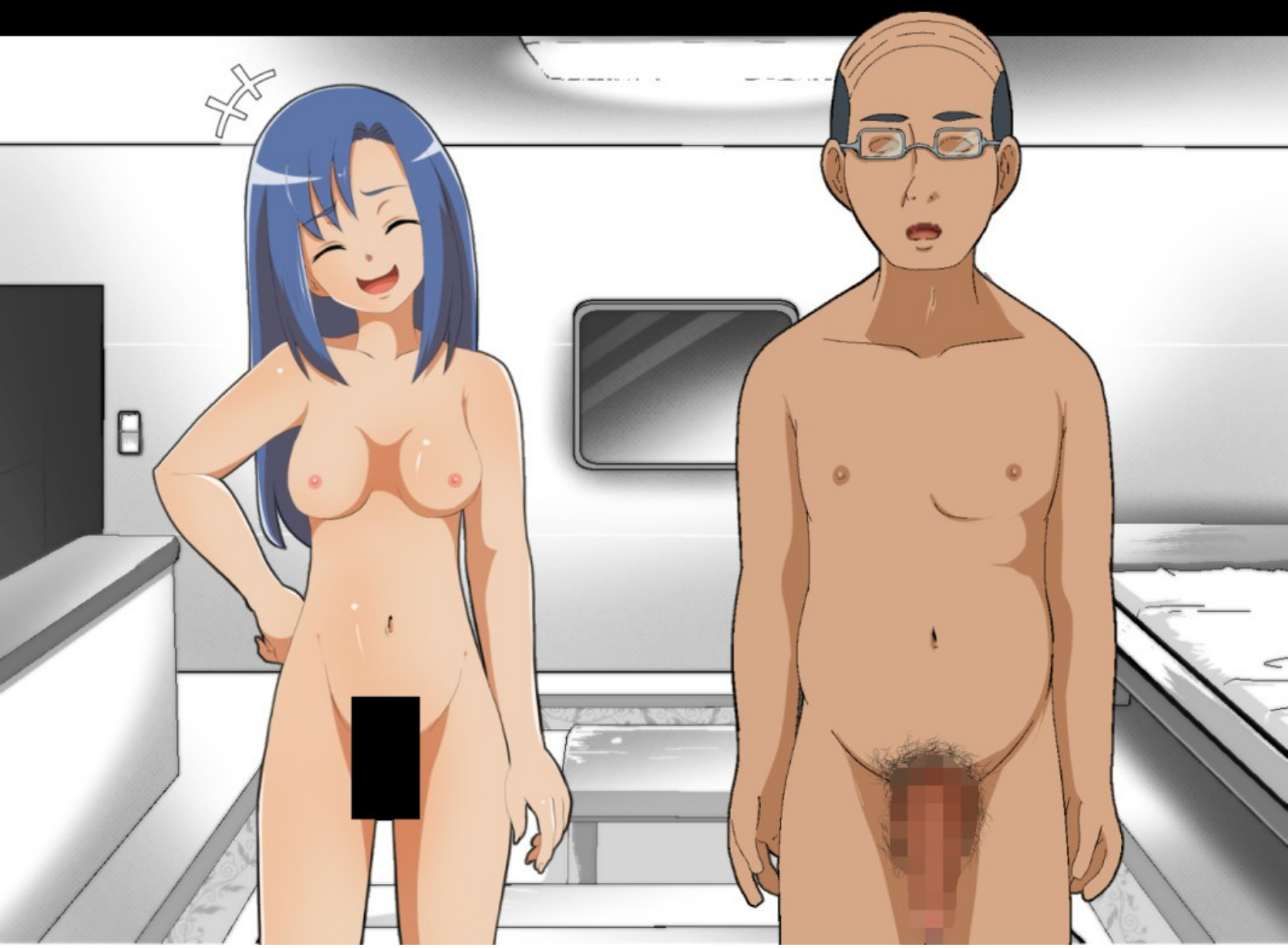
「~~~~っ(笑)！」

吉田「おい」

「笑い過ぎだぞ結那」

結那「え…ちよ、なにどさくさに紛れて
名前呼びしてんの？」

吉田「…ダメか？」



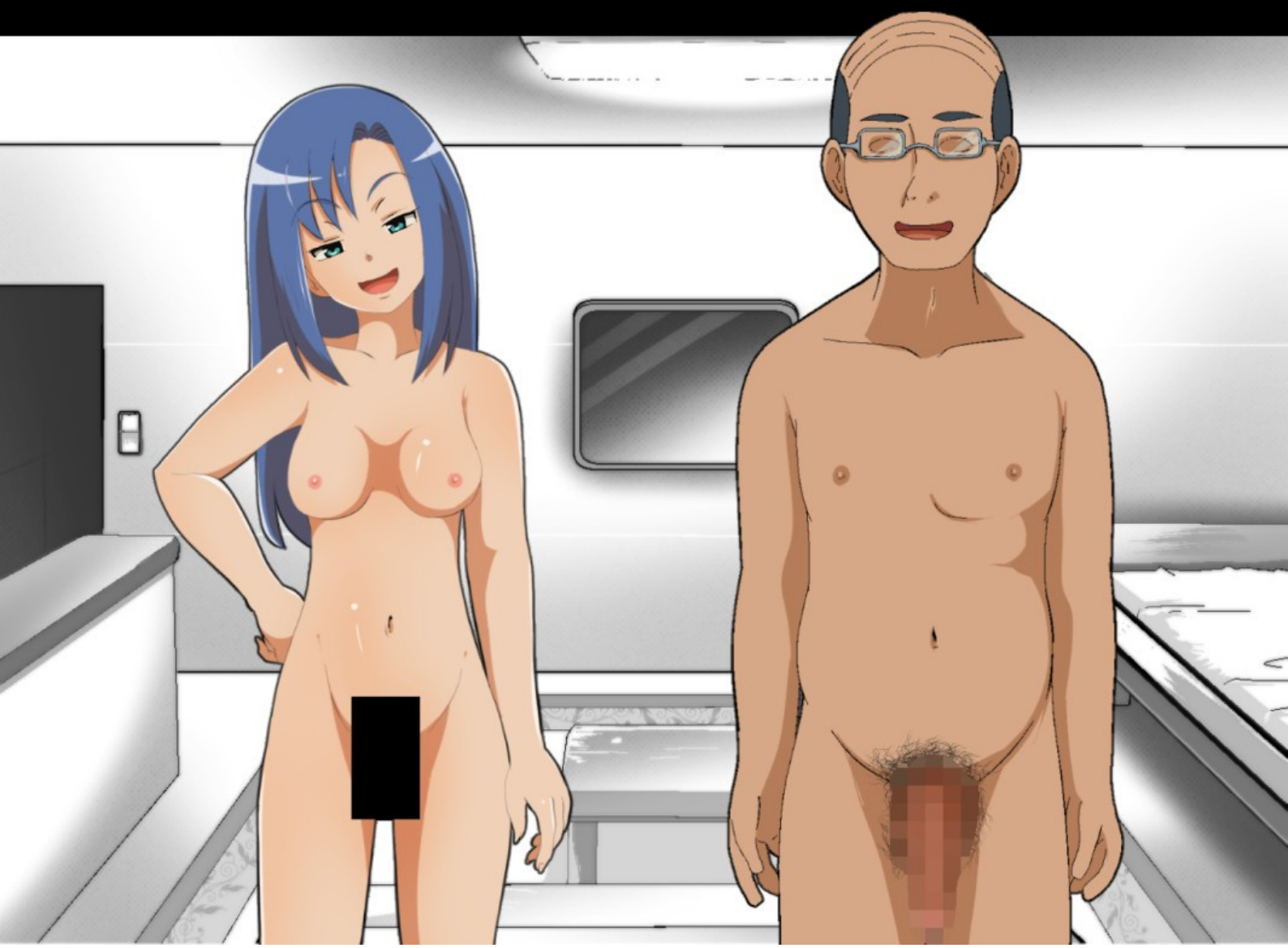
結那「：別に」

「吉田先生の好きに呼んだら？」

友馬「！」

吉田「：ああ」

友馬には二人の過ぐす空間に流れる空
気が、妙に軽くなったような気がした。



結那「…別に許したわけじゃないけどさ」

「ただ…男の人がどうしてもそういう感情を我慢できなくなっちゃうってのも分かるから…」

吉田「結那みたいな可愛い子と二人きりで過ごせなんて…耐えられるわけないんだよ」

結那「耐えろよ」

吉田「無理でした」



結那「…でも吉田先生さあ、ホントに最低なことしたけど…こんな状況じゃなかったら先生だってあんなことしなかったでしょう？」

吉田「…いや、どうかな」

結那「おい！私から寄ってあげてんの…もう」

吉田「…あっイク…イクそうだ結那」

結那「はいはい」

吉田「褒めてくれ…！俺の射精…!!」

結那「はいはいはい…」



結那は手にぎゅうつと力を加えて、吉田のソレを強めに握る。

より激しくゴシゴシと扱く。

今日は吉田が腰を激しく動かせないため結那に手で扱ってもらっていた。

：キスしながら、吉田の要求したシゴきかたをしつかりこなす。

射精を褒めてほしいという理解しがたい頼みでさえなんだかんだ付き合ってくれる。

結那の一方的な奉仕プレイであり、別にそんなことをする義理もないのにやってくれている。



結那「うわっ！吉田せんせーの射精こんな間近で見れちゃうの!?やばっ!!めっちゃテンション上がるんだけど!!」

「今時女子って射精してる男の人の姿にキュンキュンしちゃうんだよく?吉田せんせーのかっこいい射精見せてみて〜♪?」



吉田「ハアハア…」

結那「…お疲れ、って言いたいんだけど」

「なんでまだ硬いままなの…」

…3発目でもその勢いは衰えてい
な
か
つ
た



結那「おまたせ」

吉田「…おお」



結那「本当にこんな格好がコーフン
すんの…?」

吉田「する」

結那「うわ、即答…」



吉田は前日、結那にスク水ニーソの魅力を語っていた。

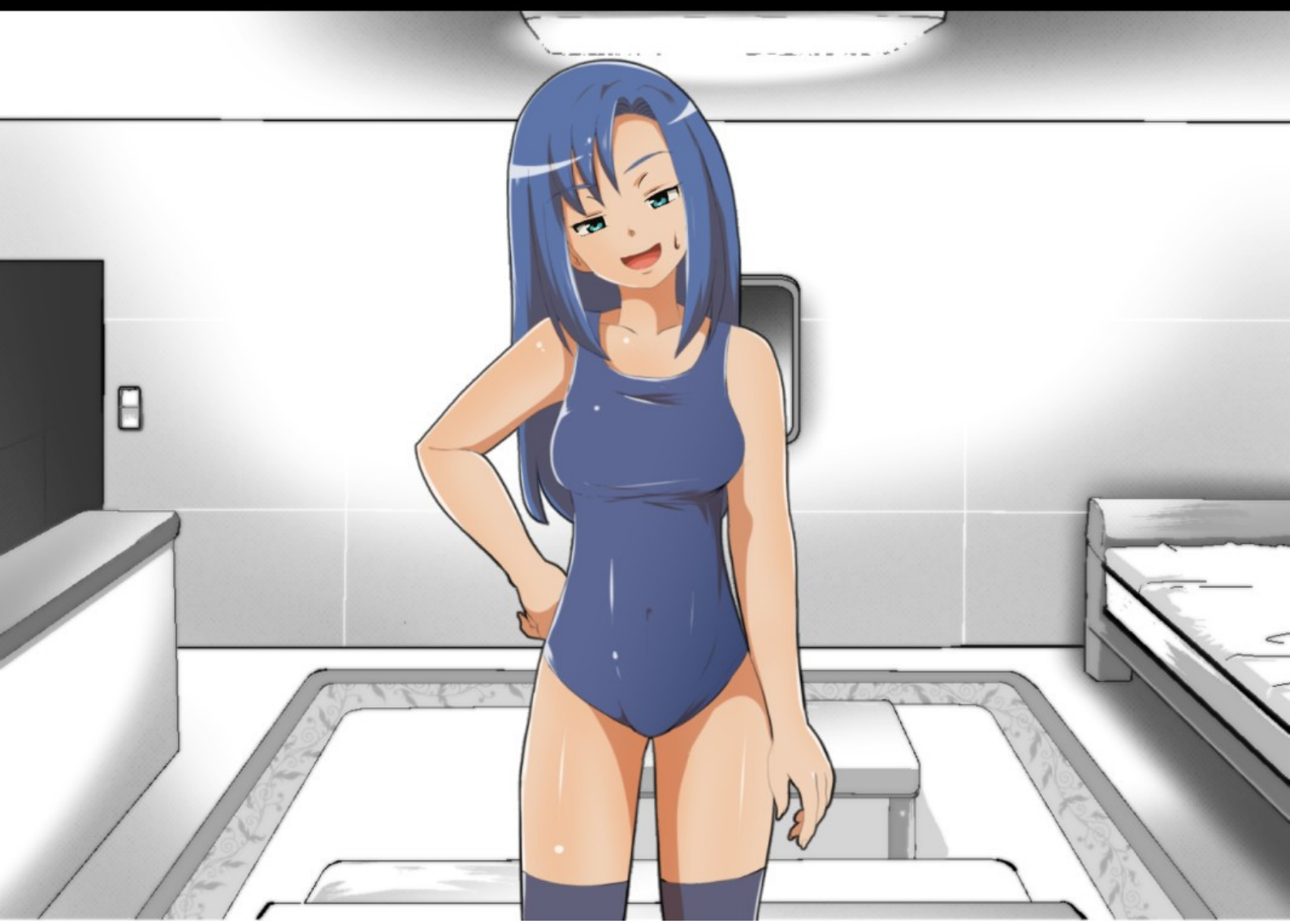
結那は理解できずにいたがとりあえず聞き相手にはなってくれていた。

すると、次の日。つまり今日、結那が寝巻きを置いている場所にいつの間にか置かれていた。

スク水とニーハイが。

説明なんて出来ない奇妙過ぎる事だが、今更驚きもしなかった。

サイズも当然のごとく丁度だった。





吉田「…多分もう腰も大丈夫だが…」

結那「念のため今日も安静にしてた方がいいですよ」

吉田「ぐっ…スク水ニーソ結那が目の前にいるのに…」

結那「我慢我慢、だーい好きなニーハイでち

んちんいっぱいゴシゴシしてあげるから」

「ほら、サービスの乳首コリコリ攻撃」

吉田「…キスも」

結那「はいはい」

二人はソファに連なるように座る。

後ろの結那が脚を回しこんで吉田のソレを器用に扱っている。

両手で乳首を。

…そしてキス。

結那を全力で堪能できるこの奉仕プレイを受けながら何が我慢なのか。



吉田「結那…今のうちに言っておくが…明日、腰の調子も戻ったらちよっと引くぐらいやるかもしれん…覚悟してくれ」
結那「じゃあ今のうちに一滴残らず搾り取っちゃおう」

結那は脚と手の動きを速めた。

吉田は腰が若干浮き上がる。

結那「ぐらっ！動かないで！安静にしてて下さいい吉田せんせ♪」

吉田「結那あ…覚えてろよ…お!!」

結那「楽しみにしてまゐすwほらっ又キ又キしましゅね〜(笑)」

吉田「~~~~っ!!」



結那は楽しそうだった。

もう、無理やりでも何でもなかった。

担任教師とこんな場所に閉じ込められ、
良好な関係のまま過ごせるかと思いきや、
体を求められいいようにされた。

一時は言葉も交わさないほどだったが、そ
れでも体を重ね合い、いつの間にかおふざ
けごっこのような感覚で笑って行為に及
んでいる。



友馬「…」

友馬には分からなかった。

これは密室での暮らしを続けたことによって精神状態が麻痺してしまった結果なのか。

…それともどんな過程であれ、結那と吉田の心が寄り添いだした結果なのか。



次の日、二人は朝からおっぱじめた。

食事を済ませた後、吉田は結那をベッドに押し倒した。

結那は腰本当に大丈夫？と言ってきたが、吉田はその腰のピストン運動でしっかし動かせることを証明した。



すでにベッドには一発分の使用済みゴムが置かれている。
昨日言った通り、吉田は腰をガンガンに振って激しいペースでやっている。
結那に搾り取られた仕返しと言わんばかりに。

結那も吉田の意図が分かっているので喘ぎ声なんて簡単に上げてたまる
かと、余裕を見せるために淡々と会話する。



結那「てか吉田せんせーってさ、結婚してないんだよね」

吉田「ああ」

結那「じゃあ別にいいのか…」

「…っていやいや！いいわけないか！！
あつぶな…！」

吉田に質問して納得した後、自身でツツむ結那。

未婚だから教え子とやってますがセーフなわけないと。

結那「…せんせーって四十後半だっけ？」
吉田「そうだ」



結那「ヤバ…お父さんより年上じゃん」

吉田「…最近だとタレントでも年の差婚とかよくあるよな」

結那「え？うん」

吉田「…年の差の恋愛ってどう思う？」

結那「…」

結那「いや、フツーにキモいぞこよ」

吉田「…」

結那「…でも」



結那「ま、まあ本人同士がいいなら別にいいんじゃない？好きにどうぞって感じ？」

吉田「…そう、だよな」

結那「え、えゝ？まさか吉田せんせーそんな年下の女の子好きになっちゃったとかゝw w？年の差なんて言い方するってことはそういうことでしょゝ(笑)」

吉田「…ああ」

結那「うわやバwマジでゝ(笑)！」

「てかぶっちゃけ当てていい？教え子だったりするんじゃないw？」

吉田「…正解」

結那「(笑)せんせーそれマジでヤバいってw絶対言っちゃ駄目なやつじゃんw」



結那「…なーんてw」

吉田「…」

吉田「どのくらいだ…」

結那「じゃあお返しに私も言うけど…
ww実は私もさ〜(笑)割と年上好きって
いうか…」

結構上でもいいっていうか…」

結那「…40後半くらい…w?」



吉田「ハアハア…そんな年のオヤジ、
ただ性欲で動いてるだけだぞ」

結那「はあはあ…分かってないな〜せ
んせーは(笑)いい年してすっごい全
力で求めてきて必死になり過ぎてて
可愛いていうか…♪」



結那「せんせーこそそんな若いだけの小娘何がいいんですか？若さしか見てないでしょ（笑）」

吉田「…なんだかんだ結局付き合ってくれる優しさと明るくて元気で…可愛い所だ…！」

結那「ふ、ふーんよく分かんないなw」



吉田「ハアハア…結那、もし…もしも俺
がお前を、結那のことを好きだと言った
らどうする…?」

結那・友馬「!？」

吉田「…」

結那「はあはあ…え、え…?どうするっ
てなにが…?」(笑)「どういうことw??」

じゃあ逆に聞きたいんですけど…」

「もし私が吉田せんせーのこと好きっ
ていたらどうしますか…?」(笑)」

吉田「おいつ質問してるのは俺だぞ…ち
ゃんと答えろ…♡」

結那「じゃあせんせーも私の質問答えて
ね…♡」



吉田「…それなら、同時に好きな人の名前
言っぞ…いいな?」

結那「…いいよ」

「でもせんせー多分すっぴんびっくろ
しちゃうと思うよっ♡?」

吉田「結那こそめちやくちや驚くぞ…♡」

結那「吉田せんせーの好きな子って誰な
んだろっ全っ然分かんないなあっ♡」

吉田「結那の好きなおじさんだってまっ
ったく見当もつかないぞっ?♡」



吉田「さっしゅ…」

結那・吉田「サーっの…♡」

『よ…♡』

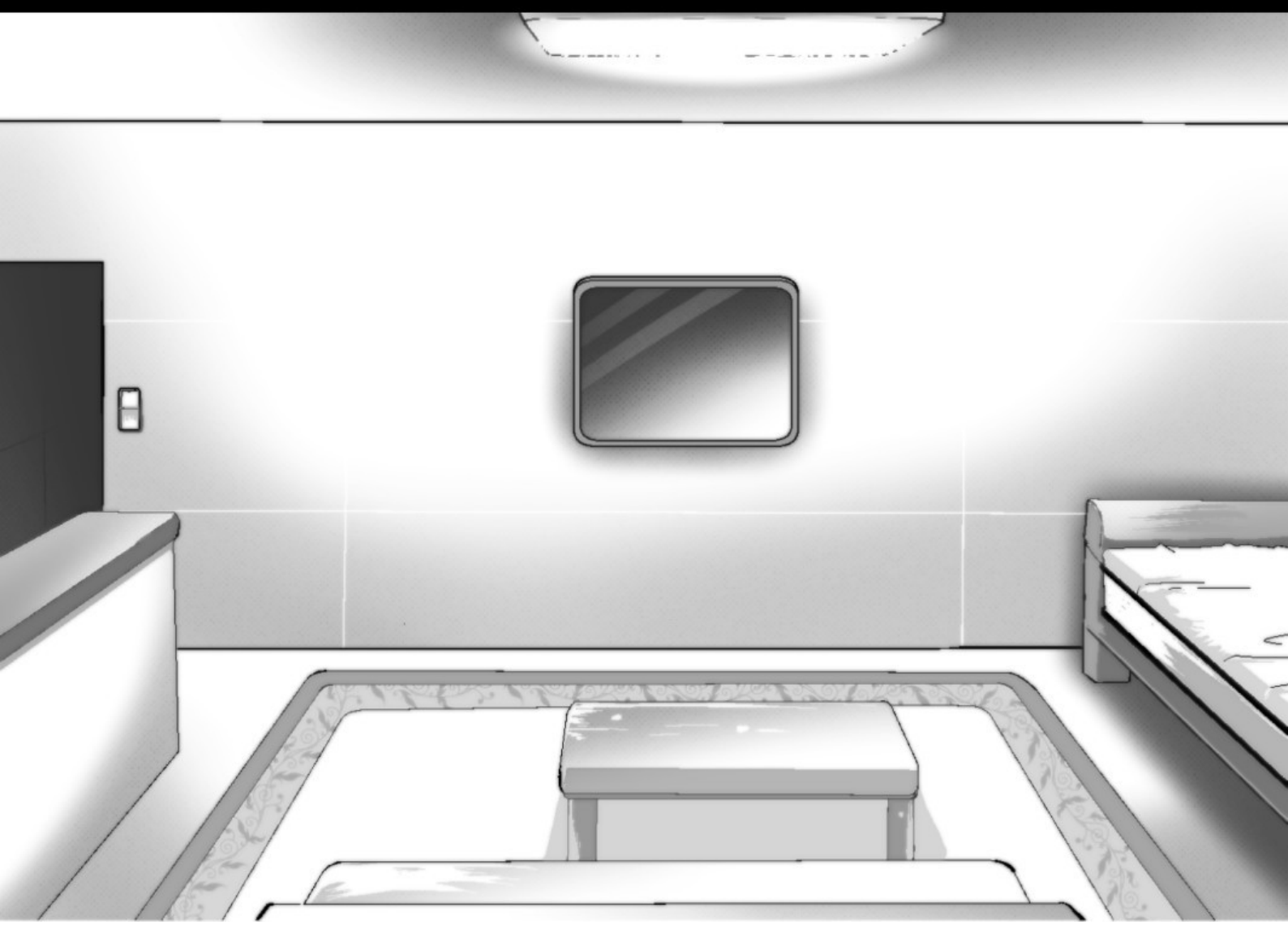
『さ…♡』



「…」

「…え」

友馬「…ん？」



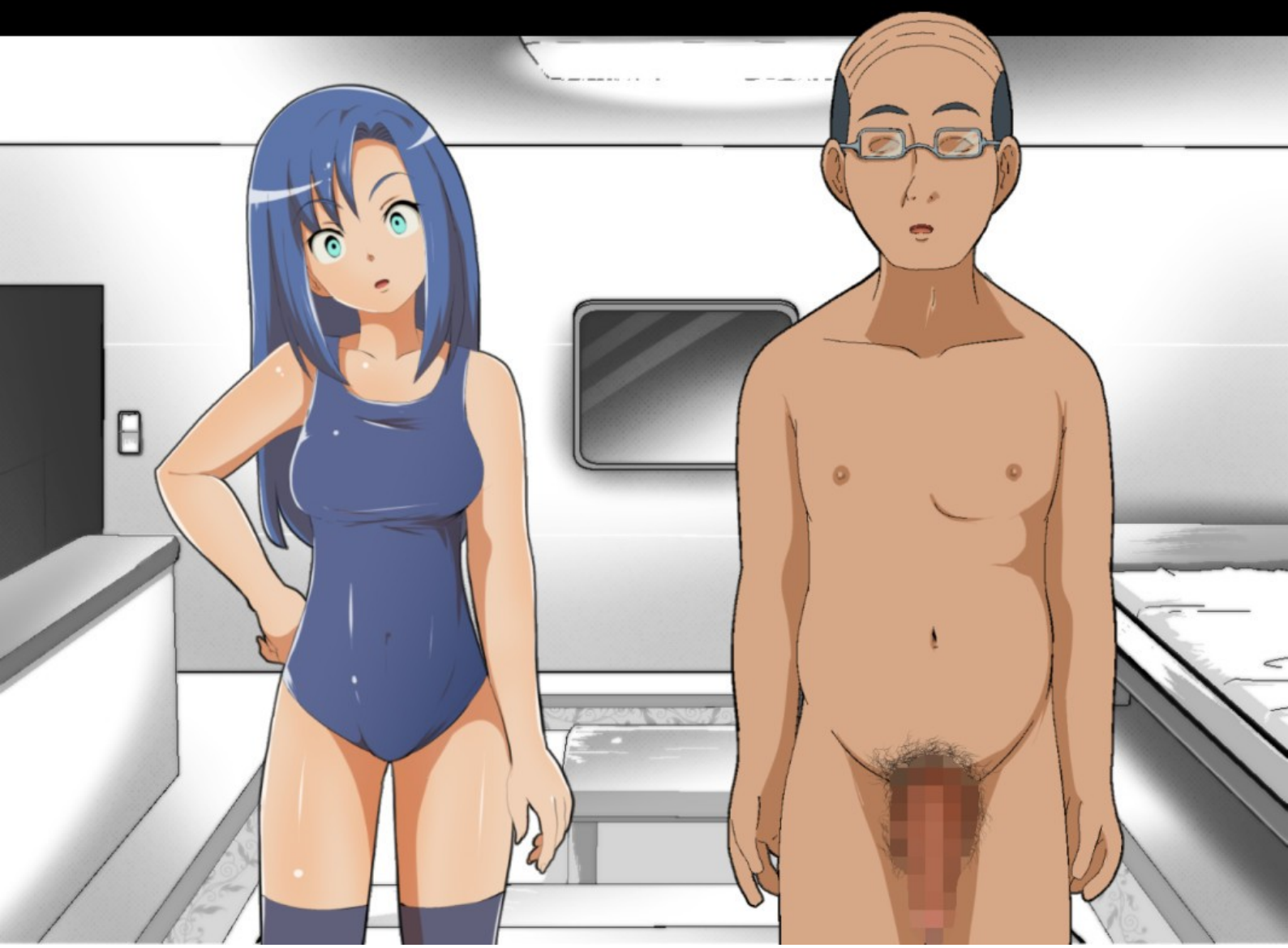
結那がフと視線を向けたと思ったら、
その状態のまま固まった。

比喻ではなく魔法で固められたかの
ように本当にピタツと止まっている。
遅れて吉田も結那の視線を追う。
が、同じようにガチッと固まった。

その目線の先は…友馬のいる見えな
いはずの壁。

二人からはただの壁としか認識され
ていなかったはず。

なのに、しっかりと壁越しの友馬と
目が合っていた。



友馬「…あ」

結那「え…あ…え？」

吉田「お…」

もう完全に認識できているのが分かった。

目を合わせたまま、口だけパクパクと動かす結那。

何故このタイミングで急に
見えるようになったのか、こ
の状況をどう処理すればいい
のか。



友馬からしてもやっと二人とコンタクトをとれるようになったが、今、何をすべきなのか全く判断できない。

ゆっくり手を前に伸ばす。ピタッと分厚いガラス面の感触があった。

向こうからも確認できるようにはなったが、壁がなくなったわけではないようだった。

友馬は少しだけホッと安心してしまった。

「……」

三人が全く動けなくなった状態が続く、かと思った。



吉田「…ええ!? ひ、平野いたのか! 全然分からなかったぞ!!」

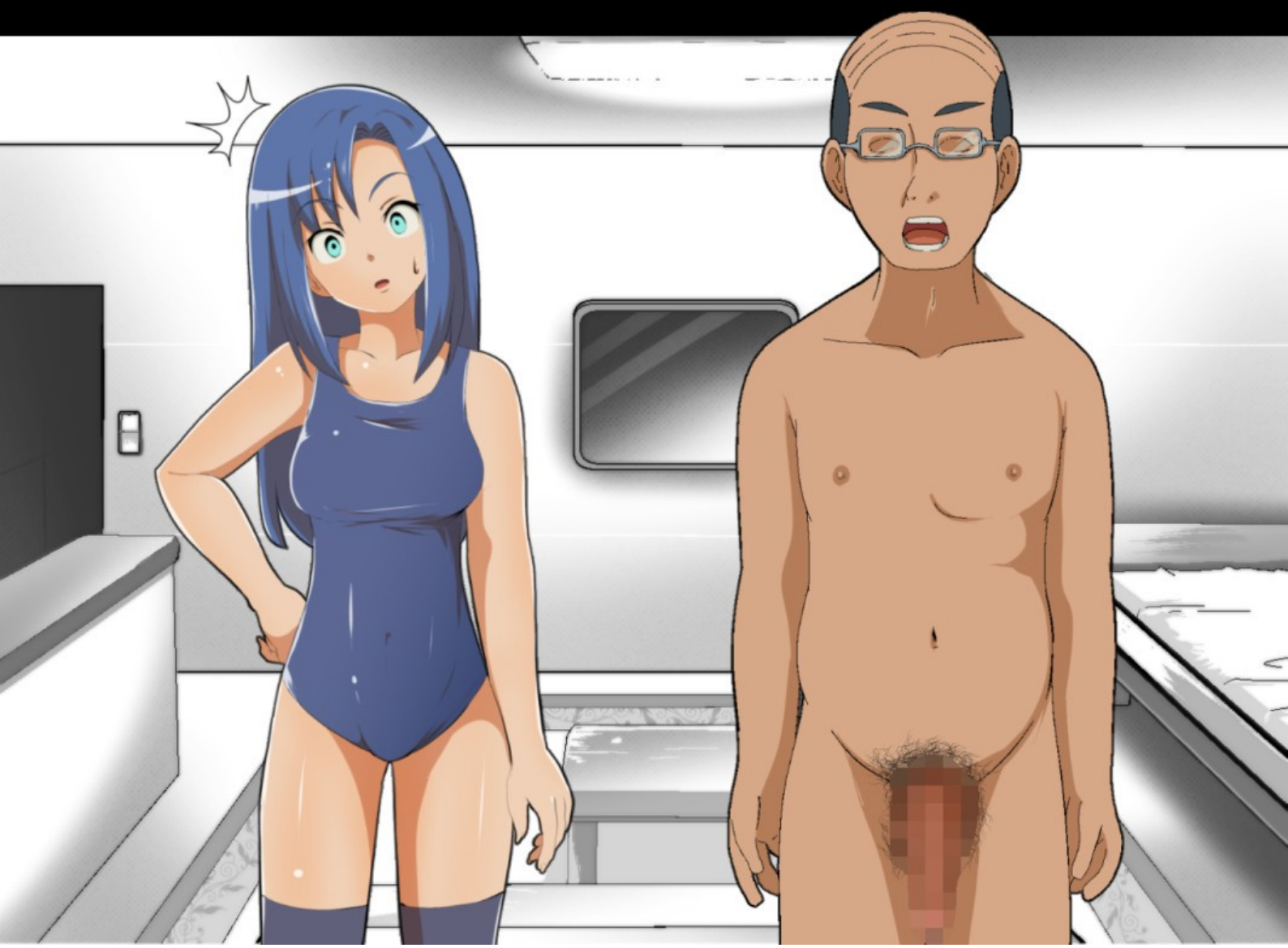
「ていうかなんだこの壁はー! 急にガラス面みたいになったぞ!!」

結那「…!」

吉田が張った声でそう切り出した。

場違いというか若干明るすぎるくらいのトーンで喋ったので結那と友馬はピクツと身体が跳ねた。

吉田「平野…これは違うんだ…! 理由があつてな…!」



体を重ね合っている。

やっているのは完全にそういった男
女の営みである。

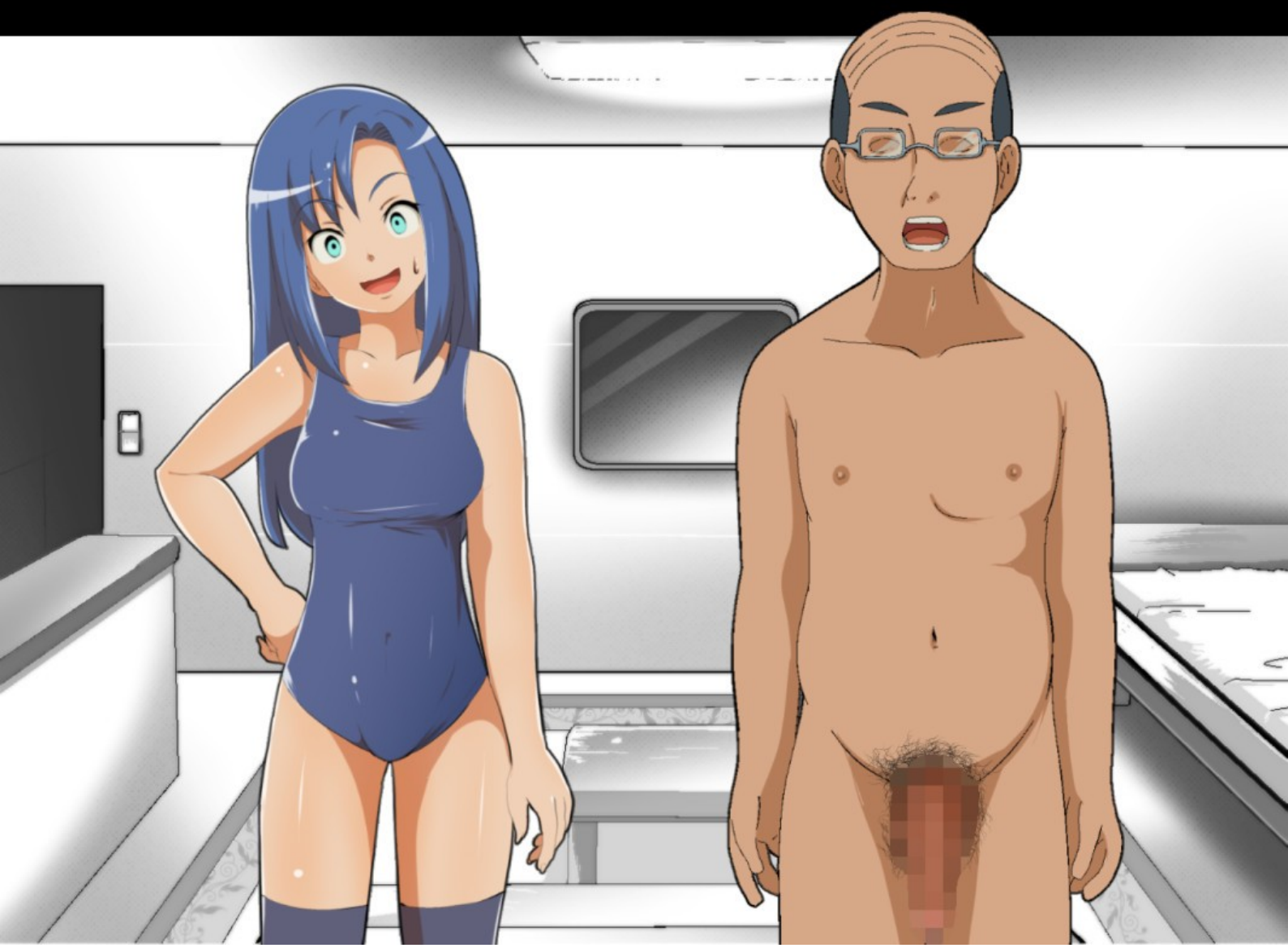
何がどう違うなんてこともない。

…が、結那は友馬より吉田の心情を察
してしまった。

結那「そ、そうそう！友馬落ち着いて聞
いてね！別に私と先生がこんなことし
てるのに深い意味なんかないんだよ！」
友馬「…」

吉田「これはな、コミュニケーションの
延長線というか…」

結那「ちよ〜っただけ行き過ぎたスキン
シップだから！ね、先生！？」



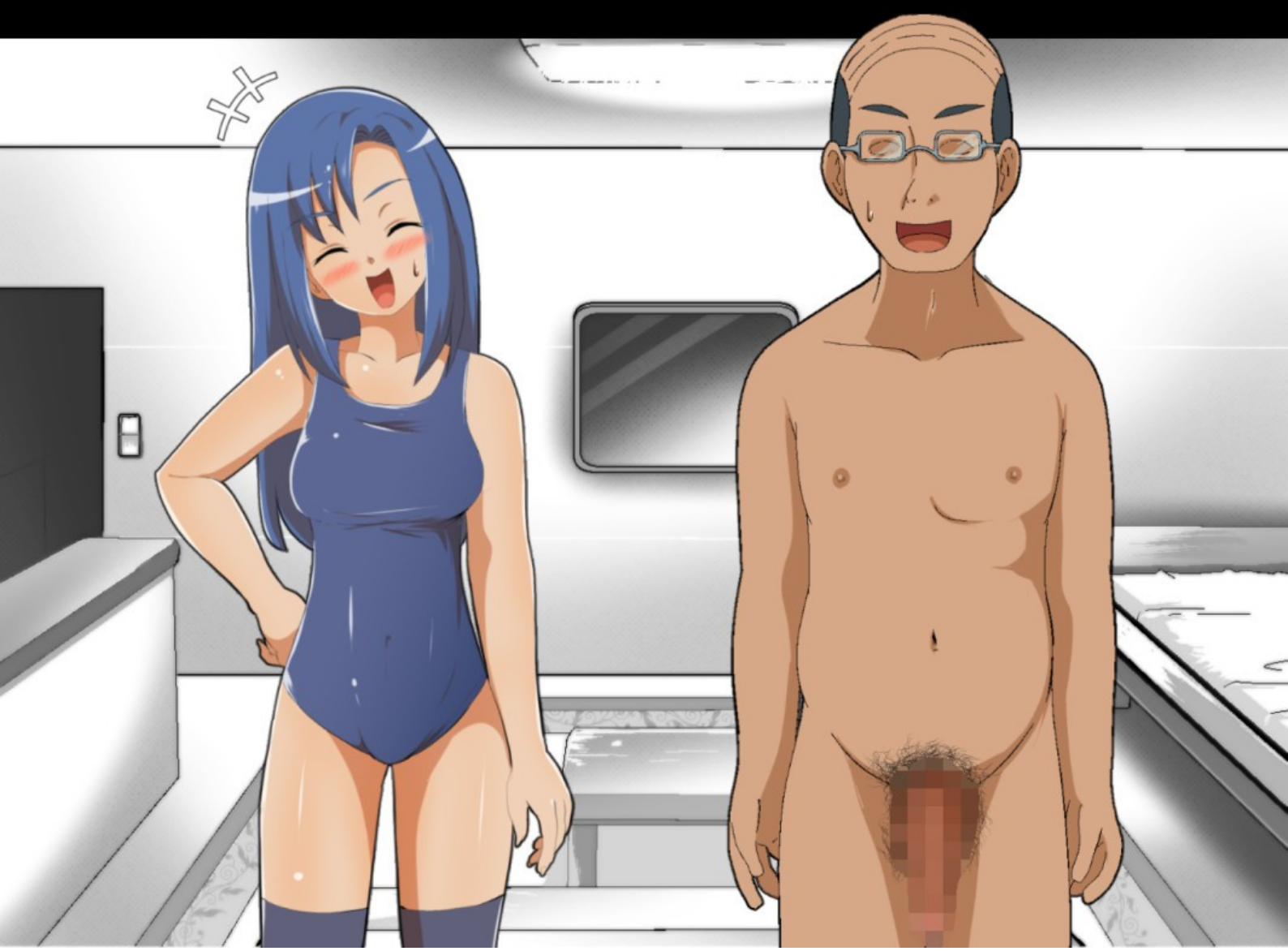
友馬はまだ一言も喋っていないのに、二人は捲し立てるようにアレコレ喋り続ける。返答する隙など与えんと言わんばかりに。

吉田「こんな閉鎖空間にいたらやっぱり精神的にも参ってくるだろ」

「そうなると大事なのはコミュニケーションだ、人との関りが気持ちを安定させるんだ」

結那「だから、ね？スキニシップってことであつういふことしてたのー！」

「ある意味運動にもなるし！メンタルケアも兼ねた気分転換っていうか…！」

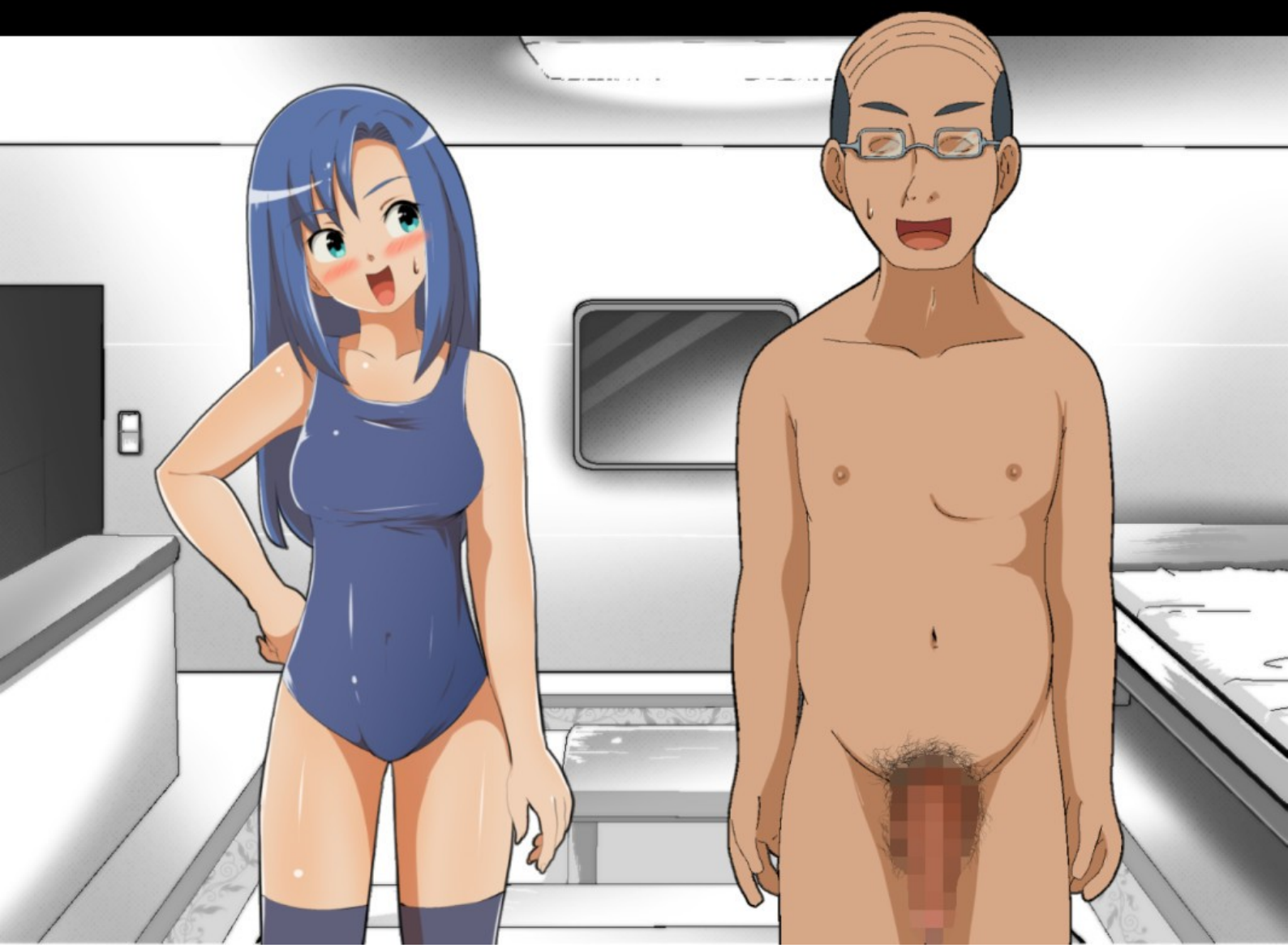


何となくそれらしい理由を次から次へと一方的に話し続ける二人。

片方が話し終わると、もう一人が間を開けることなくバトンタッチするように口を開く。

：何を言おうとも、友馬は初めから見ていた。すべて。終始。

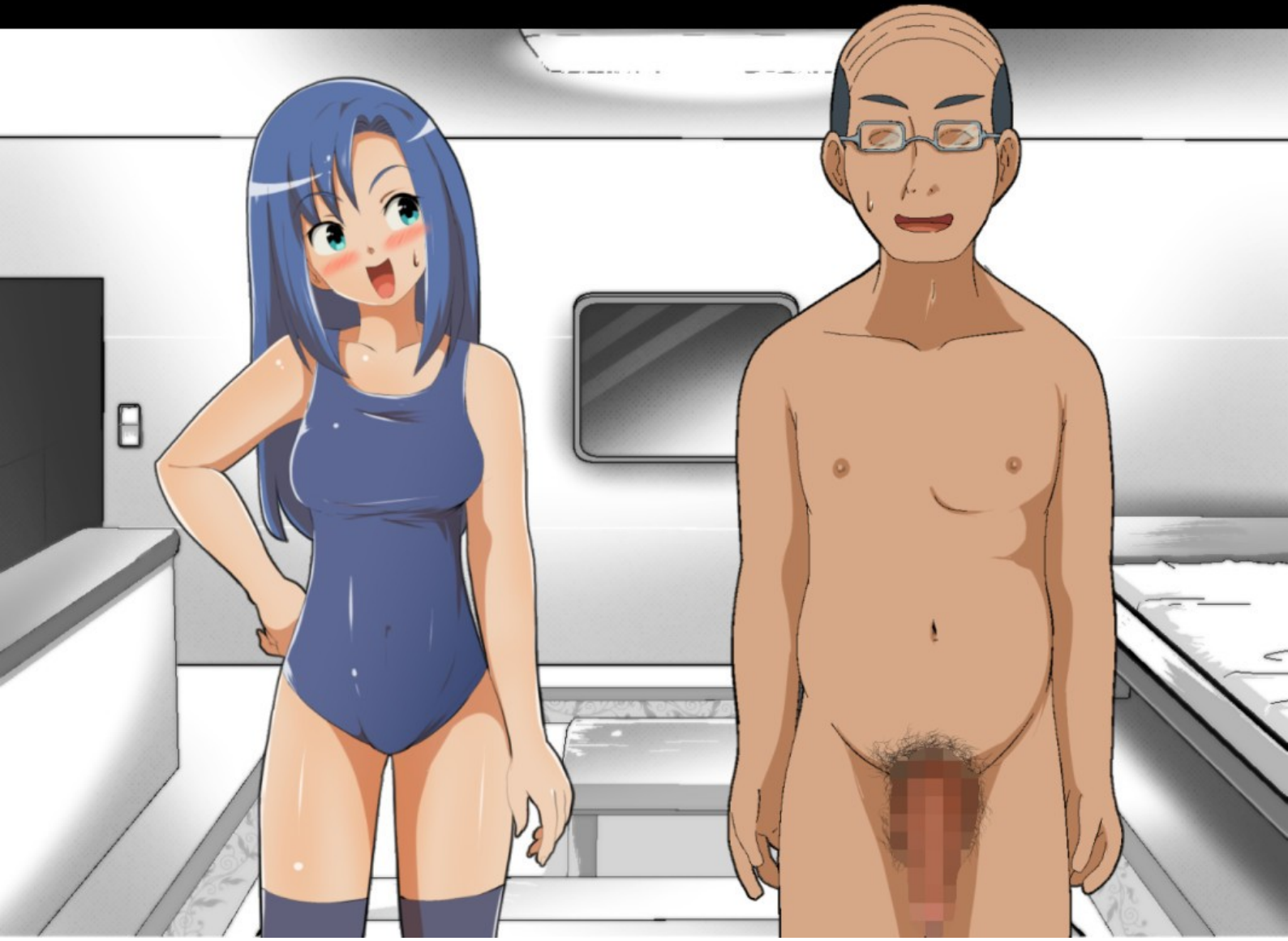
結那は友馬に会えたことへの想いやなぜ友馬も同じ空間にいたのか、といった疑問よりも、自身と吉田の及んでいた行為に最もらしい理由を並べることに必死になっていた。



吉田「まあ見方によってはエロい事かもしれないが全然そんなじゃないとか…な、結那！」
結那「うん！限りなくセックスに近い全く別の行為だから！ね！先生！」

二人はとにかく自分たちの営みを「コミュニケーションの一環、メンタルケアのためのスキンシップで通そう」としていた。

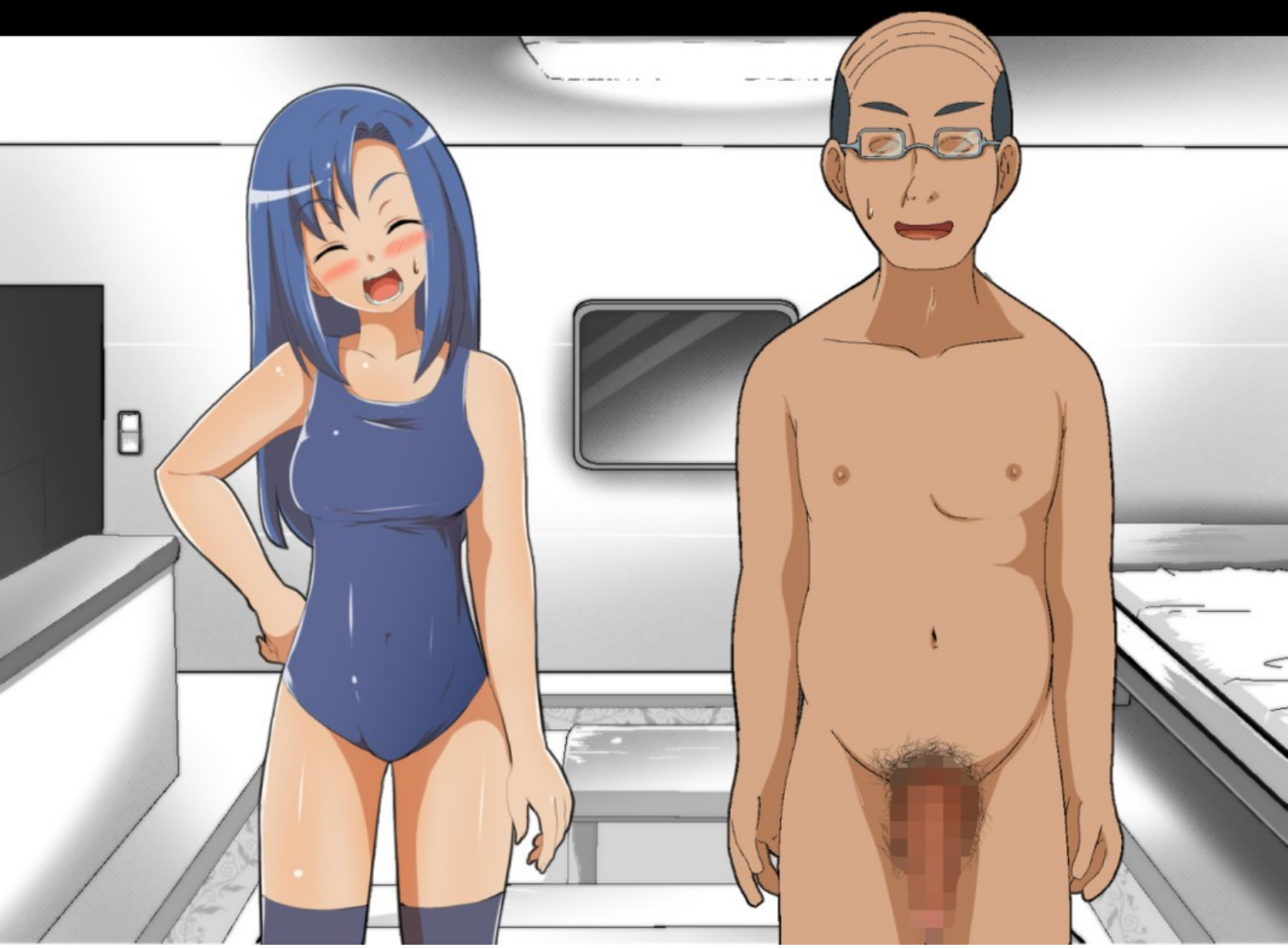
そんなわけがない滑稽な言い訳。
もうすがすがしくさえ感じていた。



結那「吉田先生のことなんて全っ然好きでも何でもないからね(笑)ただ仕方なく気晴らしでやってただけだから!」

吉田「俺も結那に特別な感情なんて一切ないからな(笑)運動不足のためと教え子との交流の一環として行ってただけだから安心しろ平野!」

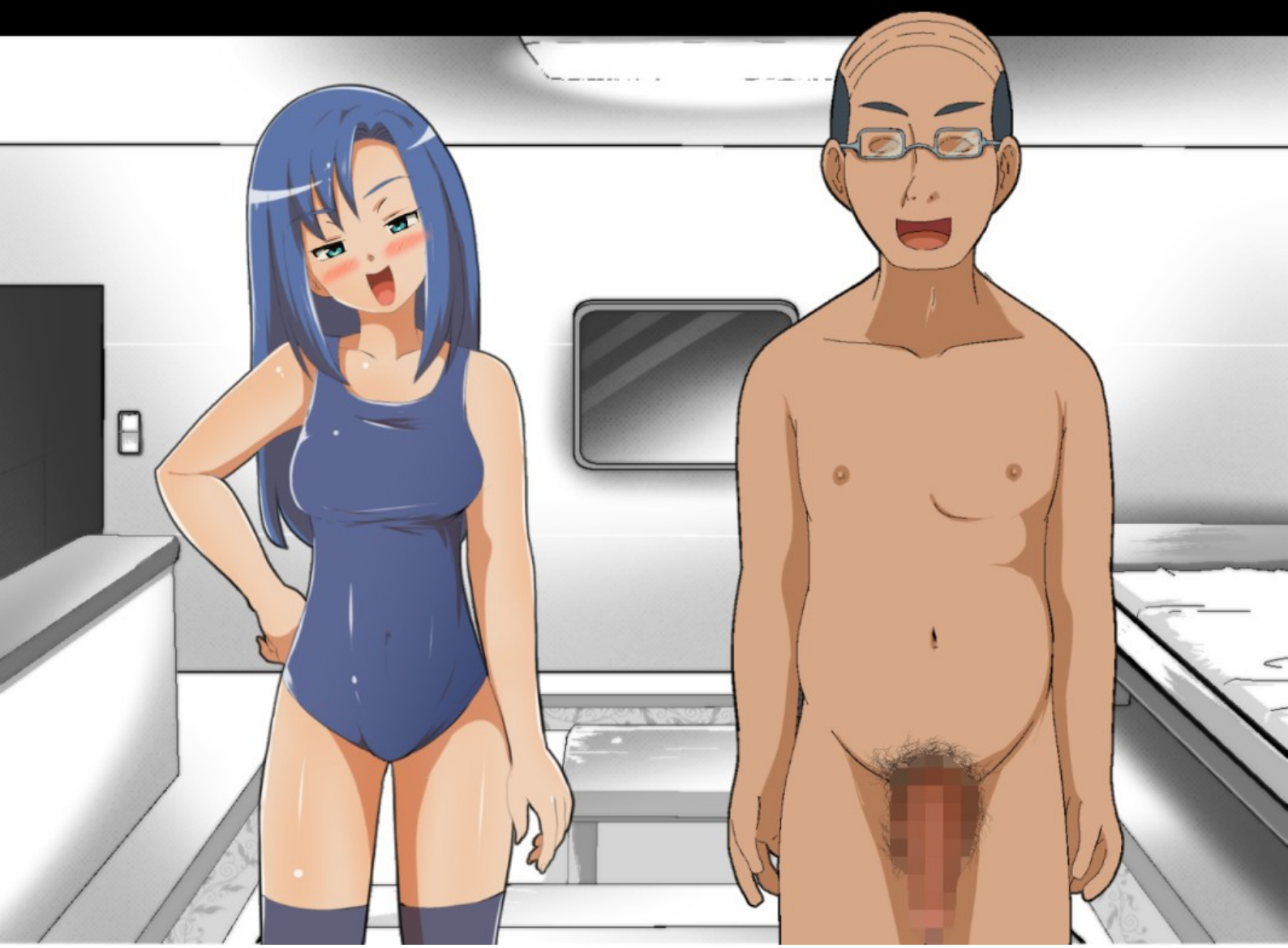
友馬「…」



結那「あ、あゝ！信じてないなゝその目は…w」

吉田「よ、よし！それじゃあ結那！平野の目の前で見せてやろう！俺たちがやってたのはセックスじゃなくてただの気分転換のためのごっこ遊びだってことを」

結那「…そうだね先生！友馬！ちやゝんと見てなよww」



結那「友馬く見てる〜♪?ほらっせんせーの
ちんちん入っちゃってま〜す(笑)」

吉田「結那の中お邪魔しま〜す♪」



吉田「平野！セックスしているように見えるかもしれないが全っ然違う事なんだ！」

吉田「あくまでも！ただの「コミュニケーション」の「環……！」

結那「別にちんちん入れたからセックスってわけじゃないしね♪限りなくそう見えるっただけで」

結那「ねー♪」



結那「せんせーのちんちん何気に長くってめっ
ちや奥まで届くんだようw」

「友馬も将来好きな女の子が出来たらこうい
うことするんだからちゃんとしておきなよ
ww」

吉田「先生も平野の恋は全力で応援するぞ！」

結那「友馬♪好きな子が出来たら言っ
てね！私はただの幼馴染だけど友馬の甘
酸っぱい青春、応援するからね♪」



結那「ていうか先生のことなんかマジで全然好きじゃないから安心してね友馬(笑)」

吉田「俺もまた言うけど結那に変な感情なんか一切ないからな(笑)」

結那「あー先生のことなんて別に好きじゃないけどちんちんは気持ちいいー♪」

吉田「あゝ結那のこと好きなんて気持ちはないが結那の中は気持ちいいなゝ♪」



結那「友馬見てみて〜(笑)」

吉田「おお〜…おお…♪」

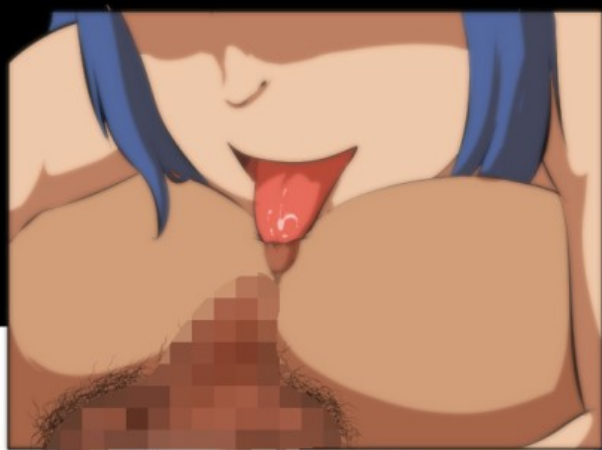


結那「私めっちゃアナル舐め上手いみたいでさwせんせーも私のアナル舐め大好きだもんねw w?」

吉田「幼馴染の平野でも知らなかったかー? 結那の舌は極上だぞ(笑)どんどん奥まで潜り込んできて…おおお!!」

結那「おじゃまします(笑)
ぐりぐりぐりぐりいい」

吉田「~~~~っ!」



結那「アナル舐めってされてる方が一方的に気持ちいいだけってイメージだけど…私はやってる方も楽しいと思うんだけどなあ〜」

吉田「それは結那が変態だからだ…よ…お、おお!」

結那「んんん?なんか言った?変態せんせー?w」

吉田「平野〜!変態なのは結那の方だよな!幼馴染のお前なら分かってくれるだろう?」

結那「友馬あ〜?どう見ても変態は吉田せんせーの方だよね〜?」



結那「変態なのは吉田せんせーの方…♪
認めないと…こっになるぞw」

吉田「はおおお♡平野助けてくれえ♡
ww」

結那「~~~~~ww♪」



吉田「いのっ…いのっ…」

結那「あっあっあっ…あっ♪」

吉田「まったく、調子に乗り過ぎだ結

那！激しめにいくからな♪！」

結那「吉田せんせーごめんなさあ〜い

w許して?？」



吉田「ダメだ！明るく活発なのはいいが
お前はすぐ調子に乗るからな！そこん
ころをよく叩き込んでやる」

結那「ああん…友馬助けて〜ww、せんせ
ーが意地悪するっ♪」

吉田「これは愛の鞭だ♡」

「断じて変な意味ではないがお前を愛
しているからっそやってるんだぞ」

「教師と教え子を繋ぐ青春そのものだ」

結那「んん…♪青春…？」



吉田「そうだ♪もう一度言うが決して異性として好きなんて意味ではなく純粹に教え子としてお前を愛しているからやるんだ、分かったか♪」

結那「吉田せんせー…私のことそんな一生懸命考えてくれてたんだ…♪うれしい♪」
「私も…そんな吉田せんせーのこと、愛してるよ♪」

「あ、もちろん教師としてね？別に男として好きなわけじゃないから(笑)」



吉田「分かってる(笑)そんなことあって
はならないからなw教師と教え子とな
んて(笑)」

結那「うんうんw絶対あり得ないよねw
w」

「でもせんせーのことは慕ってる教師
として愛してるからね♪」

吉田「俺もだ♪結那のことは教え子とし
て愛してるね♪」

結那「せんせー愛してる♡」

吉田「結那、愛してるね♡」



結那「愛してる♡」

吉田「愛してる♡」

二人「愛してる♡愛してる♡愛してる♡
愛してる♡愛してる♡」

二人「~~~~♡♡♡」



友馬「…」

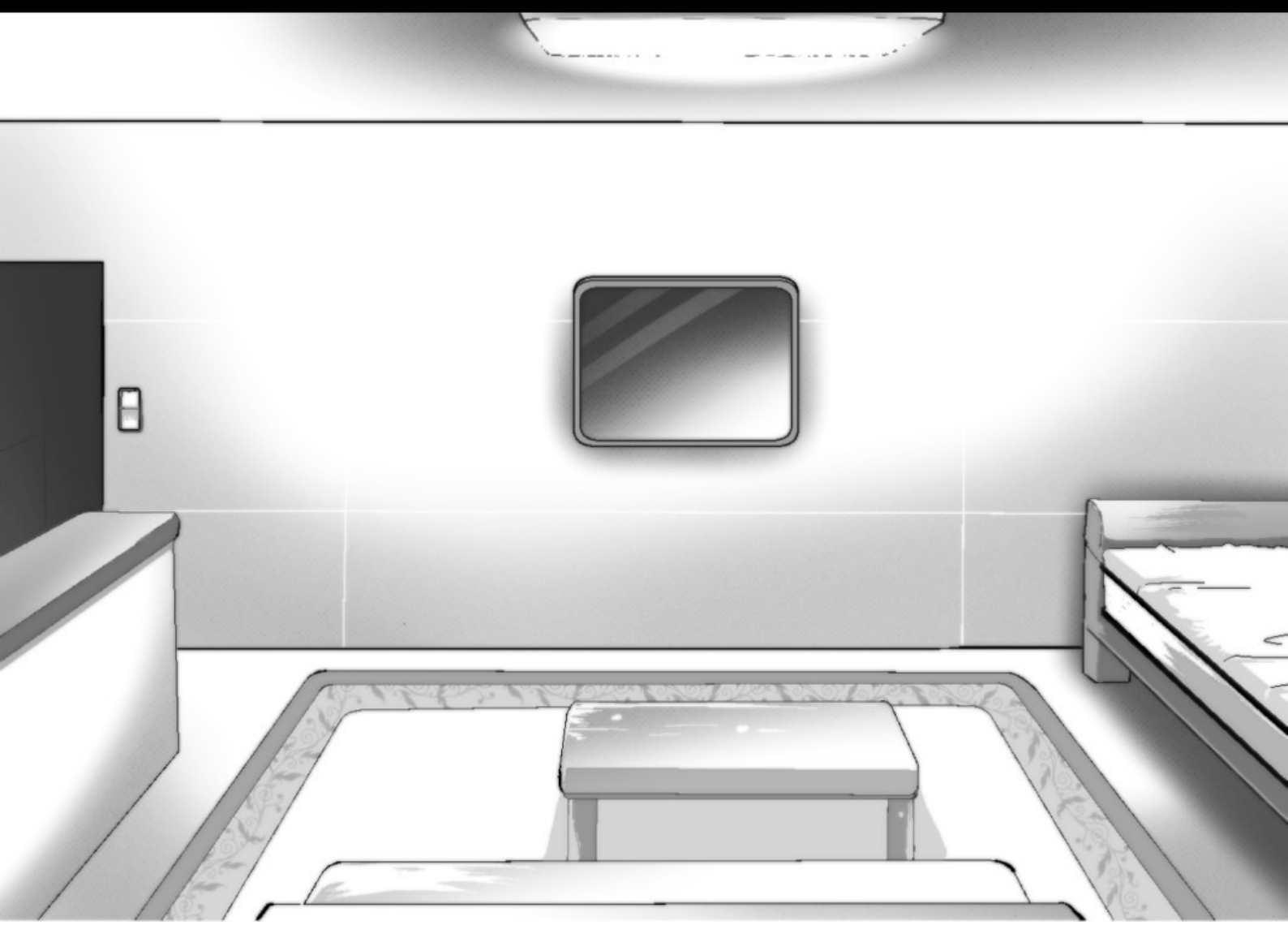
二人はやるだけやった。

思う存分、頭のとっぺんから足の先までしっかり身体が満たされるほど。

そしていそいそと風呂場に向かった。多分一緒に入浴している。

途中からはもう友馬のことなど目もくれず、ひたすらがつつく様にお互いを求めあっていた。

友馬がまた見えなくなってしまったのかと思うほどに。



友馬「…」

傍観していた友馬。

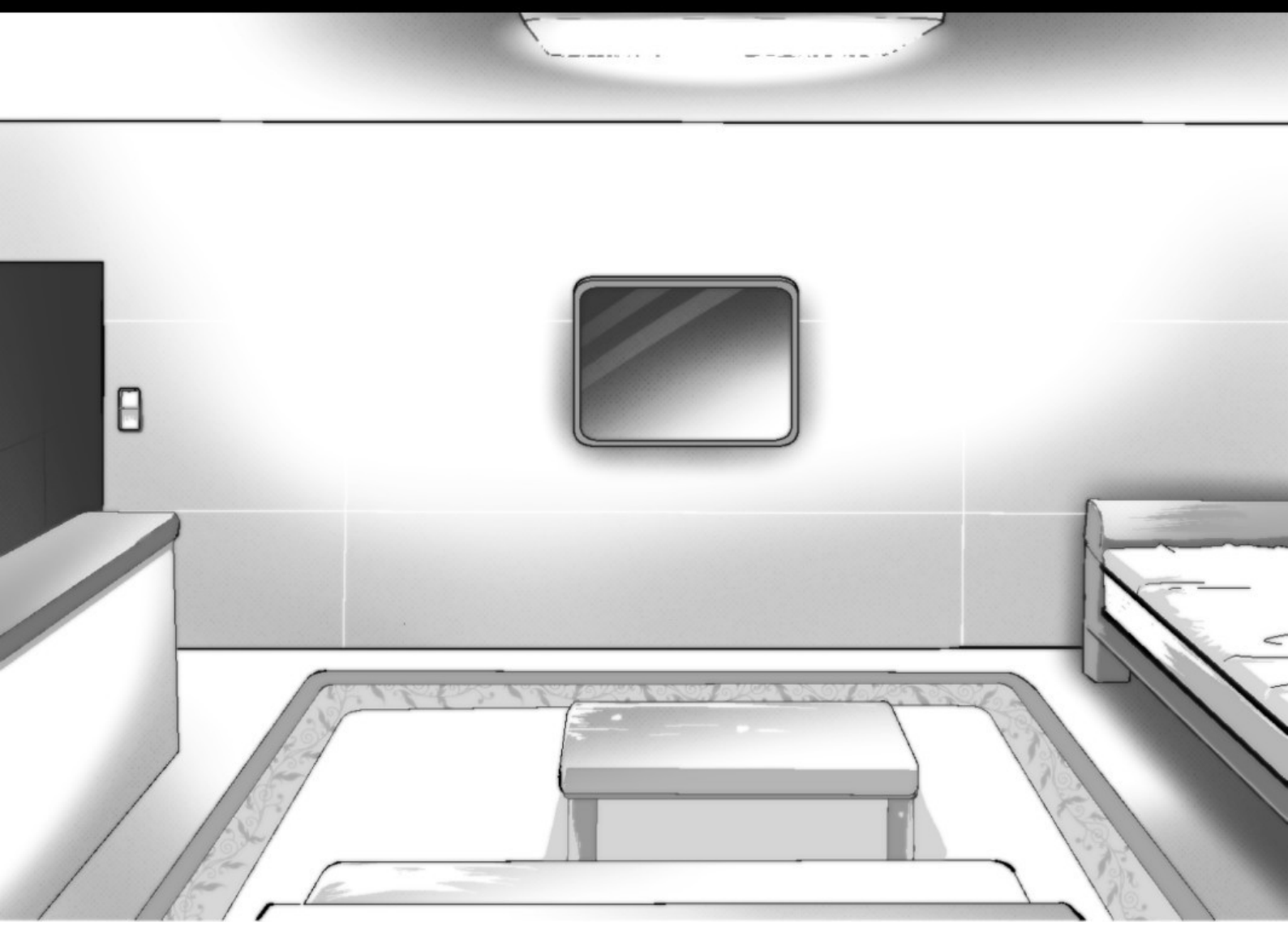
一人残された者。

ピーっと電子音が鳴った。

何事かと自分の空間に視線を移すと、
久しぶりにテレビモニターがついてい
るようだった。

正面に立つ。

『おめでとうございます。二人は完璧
なイチャラブバカップル関係になりま
した』



モニターに映し出されるメッセージ。

…そういえばそんな条件だったな、友馬はボウツとしている頭の片隅の記憶を探る。

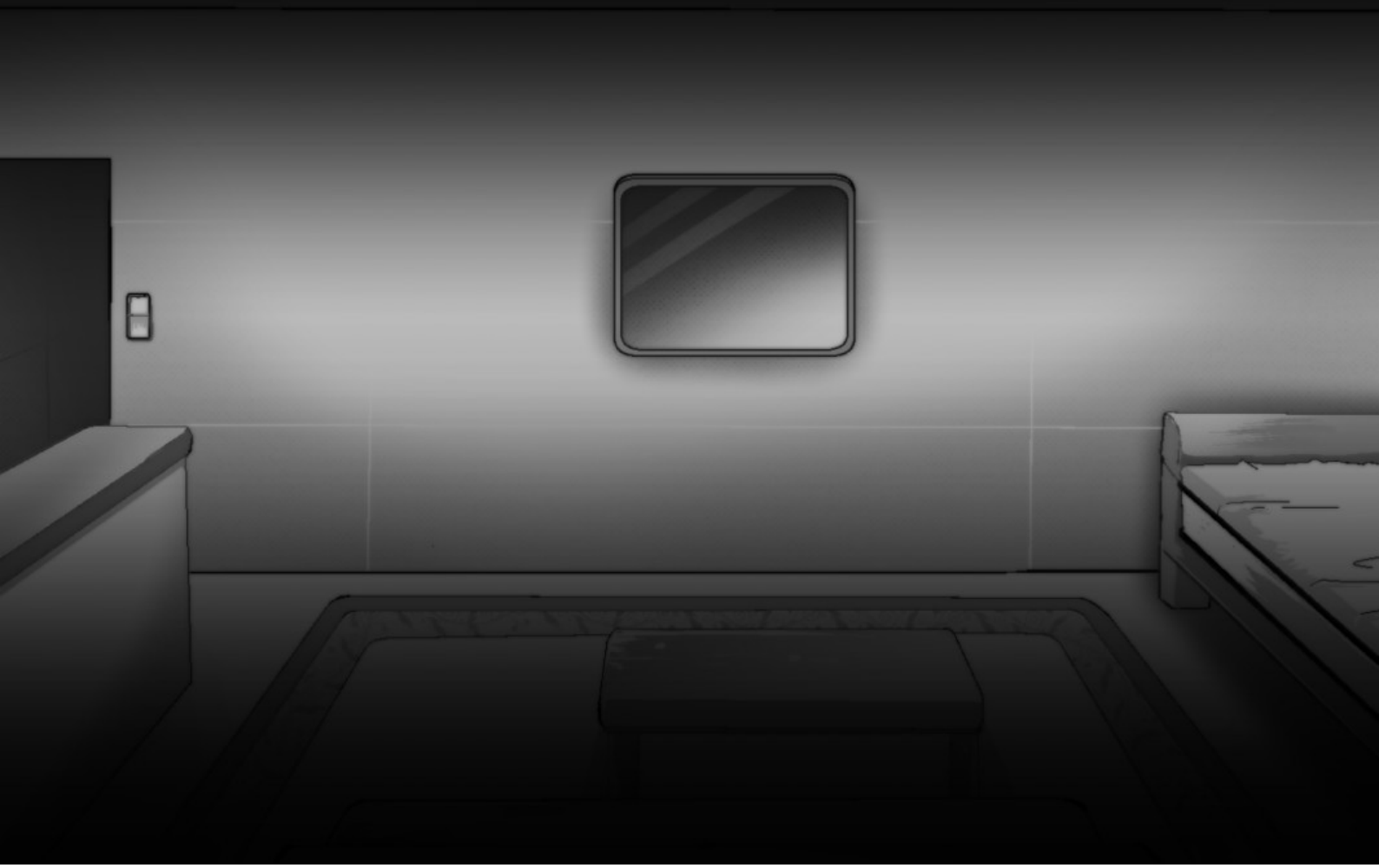
…達成された、らしい。

いや、目の前で見ていた自分が誰よりも分かっていた。

友馬「…っ」

視界がぼやけてきた。瞼が重い。

体に力が入らずその場でぺタンと座り込む。



○

「おいしい友馬っつ！」

地元の学校に通うごく普通の男子生徒、平野友馬（ひらの ゆうま）。
幼馴染である倉原結那（くら はら ゆいな）が声をかける。



友馬「毎日毎日、5分遅刻しやがって…微妙に指摘しようか迷うラインを攻めてくるな」

結那「あははっ何だかんだ結局待ってく
れてるもんね友馬は♪」

家も隣同士で小さい頃からずっと一緒だった。

当たり前のように同じ学校へ進学し、当然のように一緒に登校する。

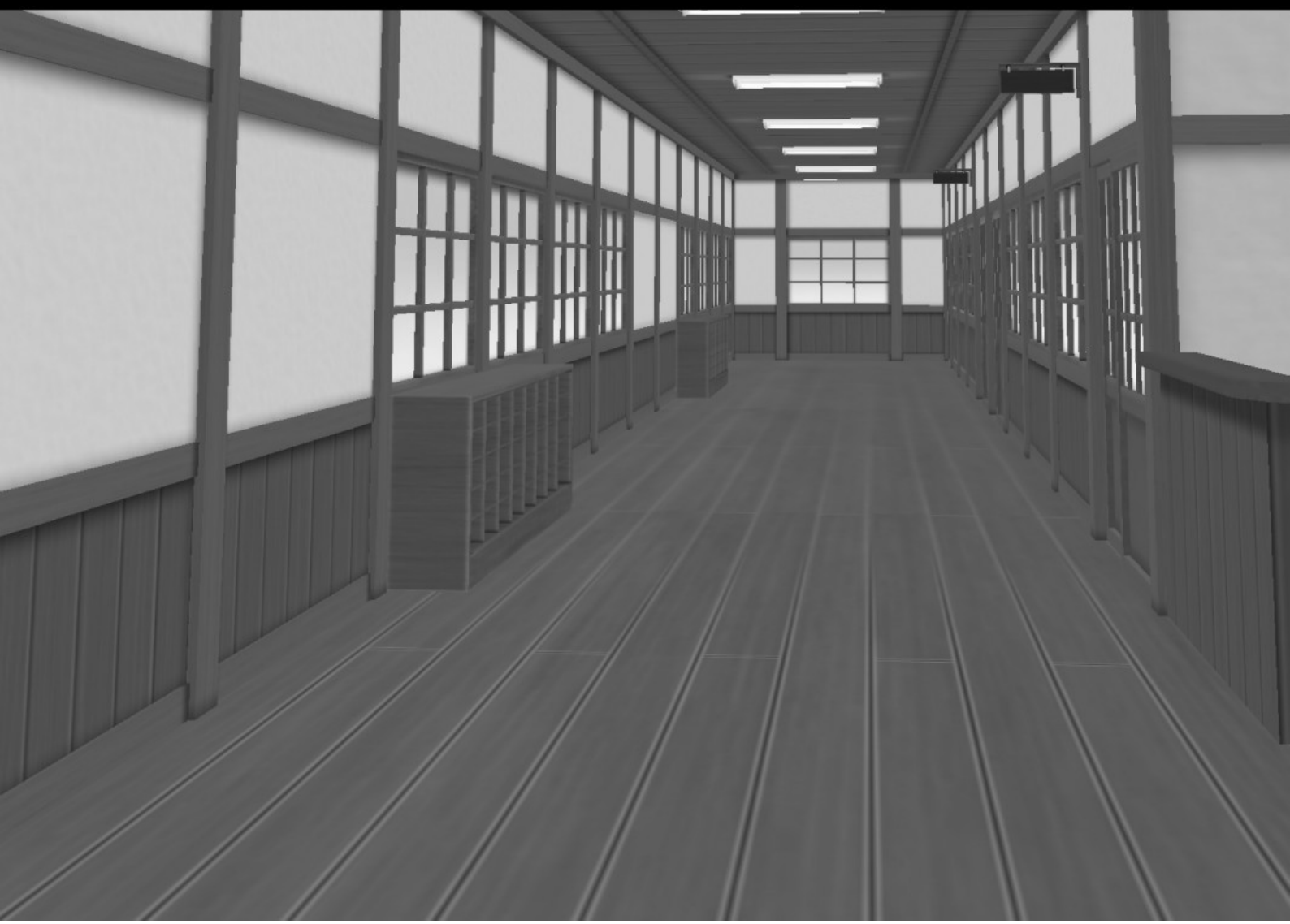


——放課後。

友馬は旧校舎に向かう。

放課後にもなれば生徒も教師もほぼ
出入りすることはない空間。

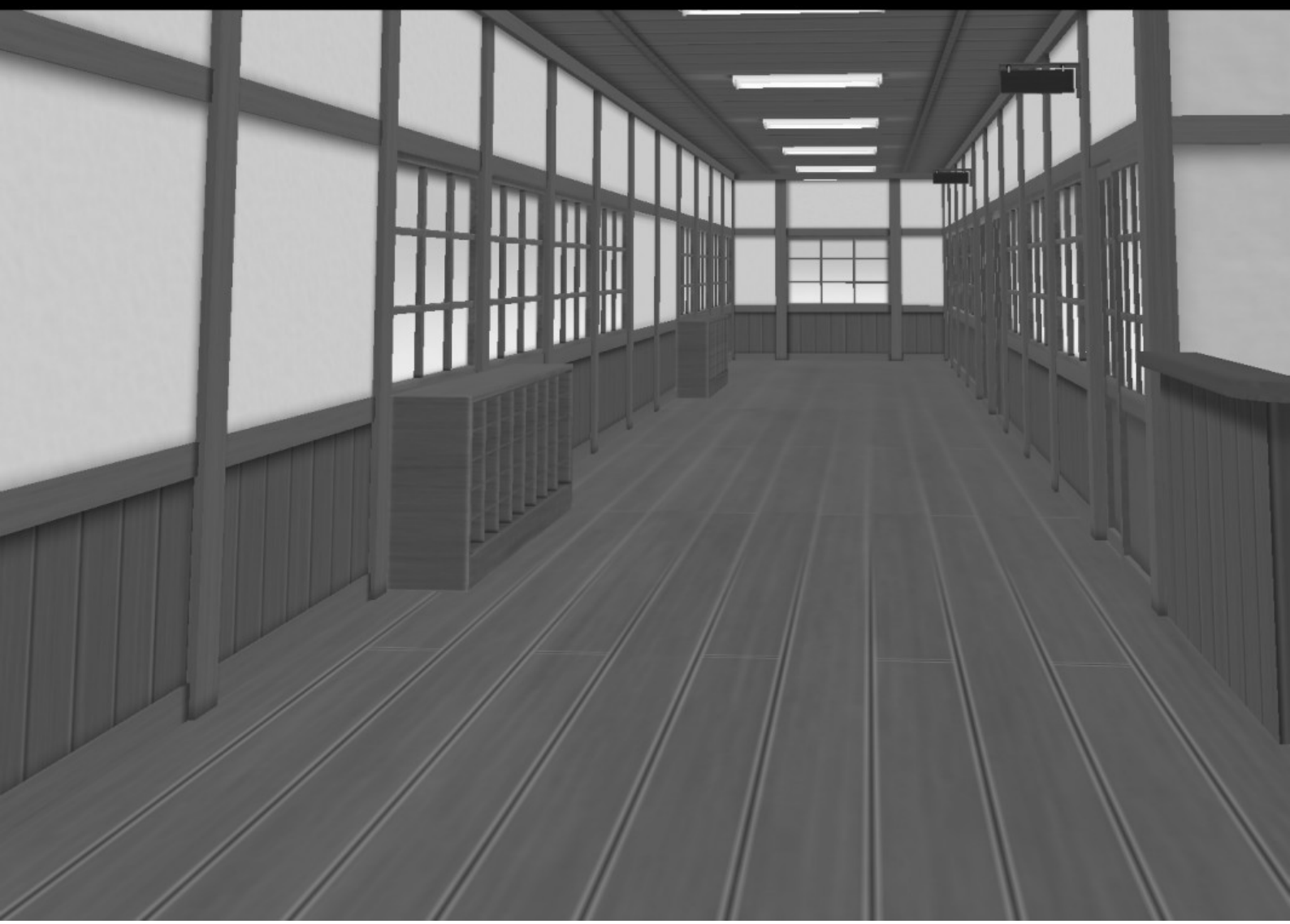
手には校内の自販機で買ったスポー
ツドリンクを二本持っている。



昔の造りなのかやたら入り組んだ廊下を奥に進む。

一階の端の方にある宿直室についた。

——
ガチャ



結那「あっ!!ちよつといきなり開けないで……!」

吉田「だ、ダメだ結那……イク……!!」



結那「……っ!!」

友馬「…悪い、飲み物差し入れしにきたんだけど」



あれから友馬と結那、吉田は何事もなかったかのように現実に戻ってきた。

旧校舎の空き教室にいた。放課後だった。

二人は、友馬に何からどう話せばいいのかわからずにいる感じだった。

壁越しであり、あの不思議な空間だったからこそデタラメなことを平然と言っていたが、現実に戻ってくるとしつかりと空気の変化を感じてしまう。



友馬「…」

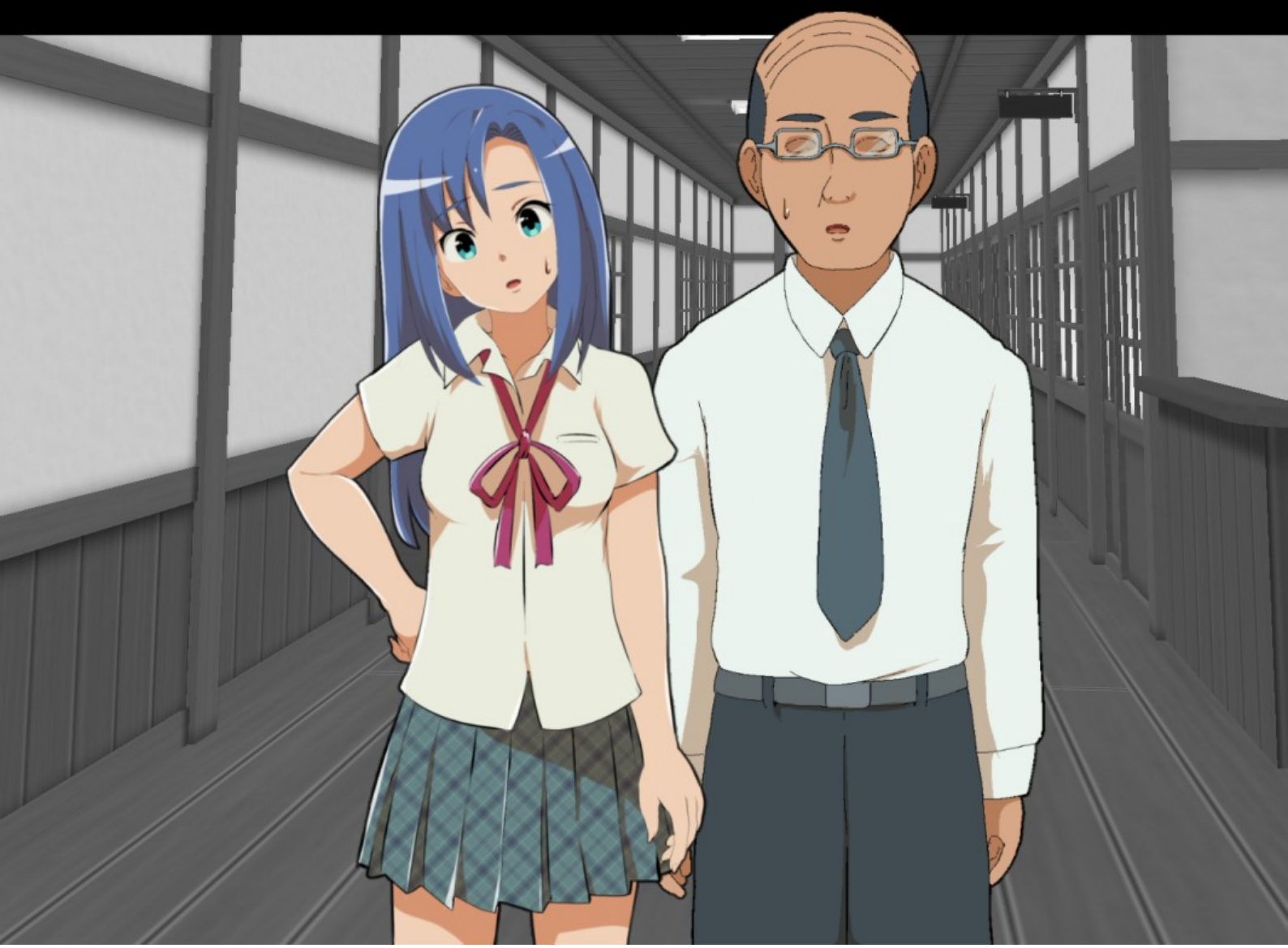
2人はごく自然と近い距離にいた。

「まあ、好きになったなら仕方ないんじゃないか」

と友馬は切り出した。

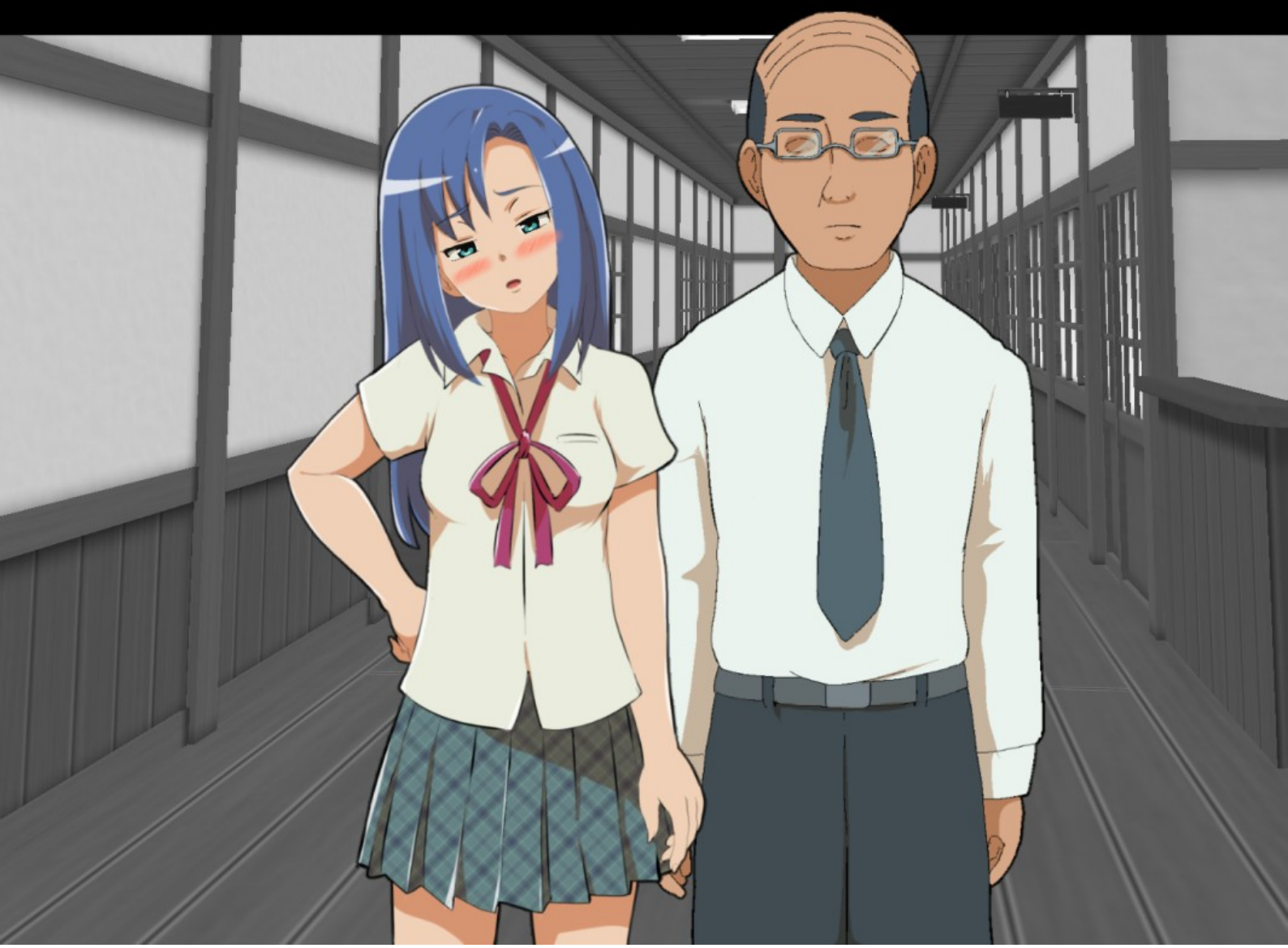
閉鎖空間に閉じ込められるという精神的に窮屈な環境下での、魔が刺した行為が始まりではあったのかもしれない。

しかし、結果として2人が想い合ったのは事実。



「結那たちがこれからどういった関係
になりたいのかは二人次第だと思う。
ただ、俺は応援してやる」

それだけ言った。



結那「吉田せんせーったらねー！絶対私のこと好きなくせに認めようとし
ないんだよ〜」

吉田「結那こそそうだろう！」

結那「私は別にせんせーのことなんかんとも思っていないんだけどね？」

「一言好きって言うてくれたら恋人になってあげてもいいのになあ〜(笑)」



吉田「俺だって結那を特別意識してるなんてことはないぞ、ただ…結那がそういう想いを俺に抱いてくれているなら俺も意識を改めるけどな…!」

結那「友馬あゝ幼馴染としてせんせーにビシッと行ってやってよ!!」

吉田「平野! 幼馴染として結那にはつきり言ってやってくれ!!」

友馬「…」



想いを伝えあうタイミングを外してしまったためか、お互い何となく照れがあるのか、二人の関係はあと半歩といった距離で止まっていた。

当たり前のように体は重ね合っているが。

むしろそういったプレイとして楽しんでいるのかもしれない。



友馬はごゆっくりイチヤついでくれと一言言ってドアを閉めた。

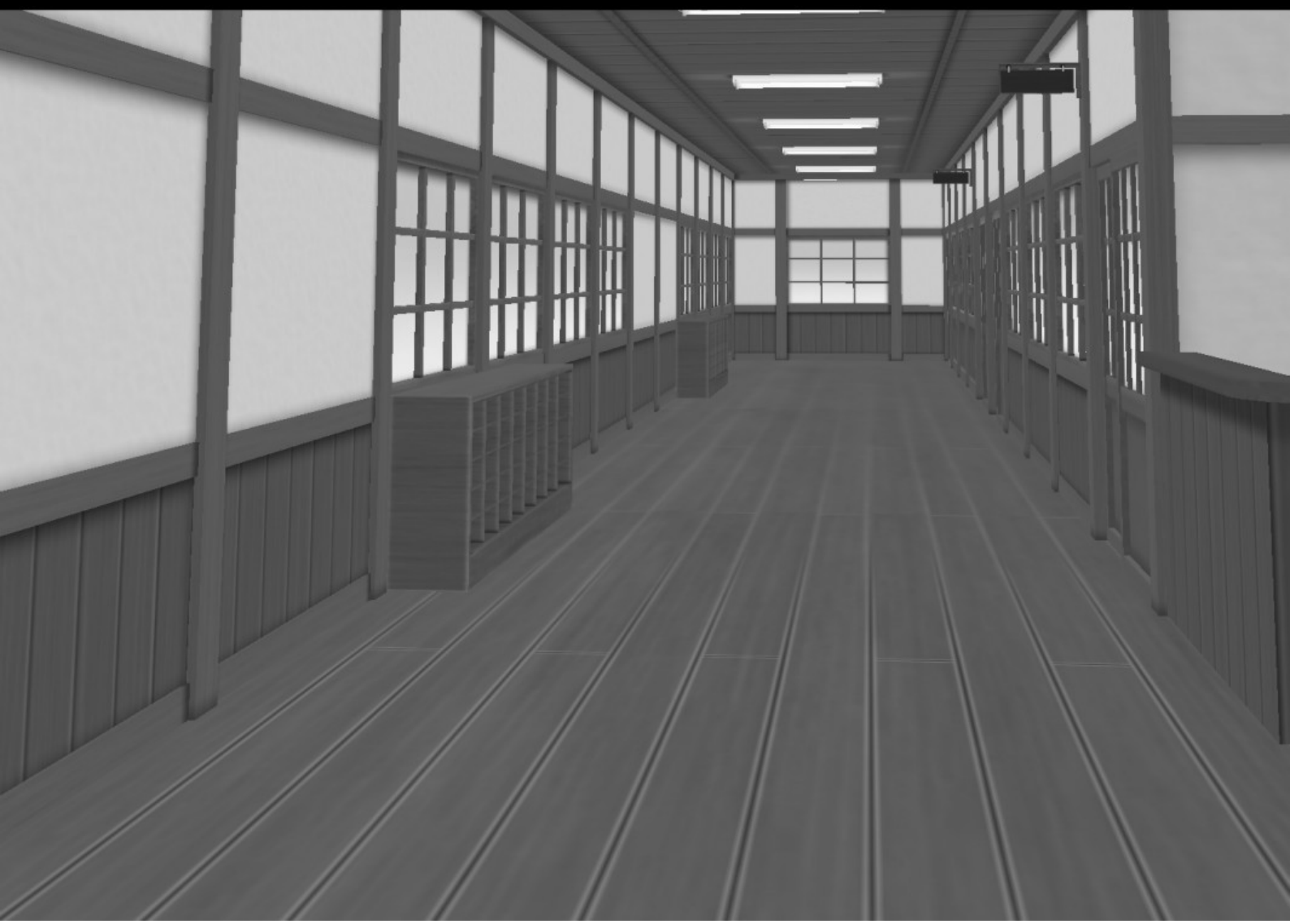
二人の友馬に対する言葉が何やら聞こえたが友馬はスルーする。

しばらくしてからまた二人だけの世界に入ったようにイチヤつく声が聞こえてきた。

結局、なぜあんな空間で過ごすことを強要されたのかは分からない。

誰が、どんな目的で及んだ行為だったのか。

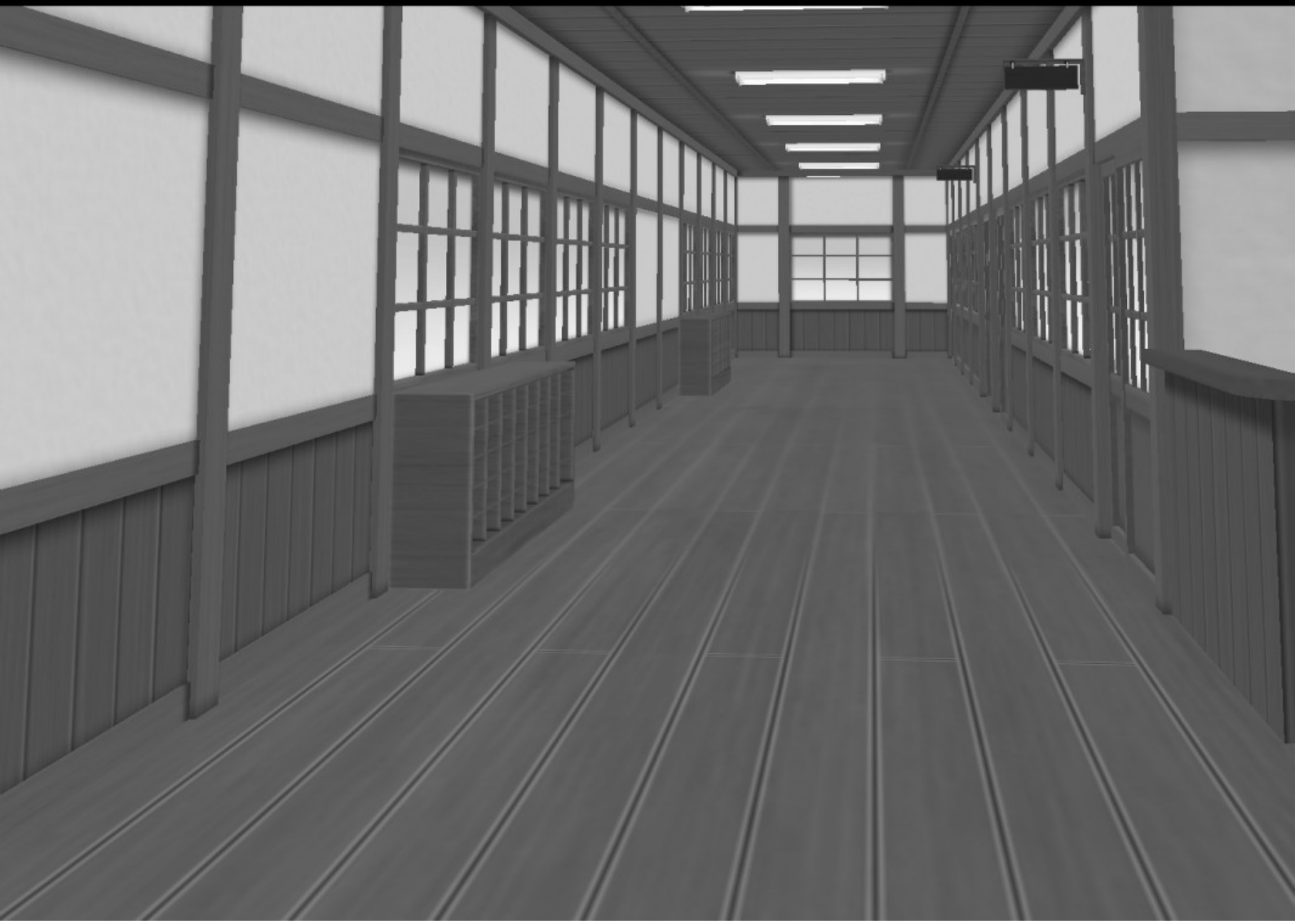
ただ、二人がその過程で愛し合う関係になったのは事実。



教師と教え子という関係上、たとえ人の来ない旧校舎であつても周りをもつと考えて行為に及んでくれとも思う。

：きつと二人でああしたやり取りをしているのが楽しくてたまらない時期なのだろう。

羽目を外し過ぎないように幼馴染として自分が見守らなくては…。



それから学校を卒業した後、半年ほど経ってから
二人はしれっと結婚した。

地元を離れたが、幸せに仲睦まじく暮らしているらしい。



幼馴染として二人に幸あれ

一生ラブラブバカップルでいてくれ

—おしまい—



